



か-16-40



アクセル・ワールド19  
電撃文庫の引力

川原 礫



9784048654388



1920193005509

ISBN978-4-04-865438-8

C0193 ¥550E

ASCII MEDIA WORKS  
アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体 550円

※消費税が別に加算されます



**新作アニメ  
制作決定!!**

電撃文庫  
3000  
タイトル  
突破!!  
大感謝フェス

公式サイトにてPV公開中! 続報を待て!

アニメ公式サイト <http://www.accel-world.net/>

川原 礫 / アスキー・メディアワークス / AW Project

**豪華賞品プレゼント実施中!**  
応募締切 / 2015年11月30日(月) ※当日印刷有効

詳しくはオビ折り返しをご覧ください。

電撃文庫



アニメ『ソードアート・オンライン』  
**劇場映画化決定!!**  
& **新作ゲーム  
開発スタート!**

さらに  
特報!!

特選の **abec画集** も **発売決定!**

表紙キャラを決める人気投票受付中!

2015年10月31日まで受付中!

こちらから  
アクセス



電撃文庫 アスキー・メディアワークス 550円(税別)



か-16-40



加速世界  
アクセル・ワールド19

川原 礫



電撃文庫



9784048654388

ISBN978-4-04-865438-8

C0193 ¥550E



1920193005509

ASCII MEDIA WORKS  
アスキーメディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体550円

※消費税が別に加算されます



# アクセル・ワールド 19

## 暗黒星雲の引力

川原 礪  
イラスト/HIMA  
デザイン/ビィビィ



なぜなら  
ブレイン・バースト2039は、  
ゲームであって  
ゲームではないからだ」

「シルバー・クロウ。  
このゲームの設定が矛盾しているという、  
お前の感覚は正しい。」

### トリリード・ テトラオキサイド

ハルキが《古城》に入ったアバター。  
トリリードは偽名で、本当のアバター名は  
《アズール・エアー》。

### グラフィット ・エッジ

元《ネガ・ネビュラス》幹部  
《四元素(エレメンツ)》の一人。  
目的も正体も  
謎に包まれている。

「あれが最後の神器、  
ザ・フラクチュエーティング・ライト……」

「ここからじゃ、  
どんなアイテムなのかは  
解らないわ……」

「これを守る八神の戦闘力は  
四神を超えているはずだ」

### シルバー・クロウ

新生《ネガ・ネビュラス》のメンバー。  
加速世界で唯一の《飛行能力》を持つ。  
本体は有田千景(アリタハルキ)。

### スカイ・レイカー

新生《ネガ・ネビュラス》のメンバー。  
《心意》をハルキに伝授した《お姉様》。  
本体は倉崎楓子(クラサキフウコ)。

「な、何のまねですかしもべ！  
しもべがそんな不埒な行いをして  
いいと思ってるのですかしもべー！」

## メタトロン

加速世界の四大ダンジョンの一つ  
《芝公園地下大迷宮》の最奥に潜む  
大天使の本体。  
シルバー・クロウを  
下僕扱いする。

「たったいまから、  
チーム・プロミネント始動するよ！  
みんな頑張ろう！」

## 生沢真優

イクザワ・マユ  
ハルユキとタクム、  
チユリのクラスメイト、  
クラス委員長でもある。

「おー」

「おー」

## ハルユキ

イカールカースト  
中学内務差最底辺の少年。  
新生《ネガ・ネビュラス》のメンバー。  
デュエルアバターは  
《シルバー・クロウ》。

## タクム

ハルユキの親友、通称ハカセくん。  
黒雪姉率いる  
新生《ネガ・ネビュラス》のメンバー。  
デュエルアバターは《シアン・ハイル》。





三ツ登聖実  
アバター：《ミッドモント》



奈胡志帆子  
アバター：《ショコラ・ハベッター》



由留木結芽  
アバター：《プラム・フリッパー》



黒雪姫  
アバター：《ブラック・ロータス》



クサカベ 留  
倉崎楓子  
アバター：《スカイ・レイカー》



???



シノムツキ  
四埜宮謡  
アバター：《グー・スライダー》



クサカベ リン  
日下部 綸  
アバター：《アッシュ・ローラー》



クラシマ チュリ  
倉嶋千百合  
アバター：《ライム・ベル》



トミミ  
永見あきら  
アバター：《アクア・カレント》

## 純色のレギオン

### 黒のレギオン:ネガ・ネビュラス

マスター:ブラック・ロータス(黒雪姫)

幹部名:《四元素(エレメンツ)》

風:スカイ・レイカー(倉崎楓子)

火:アーダー・メイデン(四笠宮謡)

水:アクア・カレント(氷見あきら)

ライム・ベル(倉嶋千百合)

シアン・バイル(篠 拓武)

シルバー・クロウ(有田春雪)

### 赤のレギオン:プロミネンス

マスター:スカーレット・レイン(上月由仁子)

幹部名:《三獣士(トリプレックス)》

第一位:ブラッド・レパード(掛居美早)

第二位:カシス・ムース

第三位:シスル・ポーキュバイン

プレイズ・ハート

ビーチ・パラソル

オーカー・ブリズン

マスタード・サルティシド

### 青のレギオン:レオニース

マスター:ブルー・ナイト

幹部名:《二剣(デュアリス)》

コバルト・ブレード(高野内琴)

マンガン・ブレード(高野内雪)

フロスト・ホーン

トルマリン・シェル

### 緑のレギオン:グレート・ウォール

マスター:グリーン・グランデ

幹部名:《六層装甲(シックス・アーマー)》

第一席:グラファイト・エッジ

第二席:ビリジアン・デクリオン

第三席:アイアン・バウンド

第四席:リグナム・パイタ

第五席:サンタン・シェイファー

第六席:???

アッシュ・ローラー(日下部繪)

ブッシュ・ウータン

オリブ・グラブ

ジェイド・ジェイラー

### 黄のレギオン:クリプト・コスミック・サーカス

マスター:イエロー・レディオ

レモン・ビエレット

サックス・ローダー

### 紫のレギオン:オーロラ・オーバル

マスター:パープル・ソーン

幹部名:???

アスター・ヴァイン

### 白のレギオン:オシタリ・ユニヴァース

マスター:ホワイト・コスモス

幹部名:《七連矮星(セブントワース)》

アイボリー・タワー

## その他のレギオン

### 加速研究会

ブラック・バイス

アルゴン・アレイ

ダスク・テイカー(能美征二)

ラスト・ジグソー

サルファ・ポット

ウルフラム・サーペラス(災禍の鎧マークII)

ブチ・バケ

マスター:ショコラ・バベッター(奈胡志帆子)

ミント・ミトン(三登聖実)

ブラム・フリッパー(由留木結芽)

### 演算武術研究部

アルミニウム・バルキリー(千明ちあき)

オレンジ・ラプター(祝 優子)

バイオレット・ダンサー(来摩胡桃)

アイリス・アリス(リーリャ・ウサチョヴァ)

所属不明

マゼンタ・シザー(小田切累)

アポカド・アボイダ

トリリード・テトラオキサイド

ニッケル・ドール

サンド・ダクト

クリムゾン・キングボルト

ラグーン・ドルフィン(安里琉花)

コーラル・メロウ(糸洲真魚)

オーキッド・オラクル

ブリキ・ライター

## エネミー

### 四聖

大天使メタトロン(芝公園地下大迷宮)

女神ニクス(代々木公園地下大迷宮)

???

???

《四方門》の四神

東門:セイリユウ

西門:ビャッコ

南門:スザク

北門:ゲンブ

《八神の社》の八神

???

## デュエルアバター&エネミーリスト

# カラアゲ弁当 ①9 れき



かわはら れき  
**川原 礫**

「唐揚げ」と「空揚げ」だと「唐」のほうが馴染みある感じでしたが、出版業界のデフォルトは「空揚げ」みたいですね。からあげ食べたいですね。

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1～19

ソードアート・オンライン1～16

ソードアート・オンライン プログレッシブ1～3

＜アイソレータ＞  
絶対ナル孤独者1、2

---

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵は今シリーズが初のイラストレーター。『電撃萌王』小冊子への寄稿を見た文庫編集者が、今回の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。





対戦格闘ゲーム《ブレイン・バースト2039》のプレイヤー、すなわちバーストリンカーとなるための方法はたった一つ。

すでにバーストリンカーである者から、BBプログラムをコピー・インストールしてもらうこと。その際には、双方のニューロリンカーを有線直結しなければならない。インストールに成功すれば、コピー元とコピー先の二人はかりそめの——しかし加速世界では最も強固な絆である《親子》関係によって結ばれることとなる。

ハルユキの《親》は、黒の王ブラック・ロータスこと黒雪姫。

四埜宮謡の《親》は、ミラー・マスカートと実兄の四埜宮竟也。

日下部綸の《親》は、スカイ・レイカーこと倉崎楓子。

その楓子の《親》は——。

……そういえば、僕、レイカー師匠の親の話って聞いたことないな……。

傍らに立つ楓子にちらりと眼をやりつつ、ふとそんなことを考えかけたハルユキだったが、横道に逸れそうになる思考を慌てて現在の状況に引き戻す。

二〇四七年七月十八日木曜日、午後五時。

ハルユキと楓子<sup>フウコ</sup>は、有田家のリビングから無制限中立フィールドにダイブし、大天使メタトロンの力を借りて帝城南門を突破、現実時間で約一ヶ月ぶりに帝城内部への侵入を果たした。そこで再会したのは、ハルユキの友達であるトリード・テトラオキサイドと、もう一人。

緑<sup>グリーン</sup>のレギオンの幹部集団《六層装甲》の第一席にして旧ネガ・ネビュラス《四元素<sup>エレメンツ</sup>》の一角《矛盾存在<sup>パラドクス</sup>》グラフアイト・エッジ――。

リードはハルユキたちに、グラフを紹介した。剣の師であり、《親》でもあると。

それはつまり、謎多き若武者トリードにプログラムを与えたのはグラフだということだ。そしてコピー・インストールを行うには、現実世界で互いのニューロリンカーを直結する必要がある。

「……………リード……それに、グラフさん……………」

いまだ驚きの醒めやらぬまま、ハルユキは並び立つ二人に問いかけた。

「二人は……………リアルでの知り合い、だったの……………」

すると、リードが少し困ったようにグラフを見上げ、グラフは軽く肩を上下させながら発言した。

「んー、そのあたりはおいおい説明するよ、クロウ。それより先に訊きたいことがありそうな顔を、さつきからレツカがしてるからな」

「へ……………」

改めて隣<sup>となり</sup>のスカイ・レイカーに眼を向けたハルユキは、反射的にびくっとアバターを強張<sup>こわば</sup>らせた。

茜色<sup>あかねいろ</sup>のアイレンズに、ある種の光が宿っている。静かだが底知れない迫力を秘めたその眼光

は、《本当は怖いレイカー先生》が、本気の二歩手前まで怒っていることを示すものだ。

「グラフアイト・エッジ」

楓子が正式なアバター名で呼びかけた途端、グラフがじりつと三センチばかり後退した。

「な……………何かな、レツカ？」

「あなた、この場所にいるということは……………帝城北門、四神<sup>しじん</sup>ゲンブによる無限EK状態からはとつくに脱出しているわけよね？」

「ま……………まあ、厳密に言えば、そうかな？」

「それは、いつごろの話？」

「じ……………実は、三年前の帝城攻略戦のあと、わりとすぐに……………」

「なら……………なぜもつと早く、そうと言わなかったの！」

そう叫んだ瞬間、スカイ・レイカーの華奢なアバターから青白い炎にも似たオーラが強烈に放射され、ハルユキは再びびくんと凍み上がった。右肩に乗っかって周囲の様子を観察していたらしいメタトロンのアイコンでさえも、びたりと動きを止めた。

「あなたが無限EKに陥<sup>おと</sup>ってしまったことを、メイデンがどれほど気に病<sup>や</sup>んでいたか知らない

わけではないでしょう!? あの子は、あなたを助け出すために、第四象限の……大規模殲滅型心意技の修行までしていたのよ!! 誰よりも心優しい、あの子が!!」

それは、事実だ。

前回の帝城脱出作戦のさなか、アーダー・メイデン——四禁告誡は、大型の衛兵エネミーを排除するために、地面をマグマの池に変えるという恐るべき心意技を発動した。あの時、彼女は言っていたはずだ。この技は、四神ゲンブ専用開発したのです、と。

第四象限、つまり負の心意技は、使えば使うほど術者を《心の穴》へと引き込もうとする。

具体的には、自分や他人へのネガティブな感情を増幅し、人格を歪めてしまうのだ。

穴の奥の闇に捕らわれてしまえば、その先に待つのはただひたすら敵を求め、自分自身をも破壊するまで戦い続ける無明の修羅道だ。かつて初代クロム・ディザスターとなってしまったクロム・ファルコンのように。

……そう言えば、ファルコンが強化外装《ザ・デイスティニー》を見つけたのは、この帝城なんだよな……。

と、今度は過去に彷徨い出しそうになった思考が、グラフの少しばかり真剣味の増した声に引き戻される。

「そうか……デンデンが……。そりゃ悪いことしちゃったなあ……」

左手でがりがりとヘルメットを掻きつつ右手を軽く持ち上げ、双剣使いは謝罪半分、言い訳

半分の言葉が続けた。

「確かに、いちおうはゲンブの無限EKから脱出できたことを、ロッタたちに伝えなかったのは俺の怠慢だ。ただ、伝えようにも方法がなあ……。俺、ロッタやレッカのメルアドとか知らないし……かと言って、いきなり対戦ふっかけるのもナンだし……」

「直接顔を合わせなくても、方法なんか幾らでもあるでしょう!」

即座に楓子の雷が落ち、グラフのみならずハルユキもヒツと首を縮める。

「グレート・ウォールはよく領土戦で杉並を攻めてくるんだから、そのチームに伝言させてもいいし、あるいは単に無制限中立フィールドで昔みたいに派手なことをやらかすだけでもいいはずよ。あなたが現れて一暴れたっていう話を聞けば、無限EKから脱出できたことだけは解るんだから」

「ご……ごもつとも。ただ、二番目の案はちと無理だな……」

「どうして?」

詰め寄るレイカーに、グラフは恵まれる様子もなく答える。

「だって、無限EKから脱出できたって言っても、それは帝城の外側にじゃなくて内側に……だからさ」

「……内側?」

「そ。いくら俺でも、一人でゲンブの攻撃をかわしながら橋の外まで逃げ切るのは無理だよ。」

けど、北門なら出現地点のすぐそばだからさ。そっちならまだ可能性があるかなーと思って、やってみたらなんとかなったつつうワケ。つまり、俺が無制限フィールドで活動できるのは、この帝城の中だけってことに……」

「で……でも、それはおかしいですよ!」

グラフの言葉を聞いたハルユキは、思わずそう叫んでしまった。

双剣使いのフェイスマスクがひょいと向きを変える。決して凄んだりしているわけではないのに、鋭利な形のゴーグルを向けられた途端、完全なる自然体であるがゆえの迫力——いわば底知れなさのようなものを感じてわずかに息が詰まる。

胸に溜まった板想の空気をゆつくりと吐き出しながら、ハルユキはまず確認した。

「えっと……グラフさんは、三年前の……第一期ネガ・ネビュラスの帝城攻略戦の後に帝城に入って、そこでリードに出会って《子》にしたわけですよ?」

剣使いの師弟コンビが同時にこくりと頷くので、先を続ける。

「……四神を倒さずに四方門から帝城に入るには、門の内側の封印プレートを事前に破壊しておく必要があるはずですよ。リードが、僕たちのためにそうしてくれたみたい。けど、グラフさんが門を突破しようとした時にはリードはまだバーストリンカーじゃなくて、つまり中から封印プレートを破壊できる人は誰もいないはずで……いや、先にリードを《子》にしてから、封印を斬ってもらえばいいのかな……でもその場合、リードはどうやって中に……」

だんだん自分が何を言っているのかよく解らなくなってきたハルユキは、語尾をもこもこ口の中に濁しながら二人の顔を交互に見た。

トリリードは、今度も何も言わなかったが、淡い微笑みの気配を漂わせてちらりと師を見た。いっぽうグラフは「んんん」としばし唸ってから、後方にそびえる巨大な建物に顔を向け、言った。

「とりあえず、落ち着けるとこに移動しないか? ここは、そろそろ衛兵エネミーが復活するかもだからさ」

「賛成です」

と即座に答えたのは、楓子でもハルユキでもなく、右肩に乗るメタトロンのアイコンだった。「あの城……お前たちは《本殿》と呼ぶのですか? 私は早くあの中を見たい。情報交換は後回しにして、速やかにあそこまで移動しなさい」

「……なんだか、ますます高飛車つぶりに磨きがかかってきてるわね……」

ようやく怒りの色を取めた楓子が、やれやれとばかりにかぶりを振りつつ呟いた。

一ヶ月前、ハルユキと諷が帝城に突入した時のフィールド属性は《平安》ステージであり、脱出時の属性は《魔都》ステージだった。

三度目の今回は《月光》ステージだが、変化しているのはオブジェクトのデザインだけで、



地形そのものは変わらない。帝城南門前の広場からは北にまっすぐ広い道が延び、その先には巨大神殿と化した本殿が厳かに鎮座している。

前回、譚と一緒に本殿を目指した時は、通路を恐ろしい衛兵エネミーが巡回していたので、左右に立ち並ぶ円柱の陰から陰へと神経を磨り減らしつつジャンプしなければならなかった。しかし今回はその衛兵たちをグラフとリードが排除してくれたため、古代の都になぞらえれば『朱雀大路』ということになるのだから道の真ん中を堂々と歩くことができる。

まったくもってありがた申し訳ない話——ではあるものの、そう感じるほどに疑問も湧いてくる。

少し前を歩くグラフとリードは、いったいなぜ、ハルユキと楓子が今日この時間に帝城突入を試みることを知っていたのだろうか。ハルユキが事前に打ち明けたのは楓子ひとりだけで、それも作戦開始のわずか数十分前だ。とても楓子から誰かに連絡するような時間はなかったし、またそうする理由も彼女にはない。先の怒りつぶりを見れば、ここでグラフと再会するなどと思っていなかったことは明らかだ。

では、グラフたちは、ハルユキの行動を予測して待ち受けていたのだろうか？

自分が《わかりやすい奴》だという自覚はあるので、行動を読まれることが絶対にないとは言えないが、それでも無制限中立フィールドで誰かを待つのは現実的ではない。何せこの世界では、一千倍に加速された時間が流れているのだ。どんなに我慢強いバーストリンカーでも、

来るか来ないか定かでない誰かを待ち続けられるのは半年が限界だろう。東京ミッドタウン・タワーを守護していた神獣級エネミー・メタトロンを倒すために《地獄》ステージへの変遷を待っていた緑の王グリーン・グランデと六層装甲第三席のアイアン・パウンドも、三ヶ月でギブアップしてはいたはずだ。

——まあ、グッさん一人だけなら、一年くらい耐えちやうのかもだけど。

そんなことを考えてから、僕には絶対無理だとぶるぶる頭を振る。グラフとリードの師弟がハルユキ以上の我慢強さを備えていることは確実だが、それでも闇雲に待ち惚けしていたとはとても思えない。恐ろしく二人は、何らかの手段で、しかもかなりの精度でハルユキたちの作戦を察知したのだ……。

「……とてもきれいな場所ですね」

不意に左隣でそんな声が聞こえて、ハルユキは視線を動かした。

背中のゲイルスラスタを除装し、白い帽子とワンピース姿に戻った楓子が、感慨深そうに周囲を眺めている。デュエルアバターとしてはかなり生身に近い造形のフェイスマスクから、ごく小さな囁き声が零れる。

「サツちゃんのための作戦ですけど、それでもいまここに彼女がいないのがとても残念だわ。加速世界の真実を知りたい……誰よりもそう願っているのはサツちゃんなのに……」

「……………はい……………」

ハルユキも、同じ思いを噛み締めながら頷いた。

飛行能力を持つシルバー・クロウとスカイ・レイカーが全エネルギーを振り絞ってぎりぎり四神スザクの守護領域を突破できたのだから、三人目を同行させる余裕がなかったのは確かだ。それでも、黒雪姫を連れてくることであれば、どんなに喜んでくれただろう。

以前、謡と交互に説明した帝城内部での話を、眼を輝かせて聞いていた黒雪姫の様子を思い出して、ハルユキは俯きかけた。その途端、右肩できっぱりとした声が響いた。

「まったく、なぜおまえたちはそんなふうにな、できなかったことに囚われて思考を停滞させるのですか。実に非生産的です。そんな時間があるなら、これからできるであろうことを考えて思考回路を活性化させなさい。残念ながら私の言語ライブラリに、その状態を的確に表現する言葉はありませんが」

普段より一・二倍ほど早口な大天使メタトロンの台詞に、ハルユキはこっそり苦笑し、次に感心した。確かに彼女の言うとおりだ。過去を顧みることが無駄だとは思わないが、それ以上に未来へと眼を向けるべきだろう。

「その状態は、わくわくする、って言うんだ」

右肩に顔を寄せてハルユキがそう囁くと、立体アイコンが一瞬不規則に明滅した。

「……憶えておきましょう。では、改めて命じます。クロウ、そしてレイカー、おまえたちはこの状況に全力でわくわくするべきです」

「……まさか、エネミーに『わくわくしろ』なんて言われる日が来るとは思わなかったわね……」

という楓子の嘆き声に、「ビーイングと言いなさい」ときっちり反応してから、メタトロンはいっそう口早にまくし立てた。

「我々はいま、『フレイン・パースト2039』の始まりにして終わりの場所、エリア00にいますのですよ。地形オブジェクトひとつ取っても実に興味深い！ 気付いていますか、現在のフィールド・アトリビュションHL05……お前たちの言う『月光ステージ』ではオブジェクトの耐久度は平均以下のはずなのに、ここでは全て最大値に設定されています。ことに建築物の主要構造体は全て破壊不能属性……恐らく、私の『トリスアギオン』でも破壊は不可能でしょうね」

「……きみが、自分にできないことをそんなに嬉しそうに言うなんて、ほんとにわくわくしてるんだね……」

「何やら無礼な発言があった気がしますが許しましょう。それより後ろを見なさい、警護役のビーイングが再生するようですよ」

「そんなにあれこれ見ろって言われても追いつかないよ……って」

石畳に火花を散らしながら振り向き、即座に「うん、うん」と叫ぶ。まだほんの五十メートルほどしか離れていない南門手前の広場に、大規模な湧出エフェクトが発生しつつある。

「ふむ、なかなかの情報密度ですね。加速研究会の本拠地<sup>ほんきょち</sup>で使役<sup>しやく</sup>されていた衛兵<sup>えいへい</sup>ビーイングのように、私の命令で退けるのは困難<sup>くわんなん</sup>でしょう」

「それは残念……って、そ、そんなこと言ってる場合じゃないよ！」

再びぎゅんっと体を反転させ、先を歩くグラフアイト・エッジに声を掛ける。

「あ、あの、グラフさん！ ビーイング、じゃなくてエネミーが再生しそうです！」

すると、肩越しにちらりと振り向いた双剣使いは、おどろおどろしい湧出エフエクトを一瞥<sup>いちめつ</sup>してからのんびりと答えた。

「平気平気、こんだけ離れてれば攻撃<sup>こうげき</sup>化<sup>け</sup>しないから」

「で、でも、エネミーだって一箇所に止まってるわけじゃないんじゃないかと……」

「平気平気、あいつら移動遅いから」

「け、けど、あの一体で終わってわけでもないんじゃないかと……」

「平気平気………あ、平気じゃなかった」

グラフの言葉に恐る恐る後ろを見ると、たった十メートルしか離れていない場所に、第二の湧出エフエクトが発生し始めたところだった。見つければ確実に攻撃<sup>こうげき</sup>される距離<sup>きょり</sup>だ。

「ほ、ほらあああああ！」

「しやーない、全員タッシュュ！」

叫ぶやいなや、双剣使いは灰色の残像が残るほどのスピードで本殿めがけて遁走<sup>とんそう</sup>し始めた。

「ちよおおおおお！」

そりや無責任でしょう！ と思いつながらハルユキが慌てて追いかけると、隣<sup>となり</sup>を走るリードが申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません、クロウさん。先生、いつもあんな感じなんです」

「い、いや、リードが謝ることないけど……」

そのやりとりを後ろで聞いていた楓子が、しみじみとした口調で言った。

「アレと一緒にいたら、万事<sup>ばんじ</sup>こんな感じだから早めに慣れたほうがいいわよ、鴉<sup>カラス</sup>さん」

数十秒のダッシュで無事に本殿正面の広場に到着したハルユキは、はふーと長く息を吐いた。とつくに先着していたグラフアイト・エッジは、額<sup>ぬで</sup>に手をかざして南門のほうを眺めている。

「おー、がんがんリポップしてるなあ。あれをまた掃除<sup>そうじ</sup>すんのか……おいクロウ、レッカも、帰りの時は手伝えよな」

「え………」

あのエネミー軍団を全部倒すの!? と固まるハルユキの代わりに、楓子が言い返す。

「一度できたことなら二度目もできるわよね、グラフ」

「あー、ひつでえなあ。俺とリードが、お前らのためにどんだけ頑張って掃除したと思っただよ……」

「はいはい、それについてのお礼はそのうち、精神的にね」  
 むぐっと押し黙るグラフに代わって、リードが口を開く。  
 「もうすぐ、本殿の正面玄関を警護するエネミーも復活する頃合いです。その前に、中に入りましょう」

その言葉に、ハルユキは前回の記憶を辿らせた。本殿のデザインは、いまの月光ステージと当時の平安ステージで大きく異なるが、基本的な構造やエネミーの配置は同じはずだ。そして前回は、正面玄関の左右に、他の衛兵たちとはひと目で格が違うと解る恐ろしいエネミーが二体立ちはだかっていたのだ。

「も……もしかして、あの仁王様っぽい奴も倒したの!?」  
 仰天して訊ねると、リードははにかむような仕草で頷く。

「ええ。もつとも、私は先生の手伝いをしただけです」

「いや……戦ったってだけで充分すごいよ……」

言いながら、改めて青い若武者の立ち姿を眺める。この一ヶ月でそれなりに成長したつもりでいたハルユキだが、どうやらトリリードも以前の彼ではないらしい。

早く安全な場所まで移動して、もつと色々な話をしたい。はやる気持ちを抑え、ハルユキは皆と一緒に大階段を上った。

帝城本殿の正面玄関は、洋風デザインの月光ステージらしく、堂々とした金属製の二枚扉に

なっていた。サイズこそ四方門の大扉には及ばないが、表面の複雑なジオメトリックパターンに青白い月光が反射するさまは、世界の中心たる建築物に相応しい壮麗さだ。

「さ、クロウさん、この《九重の門》の中心である第五の扉を、どうぞお開け下さい」

銀色の扉に目を奪われていたハルユキは、リードに右手で促された途端、思わず仰け反ってしまった。

「え……ぼ、僕が開けるの!?!」

「そのためにここを訪れたのでしょうか?」

「で、でも、門番を倒したわけじゃないし……」

口籠もりながら、一ヶ月前の記憶を甦らせる。

帝城本殿には当時も誰と一緒に入りはしたが、あの時は大昔にクロム・ファルコンが開けたままにしておいた窓を侵入口に使用してもらったので、正面入り口には最初から近寄りもしなかった。そんな自分が扉を開けていいのだろうか——などと考えながら壮麗な門扉を見上げている。

「ああもう、じれったいですね!」

と叫んだのはもちろん、大天使メタトロンだ。小さな立体アイコンは、右肩からハルユキの頭上へ移動し、二枚の翼でヘルメットをべちべち叩く。

「命令ですしもべ、いますぐ扉を開けなさい! ほら早く!」

「わ、わかったよ」

慌てて前に出ると、感慨を味わう余裕もなく両手を左右の扉に当てる。ずっしりとした密度を伝えてくる金属板を、思い切った前に押す。

幸い、張り切って押したら実は引くタイプだった、という悲劇が訪れることもなく、大扉は重々しい地震を上げながら左右に開き始めた。内部の暗闇から、加速世界八千年の時の流れを感じさせる冷たい空気が流れ出してくる。

二枚の扉が完全に開くと同時に、青白い炎が手前から奥へと幾つも灯り、闇を払った。

扉の向こうは、広大なエントランスホールになっていた。正面奥には幅広の上り階段があり、左右の壁にも多くの扉が並んでいる。ホール内にはエネミーの姿はないが、階段を上った先、あるいは扉を開いた先で待ち受けているであろう衛兵たちの気配が、冷気に混じって足許まで届いてくる。

だが、声を出せないほど緊張しているのはハルユキだけで、他の三人は無造作にドアシルをまたいで内部に歩を進めた。再びメタロンがべしべし頭を叩くので、ハルユキも急いで後を追う。

先頭でしばらく進んで立ち止まったグラフィット・エッジが、左右を見回しながら言った。

「さてと……月光ステージん時の安地はどっちだったかな……」

「あら、このホールは違うの？ 見たところエネミーはいないようだけど」

楓子の問いに、双剣使いはひよいと肩をすくめる。

「残念ながら、どつかのドアから五分間隔で巡回の衛兵が入ってくるよ。落ち着いて話をするのはちよつと無理だな」

「なら、中のエネミーも全部倒しておいてくれればよかったのに」

「おいおい、無茶言うなよ。そんな時間あるわけないだろ、外のもめちやくちや急いで片付けたんだぞ」

グラフィが苦笑交じりに答えると、楓子はすつとアイレンズを細めた。その理由は、ハルユキにも解った。やはりグラフィとリードは、ハルユキたちが無制限中立フィールドに出現した時点でそうと知り、出迎える準備をしていたのだ。

楓子の視線にたじたじとなる双剣使いを救ったのは、

「先生、安全エリアは確か、階段を上った先の小部屋だったはずですよ」

というリードの言葉だった。グラフィは「あー、そうそうそうだった」などと調子のいいことを言いつつ移動を再開する。本殿の内部に関しては、師匠のグラフィよりも弟子のトリリードのほうが詳しいらしい。

思い返せば、一ヶ月前に訪れた時は、グラフィット・エッジはまったく姿を現さなかった。もちろん、いかに彼とて四六時中ダイブしっぱなしというわけではないのだろうが――それは弟子のトリリードも同じはずだ。考えてみれば、リードが絶妙のタイミングで姿を現したのは



今日が初めてではない。前回、本殿深部の《神器の間》で最初に出会った時も、リードは突然ハルユキと謎の前に出現したのだ。

いったい彼らは、どうやって無制限フィールドを訪れる者の存在を察知しているのか。

またしてもその謎にとらわれつつ、ハルユキは三人の後についてエントランスホールを縦断した。

正面の大階段を上り終えると、その先には長い通路がまっすぐ延びていて、左右の壁にはこれまた無数のドアがあった。全部開けて探索しようと思つたら時間がいくらあっても足りないだろうが、リードは迷いのない足取りで左側二番目のドアに歩み寄ると、静かに引き開けた。ごおー！と叫びながらエネミーが飛び出してくる——というようなこともなく、若武者は一同に入るよう促した。

中は、細長い通路に続いて縦横六メートルほどの正方形の部屋になっていた。リードは先刻《小部屋》と言っていたが、現実世界の単位に換算すれば二十畳はあるだろう。全体が石造りで窓は一つもないが、四方の壁に吊るされたランプが充分な光を放っている。中央には木製の大型テーブルが置かれ、眺めたように四脚の椅子が並ぶ。

「お茶は出ないけど、まあ座ってくれ」

と言いながらグラフィット・エッジが真つ先に腰を下ろし、リードがその隣に座った。

ハルユキは、楓子と顔を見合わせてから、リードたちの正面に並んで腰掛けた。その途端、

スザク門を目指して離陸した瞬間から続いていた緊張が一気に解けて、思わず溜め息をついてしまう。頭に乗っていたメタロンも、ふわりと右肩に戻る。

だが、ここで離抜けてはいられない。まだまだ為すべきこと、知るべきことはたくさんあるのだ。

背筋を伸ばし、まずはインストメニユーを開いて、ダイブしてからの累積時間を確かめる。

表示は五十五分。ハルユキと楓子は、内部時間で一時間五十六分四十秒が経過すると自動切断するようにセーフティを設定しているの、残り時間は約六十分だ。それまでに目的を達成できなければ、現実世界に戻つたら即座に再加速しなくてはならない。

「——時間がないから、さくさく話して貰うわよ、グラフィ」

ハルユキと同時に聞いたインストメニユーを消去しながら、楓子がさっそく問い質した。

「まずは、あなたがどうやってグンブ門の封印を解いて、帝城の中に入ったのか……そこから教えて」

「ん、んん……」

腕組みをしたグラフィット・エッジは、ひとしきり唸り声を漏らしてから、観念したようにこっくり頷いた。

「……まあ、デンデンたちに心配かけつばなしたったのは事実だから、話せることは全部話すつもりだけど……でも俺はまだいちおうグレウォオのメンバーだから、手の内を何から何まで

明かすわけにはいかない。そこは理解してくれよ」

「……いいわ」

楓子が小さく首肯する。

先日の、渋谷第二エリアに於けるグレート・ウォールとの模擬領土戦はネガ・ネビュラスの勝利で幕を下ろした。結果、渋谷第一、第二エリアの返還は緑の王の口から確約されたものの、グラフアイト・エッジがネガ・ネビュラスの《四元素》に復帰するということにはならなかった。なぜなら彼は、グレート・ウォールに緒を残したうえで、レギオンメンバーから噴出するであろう唐突なエリア返還への不満の受け皿となるという役割を引き受けたからだ。

具体的にどうやってメンバーを宥めるつもりなのかは不明だが、少なくとも《六層装甲》第一席たる立場と責任を裏切るつもりはないらしい。楓子の返事を聞いたグラフは、胸の前で組んでいた右手をおもむろに右肩へ移動させると、そこから伸びる柄を握った。

しゃりん、と軽やかな音を立てて剣が抜かれた瞬間、ハルユキは軽く腰を浮かせてしまった。しかし楓子が平然と見守っているの、慌てて座り直す。

グラフは剣を持つ右手を前に伸ばすと、そっと卓上に武器を置いた。

「こいつが、俺の初期装備で最終装備のかたっぽ、《ルークス》だ」

「……………」

ハルユキは、初めて間近で目にするグラフアイト・エッジの伝説的な強化外装に、声もなく

見入った。

これまで少なからぬ数の剣型強化外装を目の当たりにしてきたが、群を抜いて特異な姿だ。何と言っても特徴的なのは、まるでそこに存在しないかのような透明度を持つ刀身。それを、漆黒の刃が枠の如く囲んでいる。刀身長は八十センチ、厚みは八ミリといったところだろうか。武器というより工芸品を思わせる儚さ、美しさだが、この剣が黒の王ブラック・ロータスの《終決の剣》と五角に斬り結ぶのを、先の戦いでハルユキは見た。

いっぽう楓子は、さしたる感銘を受けた様子もなく、すぐに顔を上げて訊ねた。

「……で、このあなたの《本体》がどうしたの？」

途端、リードがくすつと笑い声を漏らす。グラフも苦笑するように肩をすくめてから、再び発言する。

「別に自慢しようってわけじゃないよ。……えーと、これはあくまでそういう設定のアイテムだっていうだけの話だけど、この剣のエッジ部分は、《グラフエン》つつう素材でできてる、つてことになってる。グラフエンでは、炭素分子いっこぶんの厚さしかないシートのことで……つまりこの剣は、古来いろんなアニメやマンガに出てきた、いわゆる《単分子ブレード》だと思ってくればいい」

「おお……………」

かっこいい！ と素直に思ったハルユキは感嘆の声を漏らしてしまったが、楓子はわずかに

首を傾けた。ただで先を促す。

「さて、ここからはまた別の話だ。クロウ……と肩に乗ってるヒト、心意システムについてはもうレクチャーされてるよな？」

突然そう問われ、ハルユキは心意技の師——というか鬼教官である楓子をちらりと見てから慌てて頷いた。右肩のメタトロンも、天使の輪を一度発光させて肯定の意を示す。

「よし。心意システムってのは、簡単に言えばイメージ力でゲームシステムに干渉する技だ。イメージレーションの強度が十分に強ければ、システムで不可能と規定されたことができる。逆にそれまでは不可能だったことができなくなったりする。前者を《事象の上書き》、後者を《雾化現象》とか呼んでるけどな……原則として破壊不能な地面に大穴開けたり、ガチガチの近接型アバターが超遠距離技を使ったりとか、そんなことも起こせるわけだ」

「……つまりグラフ、あなたはこう言いたいわけ？ その剣と心意技を使って、帝城の北門を破壊した、と？」

楓子が胡散臭そうに問い質すと、双剣使いはさかさぶりを振った。

「いやいや、いくら心意技でもそりや不可能だ。帝城を守る《九重の門》……つまり東西南北の四方門と本殿の正面扉、中の四大扉は無制限中立フィールドでいっちゃん優先度の高い地形オブジェクトだからな。こいつを心意でブツ壊すのは、怒りゲー爆発状態の剣聖にも無理だろうな」

《剣聖》こと青の王ブルー・ナイトは、加速世界最強の近接型と言われている。彼にできないのなら、確かに四方門を破壊できるバーストリンカーはいないのだから。

しかし、ならば、グラフアイト・エッジはいったいこの剣と心意技で何をしたいのか。

「あのねえグラフ、時間がないって言ったわよね。早いところ結論を教えてくださいかしら」  
「せっかち星人のバドさんあたりに比べれば三倍は辛抱強いであろう楓子も、いいかげん声に苛立ちを滲ませ始めたが、双剣使いの飄々とした態度は変わらない。再び右手で剣を持ち上げ、懐かしそうな口調で述懐する。

「俺は、ロットタに三種類の心意技を教えた。《奪命撃》、《星光連流撃》、《光環連流撃》……どれもド派手で高威力な第二段階心意技だ。でもな……心意システムには、その先がある」

「えっ……！」

再び、ハルユキは声を上げてしまった。双剣使いのフェイスマスクをまじまじと眺めながら、恐る恐る訊ねる。

「そ、それは、つまり……第三段階の心意技、ってことですか？」

「まあな」

あつさり肯定すると、グラフは右手のルークスを指示棒のように動かしながら説明を開始した。

「念のためにおさらいしとくけど、第一段階の心意技ってのは、《射程拡張》、《移動拡張》、



《威力拡張》、《防衛拡張》のどれか一ジャンルだけに属する、まあ基本技だ。で、第二段階は、複数のジャンルを組み合わせたり、あるいはその枠に収まらない効果を發揮する応用技だな。ここまではいいかな？」

ハルユキはこくこく頷き、メタトロンは天使の輪っかを光らせ、襷子までもが軽く首を動かした。

「よし。つまるところ、第二段階つてのは、第一段階と比べてデカくて派手なわけだ。なら、第三段階はもっとドギヤーンでビックリカビカだ……と思うだろクロウ、思うよな？」

いきなり名前を呼ばれ、ハルユキはつい頷いてしまった。グラフは満足げに上体を反らし、右手の剣を左右に振る。

「ところがどっこい、その逆なんだなあ」

「え、ええええ!!」

じゃあさっきのわざとらしい念押しはなんだったんだ、と文句の一つも言いたいところだが、話への興味が勝った。

「逆つて……じゃあ、第三段階は、第二段階より小さくて地味……なんですか？」

「まったくもつてその通り。でも、だからって弱いわけじゃない。むしろその逆……あれだ、武術もののマンガとかでよく『先に開眼を求め、後に緊湊に到る』つて言うだろ？ 第二段階でとことん広げたイマジネーションを、第三段階では一点に極限まで集中するんだ。すると、

何が起こるかというとな……」

ここまで、話を自分のペースで好き勝手に進めてきたグラフが、もったいぶりつつ次の台詞を発しようとした、その時。

「ハイエース・レベルでの情報直接干渉」

「その言葉がハルユキの右肩から響き、双剣使いはぎよつとしたように動きを止めた。

「お前の言いたいのはそういうことなのでしょう、グラファイト・エッジとやら」

「………こりや驚いたな………」

口だけではなく本気で驚いたのか、グラフはしばしば絶句しつつ立体アイコンに視線を注ぐ。やがて、得心したようにゆっくりと頷く。

「その肩のヒト、ずっと昔にどこかで会ったような気はしてたけど、バーストリンカーの感覚端末じゃないな。エネミー……しかも最上位の神獣級、ことによると《四型》の一人か……？」

「なかなか見る目を持っていますね。いかにもそのとおり」

ここまで来たらもう誤魔化すのは不可能だと悟り、ハルユキは小さなアイコンが誇らしげに名乗るに任せた。

「私はシルバー・クロウの主であり《コントララー・カセドラル》の支配者、《四聖》の一柱たる大天使メタトロンです」

数秒間の静寂を経て、まずトリリッドが礼儀正しく頭を下げた。



「挨拶が遅れましたこと、お詫びいたします。私はグラフアイト・エッジの弟子、トリリード・テトラオキサイドと申します」

「ふむ、憶えておきましょう」

鷹揚に答えたメタトロンが、アイコンの角度を弟子の隣（となり）の師匠（ししやう）へと動かし、挨拶を待つ。

しかし双剣使いは突然「あーあーあー」と無遠慮な声を出し、右手でアイコンを指さした。

「そっかそっか、どうりで何となく憶えがあるような気がしたわけだ。アンタとは、ずーっと昔に一回だけ戦ったよな。さんざん苦勞して倒したらもう神器の台座がカラッポで悲しかったなあ……」

と懐かしげに語るグラフに、メタトロンは「ふん」と腹立たしそうな音を出してから、とてもA Iとは思えない滑らかさでまくし立てた。

「自慢そうに倒したなどと言っていますが、おまえが勝利したのは我が第一形態に過ぎません。しかも所詮は地獄ステージの加護を受けてのこと、城の外で戦っていればおまえ如き小戦士は百秒ともちませんでしたよ。それは、おまえが来る少し前に我が城から《ザ・ルミナリー》を持ち出した小戦士も同じことです」

「は……はい、偉そうなこと言ってますミマセン」

恐れ入ったように謝罪すると、グラフは咳払いして続けた。

「えーと、それで……何の話だったけ……」

「心意技の第三段階についてです、先生」

リードに指摘され、重々しく頷く。

「そう、それ。つっても、大天使サマからお言葉があったとおり、要諦はたったひとりで表現できる。《高次元からの事象操作》……その段階を完全にマスターすれば、技に問合いは関係なくなる」

途端、ハルユキの脳裏に、かつて聞いたメタトロンの言葉が甦った。

「いいですか、小さき戦士よ。ハイエスト・レベルに、距離は存在しません。それゆえに、ミーン・レベルでは遠く離れている私たちがこうして触れ合うことも、三重のフィールド全体を俯瞰することも、そして記憶を参照することも可能なのです……」

ハイエスト・レベルには距離の概念がない。で、あるのならば――

「あ、あの、それってつまり……場所や距離に関係なく、何でも攻撃できるってことですか？ 何十里離れたところにいる相手も、一方的に……？」

恐る恐る訊ねたハルユキに、グラフは重々しく頷いてみせた。

「極論すれば、そういうことになるな。距離だけじゃない……攻撃力だとか防御力だとか相性だとか、その手のパラメータも一切適切すつ飛ぶ。オモチャの銃でフィールド丸ごとぶ壊すような真似さえできる。仮に第三段階を完全に極めたヤツがいいたら、そいつはこの世界の神にもなれるだろうさ」

「か……神、ですか」

「ああ。何せ、管理者権限を手に入れるみたいなモンだから……」

という、半ば独り言のようなグラフアイト・エッジの声にどこか苦々しげなものを感じて、ハルユキはばちくりと瞬きした。だが、アイレンズを完全に隠してしまう双剣使いのゴーグルをどれだけ凝視しても、アバターの内面を読み取ることはできない。

視線を、グラフの右手に握られたままの長剣ルークスに移し、更に訊ねる。

「……つまり、こういうことですか？ グラフさんは、その第三段階心意技をマスターして……その力で、帝城北門を突破したと……？」

「んー、その答えは八割ノー、二割イエスだな」

それまでの飄々とした物腰に戻った双剣使いは、軽く両肩を上下させた。

「もし俺がそんな何でもありの力を持つてなら、門じゃなくて四神グンブだって倒せるはずだろ？ でも、そんな真似は到底無理だ。まだまだマスターにはほど遠いからな、心意の根幹……《心より出づる意志》だっていう大原則からは逸脱できない。自分の心の枠に縛られちゃうのさ」

「……そこでようやく、さっきのグラフエンがどうこうって話に繋がるわけね？」

久しぶりの榎子の発言に、グラフはフェイスマスクを小刻みに上下させた。

「そそそ。レッカがいつも俺のことを《剣が本体》つつっててるけど、それはあながち外れても

いない。グッさん……緑の王が守ることを突き詰めまくったバーストリンカーなら、俺は斬ることだけを考えたからな。まあ、ろくでもない心意だが……そいつを限界まで集中させた第三段階心意技が、これだ」

そう言うグラファイト・エッジは、右手に握った長剣に視線を落とした。双剣使いの体から、青紫色の過剰光が仄かに発せられる。

過剰光とは、バーストリンカーの意識とデュエルアバターを繋ぐ《イメージ制御系回路》を過剰なイマジネーションが流れる時、溢れたノイズが光エフェクトとして処理されたものだ。いま、グラフの全身を包む過剰光の光量はかなり控えめだが、それは恐らく、心意のレベルが低いからではない。その逆——イマジネーションがあまりにも純粹に研ぎ澄まされているため、ノイズがほとんど含まれていないからだ。

キン。

という澄んだ金属音が響き、長剣ルークスが消えた。

いや、消えたのではない。刀身が極限まで——それこそ分子のレベルにまで薄くなったのだ。ハルユキが見る角度を変えると、影のように鹽な刀身が現れたり消えたりする。

まさしく単分子ブレードと呼ぶべき状態の剣を握ったまま、グラフは椅子から立ち上がった。振り向くと、誰もいない場所に向けて、剣をすうっと振りかぶる。

技名発声はなかった。ただ、ひゅひゅんと右腕が三回動いただけだ。

グラフは、そのまま剣を背中の中へ収め、一歩下がった。

一秒後、石造りの床の一部分が正三角形に凹んだ。グラフの剣が、破壊不可能であるはずの帝城の主要構造体を切断したのだ。切り出されたブロックの沈降は止まることなく続き、とうとう床から脱落する。少して、重く硬いもの同士が激突する音が響く。

「……と、まあ、こんな具合だ」

振り向いたグラファイト・エッジが両手を広げると、樫子が驚き半分、呆れ半分の声で問いついた。

「……あのねえグラフ、あなたさっき、『九重の門』……だっけ？ 帝城の四方門を心意技で破壊するのは絶対に無理だ、って言ったわよね。そのデモンストレーションと矛盾してるわよ。門の大扉にその技で穴を開けたんじゃないの？」

「最初はそうしようとしたんだ。でも、四方門は、第三段階の心意技さえも拒んだ。たぶん、常にリソースを消費してデータを更新し続けているんだろな……。ただ、あの門には一つだけついているスキがあったんだ。いいか……大扉そのものは破壊不能でも、二枚の扉と扉の間には、理屈の上では隙間がある」

グラフは広げた両の掌を前に突き出し、それを二枚の扉に見立てて左右から接触させる。

「この隙間の距離は、限りなくゼロに近い。でも、俺の心意技が作り出す単分子ブレードの厚みも、限りなくゼロに近い。ここに、俺の心意技の《理屈》を押し通す余地がある。もちろん、

仮に刀身だけが隙間を通過しても、俺が通れなきや何の意味もない……ただ、四方門に限っては、刀身が通ればそれでいいんだ。なぜなら……」

「門の外側から、封印プレートを破壊できるから……」

ハルユキが叫ぶと、グラフはにやりと笑みの気配を滲ませながら、くっつけていた両手を左右に開いてみせた。

「そのとおり。さっきも言ったけど、第三段階の心意技はつまるところ《結果のこり押し》だ。自分が絶対だと信じる理屈……俺は《絶対理論》と呼んでるが、そいつで有無を言わせず事象を書き換える。派手に光りもしなければ大爆発も起きずに、ただ結果だけが現れる。——俺がさっき使ってみた《解明剣》の絶対理論は、『究極的に薄くて鋭い刃だからなんでも斬れる』ってヤツだ。九重の門本体には通じなかったけど、門の隙間に剣を通してその奥の封印を斬ることはできた。つっても、言うほど楽じゃなかったけどな……」

確かにそれはそうだろう。

厚さゼロの隙間に厚さゼロの刀身を通過させようとしたら、許容される狂いもまたゼロだ。

しかも、あの頑丈な封印プレートを「撃で斬らねばならないのだから、全力かつ最速の振りが要求されるはず。」

「……それを、一回で成功させたんですか？」

ハルユキが半信半疑で訊ねると、グラフは持ち上げたままの両手を水平に動かして否定の意

を示した。

「まさか。何度も失敗しちやあゲンブに殺されたよ。けど、無制限フィールドには時間だけはたっぷりあるし、余剰ポイントもそこたまあったからな……修行のつもりでひたすら挑戦して、何回死んだか忘れた頃にやっとこ成功したのさ」

「……グラフ、そんなに何度も死ぬるくらいポイントがあつたなら、門の中じやなくて橋の外に逃げられたんじゃないの？」

呆れたような視子の問いに、双剣使いは再びかぶりを振る。

「いやあ、無理だったろうな。橋の上で蘇生してからゲンブが湧いて攻撃してくるまでの猶予時間は三秒くらいあったけど、あの亀、五割くらいの確率で初手に重力攻撃かましてくるんだよね。それまでになんかに距離を稼いでも、結局吸い込まれて最初からやり直し。目の前の門に向かって剣振ってたほうが、なんぼか建設的だったよ。それに……」

左の椅子に行儀良く腰掛けるリードを見下ろし、

「……帝城の中に入ったからこそ、二人目の弟子を取れたんだからな。あの努力は無駄じゃなかったさ」

と、グラフファイト・エッジは穏やかな声で言った。それを聞いて、ハルユキは今更のように意識する。

そう——この双剣使いは黒雪姫の師匠であり、そして黒雪姫はハルユキの剣の師だ。つまり、

ハルユキはグラフの孫弟子で、グラフはハルユキの大師匠おかしやうということになるのだ。

となると、いままでのように「グラフさん」ではなくリードに倣まねって「先生」と呼ぶべきなのか。それとも「老師」とかにしておくべきか。

うむむと考え込んでみると、ハルユキのもう一人の師匠——心意の師であるところのスカイ・レイカーが、ふうつと軽く息を吐いた。

「やれやれ、ようやく最初の話が終わったわね。《心意技で突破した》のひと言で済みそうな話に二十分もかかるなんて」

「そ、その言い方はヒドイよレッカさん……。俺、若者たちと大天使様に解りやすいように、「生懸命説明したのに……」

「私ならば、《ハイエスト・レベルから干渉した》のひと言で理解できましたよ」  
楓子に負けず劣らず容赦ないメタトロンの言葉に、グラフががくりと肩を落とす。

その様子を眺めながら、  
「初めてメタちゃんと言いが合ったわね」  
と楓子が微笑み、

「誰がメタちゃんですか！」  
とメタトロンの怒ったところでハルユキはすかさず口を挟んだ。

「でもメタロン、たしか前に言ってたよね。ハイエスト・レベルでは、仲間や敵に干渉でき

ない……可能なのはただ認識することのみだ、って。それは地形も同じことだと思っただけ……」

「私の言葉を憶えているのは感心ですが、どうせなら正確に記憶しなさい。私はあの時、お前は干渉できない、と言ったのですよ。あの時点のお前の能力では、ハイエスト・レベルを観察するのが限界でした」

冷ややかに言い切ったメタトロンの声が、ほんの少しだけ柔らかくなったことに恐らくハルユキだけが気付いた。

「……しかしその後、お前はハイエスト・レベルを通して私に呼びかけ、途切れかけたリンクを再確立しました。それを《干渉》と言わずして何だと言うのですか」

「あ………そ、そうか………」

《なんとかテラス》を名乗る謎の声に導かれ、消滅間際だったメタトロンのコアをぎりぎりまで修復できた時のことを思い出し、ハルユキは右肩のアイコンを両手で抱き締めなくなった。

しかしこの場でそんな真似をしたら、意外に恥ずかしがり屋な大天使様に盛大に怒られることは間違いないので我慢し、頷くに留める。

「……あの時ぐらい集中してようやく声を届けられる程度じや、ハイエスト・レベルで何かを壊したりは絶対無理そうだね……」

「当たり前です、しもべ」

そんなやり取りをしていると、隣の楓子が再び言葉を挟んだ。

「ちょっといいかしら、トロンちゃん」

「誰がトロンちゃんですか!」

「そのハイエスト・レベルというのは、見るだけなら誰でも見られるのかしら? たえば、わたしにも?」

「……………む……………」

不満そうに唸りつつ、メタトロンはハルユキの右肩から左肩に移動すると、楓子のアバターをじろりと一瞥した。

「……………誰でもというわけではまったくないですが、レイカーならば不可能ではないでしょう。ただし、以前シルバー・クロウがハイエスト・レベルに到達できたのは、お前たちがマークII

と呼ぶ疑似ビーイングとの戦闘中に意識回路の演算速度が急激に上昇したからです。平常時にその状態を再現するには、長時間の集中が必要でしょうね」

少しばかり挑発的なメタトロンの説明をハルユキははらはらしながら聞いたが、幸い楓子はチャレンジ・スピリットを発揮することなく頷いた。

「そう……………では、次の機会にしておくわ。わたしたちが今日この帝城を訪れたのは、第七の神器《ザ・フラクチュエーティング・ライト》の情報を得て、ブラック・ロータスに伝えるためですから」

「ふむ、それは私も大いに興味のあるところですよ」

メタトロンが同意すると、楓子はグラフィット・エッジに向き直った。

「では、そろそろ本題に入りましょうか。——グラフィ、三年も前に帝城に侵入していたあなたが、このことをあれこれ調べていないはずがないわね。教えてちょうだい、最後の神器とはいったい……………」

「ちよ、ちよっと待ってくれ」

双剣使いが両手を持ち上げると、楓子はアイレンズを鋭く光らせた。

「何やグラフィ、知られて困ることでもあるの?」

「や、そういうわけじゃなくて……………」

視線を泳がせながら、グラフィは何やら考えを巡らせている様子だったが、すぐにふうっと息を吐くと言った。

「……………解った解った、俺の知ってる範囲でなければ話すよ。TFLと加速世界の秘密について……………ただ、その話をするなら、もっとふさわしい場所がある」

「どこに?」

胡散臭そうに問い質す楓子に向けて、双剣使いはピツと右手の人差し指を立て、それを真下に向けた。

「もちろん、この帝城本殿のいっちゃん奥……………最後の《門》の向こう、さ」

加速世界にその名を轟かせる六つの巨大レギオンは、それぞれの頭首であるレベル9er、すなわち純色の王たちのカラーネームを取って《青のレギオン》や《緑のレギオン》といった通称で呼ばれることが多い。

だからと言って、青のレギオンには青系の近接型デュエルアバターしかないのかというとそんなことはまったくないのだが、やはりレギオンが掲げる色に近いアバターが増える傾向はある程度存在する。例外は白のレギオンと、まだ規模はさほど大きくはないが黒のレギオンで、この二つは頭首が絶対的な稀少色なので同系アバターが増えようもないのだ。せいぜい、白のレギオンの堂首代理アイポリ・タワがそこそこ白っぽかったり、かつては黒のレギオンの幹部だったグラファイト・エッジがそこそこ黒っぽかったりといった程度である。

その二つと比べれば、現在の赤のレギオンは、いちど崩壊しかけたわりにはかなり律儀に赤系が多いレギオンなのだ。

ブラッド・レバードこと掛居美早は、《ピース・モード》で練馬区役所の本庁舎目指して疾走しながら、そんなことを考えていた。

臨時の幹部会議が行われる練馬第三エリアは、対戦開始者の美早が《轟雷》ステージを引き

当ててしまったせいで、会議の開始前からなかなか不穏な空気を漂わせている。厚く垂れ込めた黒雲の奥では頻りに雷光が閃き、どろどろと低い音が響く。

「……これ、だいじょうぶなのかなあ……」

背中に乗った赤の王スカーレット・レインこと上月由仁子がそんなことを呟くので、美早は短く訊いた。

「何が？」

「やー、轟雷ステージって確か、あんま高いところ行くとカミナリドカーンで黒コゲなんだろう？ 区役所の屋上まで登れんのかなって」

「……NP、だと思っ」

「だと思っ、って……」

「雷が落ちる高さが、確か百メートル。区役所の高さは、九十四メートルくらいだったはずだから」

「……ぎりぎりすぎんだろ……」

というニコの呻き声を聞きながら、美早は目白通りを西にひた走った。行く手に、築五十年となる本庁舎が見えてくる。建てられた当時は、二十三区の区庁舎で二番目に高い建物だったらしいが、現在は下から数えたほうが早いだろう。しかし周辺にはさして高いビルもないので、目立つことに変わりはない。

ちらりとタイムカウントを確認すると、対戦時間は残り一七二〇秒。桜台のケーシングトップ（パティスリー・ラ・ブラージュ）からここまでの一・五キロを八十秒で走ってきた計算だ。しかし他の幹部二人は区役所最上階の展望レストランで加速すると言っていたから、とつづくに屋上に着いているだろう。

目白通りから左にターンし、区役所の敷地に滑り込んだ途端、背中のニコが降りようとする気配を見せた。

「サンキューバド、ここからはエレベーターで……」

「必要ない」

答え、一気に加速。「のわっ」と叫んだニコが慌てたように首筋にしがみついているのを感じながら、大きくジャンプ。垂直に切り立つ庁舎の壁面を四肢の肉球でしっかりと掴み、駆け上り始める。レベル7のボーンラスで取得したアビリティ、《常時全面走行》の効果だ。以前に持っていた《壁面走行》アビリティと違って必殺技ゲージを消費しないので、高さ百メートルのビルでもエネルギー切れによる落下を恐れず登ることができる。

「あ、あのなあ、壁登りするならするって先に言えよな！」

「SRY」

文句を言うニコに謝りつつも、滑らかな壁をひと息に登り切り、最後は思い切りジャンプ——したかったのだが、落雷高度に引かかる可能性があったので普通に縁を乗り越えて、美早

は足を止めた。

屋上に設けられた広いヘリポートからは、灰色に塗り潰された空の下にどこまでも広がる、練馬エリアと杉並エリアの市街地が一望できる。ほぼ真南に延びる環七通りを視線で追ると、彼方にひととき大きな高層ビルがそびえている。美早も何度か近くまでは行ったことがある、シルバー・クロウと有田春雪の自宅マンションだ。しかしここは無制限中立フィールドではなく通常対戦フィールドなので、ステージ境界に阻まれてあの建物までは行けない。

一瞬の想念を振り払い、意識を目の前に戻す。

ヘリポート中央のHマークあたりに、二つの人影が見える。片方は濃い紫色でかなり大きく、もう片方は鮮やかな赤紫色でかなり小さい。

今度こそ背中から飛び降りたニコが大きく伸びをする隣で、美早はコマンドを唱えた。

「シェイプ・チェンジ」

豹型のビースト・モードから人型のノーマル・モードへと再変身し、先客に歩み寄る。

「SUP」

What's up? の略語で挨拶すると、右の大柄なM型デュエルアバターが、頭の両脇から生えた巨大な角を揺らしながら長々と唸った。

「うーむ……」

すると、左の小柄なF型アバターが、呆れたような声を出す。



「いつも言ってるけどさ、お決まりの挨拶にいちいち考え込まなくてもいいっしょカッシー。ネトグの『SUP』なんて『おっす』くらいの意味しかないんだからさあ」

「いや、僕は正確に答える主義なのだ……訊かれたことにはな。いい加減な答え方をすると後々トラブルの原因になる。というわけで、自分の調子がどれくらいなのかしばし考えるから、進めていてくれたまえ……話を」

「堅苦しい返事に、F型はやれやれとかぶりを振ってから、美早たちのほうに向き直って一気にまわし立てた。

「相変わらずカッソマジメなあカッシーは、まあいいや、レイン、パド、おひさし！ 最近領土戦も別チームになってばっかだからオレに会えなくて寂しかったっしょー、もしかして今日の臨時招集ってオレに会いたかったからだったって、なんつってあつはははー」

「一人称が『オレ』なのに、声はちよつと舌つ足らずな甘酸っぱいハイトーンなので、彼女の早口を聞いているとなんだかくらくらしてくる。

美早は肩をすくめるに留めたが、隣に立つニコは軽く右手を持ち上げながら挨拶を返した。

「うす、カッシー、ポッキー。急に呼び出して悪かったな。別に寂しかったってわけじゃねーけど」

「相変わらず素直じゃないなあレインは。ほんととはオレの毛皮をもふもふしたかったんしょ？ はははは」

素早い動きでニコに近付き、加速世界では大変に珍しい毛皮タイプの装甲に覆われた背中をすりすり擦りつける。赤の王はいったん上体を仰け反らせたものの、誘惑に負けたのか両手を赤紫色の毛皮に突っ込んでわしわし動かす。

「あーソコソコ、やつばレインの手はちよつとやくていいわあー、あ、もーちよつと上」

「なんだよ、そつちがもふもふされたがつてんじやねーか」

文句を言いがらも、ニコは両手を止めない。美早も何度が撫でたことがあるが、あの毛皮はしっとり滑らかで実に極上な手触りなのだ。もつとも、通常時に限られるが。

ニコにポッキーと呼ばれるF型の、正式なアバターネームは《シスル・ポーキユバイン》。シスルは植物の《アザミ》を、ポーキユバインは動物の《ヤマアラシ》を意味する。共通点は、どちらもトゲトゲなこと。

たつぷり背中を撫でてもらって満足したのか、シスルは「はふうう〜」という声を漏らしながらニコから離れた。そのタイミングで、後ろのM型が再び発言した。

「現在の調子を肉体面、精神面で評価すると、まず健康状態に大きな問題はないが数日前から奥歯が微妙に痛いのが気になる。いっぽう精神状態は決して悪くない、なぜなら期末テストが終わり、もうすぐ夏休みなのだから。よって、先ほどの質問に対する答えは《まあまあ》だ、ブラッド・レバード」

「なら最初からまあまあって言えし！ あととつとと蘭医者行けし！ ナノマシンちゅーっ

てやって貰えばすぐ治るっしょ！」

背中の長毛をわずかに逆立てながらシスルが喚くと、M型は巨大な角を後方に反らして答えた。

「僕にぬかりはない。この会合のあと、予約を取ってある……駅前の齒科医院にな」

「あー、駅前ってあそこっしょ。つか、そこまで教えたなら覗きに來てくられて言ってるみたいなんだし。こりゃあカッシーのリアル割りチャンスっしょ！」

「くっ……やめたまえ！ 僕はきっちり分け隔てるタイプなのだ、リアルとBBは！」

しっかりとしているようでどこか抜けているところもあるM型の名前は、《カシス・ムース》。カシスは植物の《クロスグリ》、ムースは動物の《ヘラジカ》なのでネーミングのパターンはシスルとまったく同じだ。加えて、濃い紫の装甲色もかなり似ている。

しかし共通点はそこまで、角まで入れば二メートルを超える巨軀と逞しい四肢を持ち、分厚い装甲板にも毛は生えていない。性格も、シスルを含めて直情型が多い赤のレギオンの中では思索型だと言えよう。

このカシス・ムースとシスル・ボーキユバイン、そしてブラッド・レバードの三人が、二代目赤の王を支えるプロミネンスの幹部集団である。三人ともにアバターが動物タイプなので、いつのまにか《三獣士》なる大仰な二つ名で呼ばれるようになってしまったが、そのへんは七大レギオンの伝統のようなものらしい。

二人との挨拶が終わったところで、美早はちらりとニコに視線を送ってから口を開いた。

「そろそろ会議を始めたい」

「はいはい」「いつでも」

同時に答えたシスルとカシスの雰囲気、瞬時に引き締まる。シスルは動物的な直感で、そしてカシスは事前情報で、この臨時会議の議題がとてつもなく重大なものであることに気付いているのだ。

定例の会議なら進行役は、いちおう三獣士筆頭ということになっている美早が務めるのだが、今日はその役目をニコに譲って一歩下がる。代わりに前に出た赤の王は、すぐには発言せず、しばし無言で幹部三人を順に見詰めた。シスルと比べてもわずかに小柄な、加速世界でも最小クラスのアバターが急に大きく感じられる。

「カッシー、ポツキー、バド。——チェリーの一件は憶えてるよな」

その切り出しに、ステージの空気がいっそう張り詰めるのを美早は感じた。

スカレット・レインの《親》だったチェリー・ルークは、半年前、突然五代目のクロム・ディザスターと化して中立エリアの池袋界隈で多くのバーストリンカーを襲った。その中には相互不可侵条約を結んでいる他の大レギオンのメンバーも含まれていて、レギオン間の抗争になつてしまうことを恐れたニコは、復活したばかりだった黒のレギオンに自ら接触し、彼らの力を借りてディザスターを討伐。チェリー・ルークを《断罪の一撃》によって加速世界から

退場させた。

「……忘れるはず、ないっしょ」

ぼつりとシスルが呟く。彼女は、装甲色が似ているうえに同じ動物系アバターネームだったチェリー・ルークとは仲が良かったはずだ。

「チェリーに《鎧》を渡したのはクリプト・コズミック・サーカス。その裏で糸を引いてたのは加速研究会。あいつら、絶対許さないし」

口調は静かだが、背中が音もなく逆立っていく。ふわふわだった長い柔毛は数十本ずつ縫い合わさり、縞模様のある太く鋭い針に変化し始める。

そんなシスルにゆっくりと頷きかけ、ニコは再び口を開いた。

「レディオにはきっちり落とし前をつけさせる。でも、先になんとかしなくちゃなんねーのは研究会のほうだ。前に知らせたとおり、連中は新しい《鎧》を作って、そいつでもうひと騒ぎやらかそうとする。しかもそのモトになっているのは、あたしの強化外装だから……。また同じことが起きる前に、どうしても取り戻さなきゃならない」

「それはオレも同感だし……。——けどさレイン、先手を取って動こうにも、研究会つてのは正体不明っしょ？ そんなの、攻めようがないし」

背中を針を微妙に逆立てたまま、シスルが苛立たしげに言う。彼女にはまだ、加速研究会にまつわる最大の秘密を伝えていないのだ。

ほとんど手の届きそうな高さで渦巻く黒雲の奥が、二度、三度とかすかに瞬く。少しして、連番の重低音が区役所ビルを震わせる。

「ポッキー……シスル」

正しい名前前で呼びかけ直したニコが、大きなアイレンズに強い光を宿らせながら言った。「報告が遅くなったことをまず謝る。あたしは少し前に、加速研究会の親玉と会った」

「……………はああああ、だし!?」

叫ぶシスルの背中から、びん！ という音とともに長さ五十センチはある針が一本発射され、ヘリポートのコンクリート面に深々と突き刺さった。

「お、親玉って……黒の王に化けて襲ってきたブラック・パイストって奴じゃなくて、その上の大ボスってことっしょ!?」

「その大ボスだ。つっても、相手は親戦用のダミーアバターだったけど……。けどあいつは、ダミーのまま、あたしとパドとネガビュの連中まとめて相手にしようとした。もし戦ってたら……多分、勝てなかった」

「はああああああ!? 冗談言うなし!」

びびん！ と更に針が二本飛び、床に刺さる。

「そのメンツってことはつまり、王二人っしょ!? ダミーで勝つとか有り得ないし!!!」

「いや……。何せ、相手も王だったからな」

「……………は？」

「加速研究会の親王は、『オシラトリ・ユニヴァース』のアタマ、白の王ホワイト・コスモスだったんだ」

「……………はああああああ——！！！！」

三度目の絶叫で十本近くの針が飛び出すのを見て、美早は「本当に驚くのはまだまだこれからだから、あとは残しておいたほうがいい」と思わずにいられなかった。

幸い、シスルはどのようにか落ち着きを取り戻し、すうは深呼吸してからニコと美早を交互に見る。

「……冗談じゃ、ないんだね」

ニコが「ああ」と答え、美早も深く頷いた。

黒のレギオンの本拠地である梅郷中学校に、白の王がダミアンアバターを用いて出現した時のことは、記憶に深々と刻み込まれている。

最低値の戦闘力しか持たないダミーなのに、圧倒的なプレッシャーに頭から押さえ込まれて、美早は声も出せなくなってしまう。しかしニコは、同じように感じていたであろう恐怖を振り払って叫んだのだ。お前が全ての黒幕だったのか、と。

もう二度と——たとえ相手が白の王だろうと、あるいは災禍の鏡マークⅡだろうと、決してニコの前で嫌んだりはいしない。

改めてそんな決意を噛み締めながら、美早はニコから説明役を引き継いだ。

「加速研究会のアジトと、白のレギオンの本拠地は同じ場所だった。港区第三エリアの、私立エテルナ女子学院。つまり、もしエリアが白の領土じゃなくなれば、そのマッティングリストに研究会のメンバーが出現する可能性が高い」

「……確かに、それが確認できればもう間違いないだろうが……」

カシス・ムースが、重々しい響きの声を出した。

「容易なことではないぞ、到底な。マッティングリスト遡断特権を剝奪するには、勝利するしかない……領土戦で、白のレギオンに。いまの加速世界で、可能なのか、それが？」

「可能かどうかは解らない。でも、彼らはやる気」

一呼吸置いて、美早は続けた。

「これは極秘情報……来週の領土戦争で、ネガ・ネビュラスがオシラトリを攻撃する」

「……………んなああああ！！」

またしてもシスル・ボーキユバインが金切り声で叫んだが、今度は自制したのか背中針は飛ばなかった。

「攻撃って……ネガビュは、こないだ三人増えてやつと二十人しよ!? ってことは、杉並の防衛に三人残すと攻撃チームは最大七人、でもオシラトリの防衛チームはその倍、ヘタすりゃ三倍はいるはずだし！ いくらなんでも勝負にならないし！」

「まあ、あいつらは勝つつもりだろうし、いい勝負くらいはするかもだけだな……」

腕組みをしたニコは、そう前置きしてからじわりと本題に近づいた。

「でも、厳しい戦いになるとあたしと思う。万一のことを考えりや攻撃チームにロータス自身が参加するわけにはいかねーしな……。——ただ、この作戦は、プロミネンスにとっても最後のチャンスなんだ。加速研究会をぶつちめて、あたしのスラスターを取り返すには、ここで奴らの正体を暴くしかねえ」

「……………なんだかオレ、嫌な予感してきたし」

眩くシスルににやつと笑いかけ、ニコはこの会議の本題その一を口にした。

「だから、あたしは、ネガビュの作戦にうちも協力しようと思ってる」

「……………んみよっ……………」

アザミ色のヤマアラシが発した妙な声は、背中の針の全弾暴発を堪えるためのものだろう。逆立つ針を小刻みに震わせつつ、ツメの生えた両手を前に持ち上げる。

「ちょ、ちょっと待てし……。あのさ、レイン、いまだに領土戦の基本ルールの解説とかされたくないだろうけど、一応訊くよ？ 領土戦の攻撃チームはレギオン単位だから、別レギオンからゲスト参戦とかはできないこと、解ってるっしょ？」

「もちろん解ってる」

答えるニコの声も真剣だ。沈黙を守るカシス・ムースの腕づばい顔にも、緊張の色が浮かん

でいる。そちらをちらりと見てから、シスルは重ねて問いを発した。

「……………協力するのは、うちが別チームを出して港区第一か第二エリアを攻めるとか、そういうことじゃないんしょ？ そもそも、領土が接してないと攻撃できないし。つまり……………うちの誰かに、一時的にレギオン脱退させて、ネガビュに加入させるってこと？」

「方向性はそれで合ってる。ただ……………誰かにとか、一時的にとか、生ぬいりことしてたらオシラトリには勝てねえ」

これからニコが告げようとしている言葉の破壊力を予感してか、轟雷ステージの黒雲がひときわ激しくうねり、重低音の雷鳴を轟かせた。

「領土戦の助っ人には、あたしとバドがメインで行く」

「んな……………」

シスルの背中の針が、限界まで逆立った。

「ただ、それだと練馬の防御が不安になるから、杉並からいつでも助っ人を呼べるようにする」

「んな……………」

「ぶっちゃけると……………」

こはん、と咳払いしてから、赤の王スカーレット・レインは、ついにそのひと言を口にした。

「――プロミネンスとネガ・ネビユラスを、合併させる」

んなあああああ

ん!!

という絶叫が対戦ステージを震わせ、数十本の針が上空に向けて立て続けに発射され、それに次々と雷が落ちて世界を轟音と閃光で塗り潰した。



グラフィット・エッジが「解明剣」なる第三段階心意技で帝城二階の休憩室の床に大穴を開けたのは、単なるデモンストレーションではなかったらしい。

場所の再移動を提案した双剣使いは、床の穴に歩み寄ると、そこを指さして少々自慢そうに言った。

「この穴を降りればだいぶショートカットできるはずだぜ。まあ、それでも《神器の間》まで辿り着くのに、一、二回は衛兵と戦わなきゃならないだろうけどな」

その言葉はどちらも正しく、穴から飛び降りた四人が歩いた距離は約二百メートルだったが、道中に移動しない衛兵エネミーが二匹いたので、そこは戦って通るしかなかった。もつとも、グラフィット・エッジとスカイ・レイカーという二人のハイランカーが実力を遺憾なく発揮してくれたので、ハルユキとトリリッドは機嫌よくいしかすることはなかったのだ。

《九重の門》の八つ目だという大扉を開けて、薄暗い大広間に到達した時、ハルユキと楓子の累計加速時間は九十五分に達していた。自動切断セーフティが発動するまで、残り二十分と少し。

これは、いったん現実世界に戻ってから、もう10ポイント使って再ダイブしないとかな……

と思いながら広間を横切ると、行く手の暗がりから、一つの大形台座が姿を現す。つい小走りになりつつ近寄り、台座の正面に回り込む。

二メートルの間隔を空けて並ぶ、黒々とした石の柱。前面には、悠久の時を経てなお輝きを失わない金属板が嵌め込まれている。そこに彫り込まれているのは、図案化された北斗七星と、加速世界ではほとんど使われることがないはずの漢字。右の台座のプレートには「開陽」、左の台座のプレートには「玉衡」と記されている。

「……これが、第五と第六の神器が安置されていた台座なのね……」

隣に立った楓子が、さすがに感じ入った様子で呟いた。ハルユキは鎮き、情報を補足した。

「はい、師匠。右の台座に載ってた鎧が《ザ・デイスティニー》、左の台座に載ってた剣が《ジ・インフィニティ》。デイスティニーは僕らが封印しちゃいましたけど、インフィニティの実物は……」

言いながら振り向き、グラフィットと並んで立っているトリリッドを見やる。若武者ははにかんだ様子で腰から直刀の鞘を外し、両手でそつと持ち上げる。

「これがジ・インフィニティです、レイカーさん。憎悪ながら、いまは私が所有させて載せておきます。持ってますか？」

「いえ、いいわ。素敵な刀ね、見せてくれてありがとう、リッド」

微笑みながら答えたレイカーは、再び台座に視線を向け、呟くように言った。



「剣と……鎧<sup>よろい</sup>ですか。帝城<sup>ていじょう</sup>にあるのだから《三種の神器<sup>しんぐ</sup>》がモチーフなのかと思ったけど、違<sup>ちが</sup>ったみたいね」

「三種の神器……って、日本の神話の……？」

ハルユキが首を傾<sup>かぶ</sup>げていると、ぱちん、という音が聞こえた。グラフィット・エッジが指を鳴らしたのだ。

「さすがはレツカ先生、いいとこに気付いたな。天皇家に伝えられる、いわゆる三種の神器……つまり《草薙<sup>くさなぎ</sup>剣》《八咫<sup>やみ</sup>鏡》《八咫<sup>やみ</sup>瓊<sup>しん</sup>勾<sup>こう</sup>玉》の三つが、加速世界の七の神器の第五、第六、第七星に対応してるんじゃないかって話は、俺もリードとしたことがあるよ」

「あら、でも、ジ・インフィニティは剣だから草薙剣になぞらえられるとしても、ザ・デイスティニーは鎧<sup>よろい</sup>でしょ？ 鏡になぞらえるのは無理<sup>無理</sup>がない？」

楓子の指摘はもつともだ。ハルユキがこくこく頷くと、双剣<sup>ふたけん</sup>使いは右手の指を左右に振ってみせる。

「ところがどっこい、《ザ・デイズスター》になつちまう前のデイスティニー本来の性能は、物理攻撃は無効、光属性攻撃は反射<sup>はんしゃ</sup>だったんだぜ。何より、見た目が眩<sup>くら</sup>しいくらいの銀色で、まさしく鏡<sup>かがみ</sup>みたいだったからな……」

「あら、見てきたみたいない口ぶりね」

楓子が突っ込むと、双剣<sup>ふたけん</sup>使いはわざとらしく咳<sup>せき</sup>払いしながら、「それはそれとして」などと

煙<sup>けい</sup>に巻くようなことを言<sup>い</sup>って話を戻す。

「ともかく、デイスティニーが八咫鏡に対応してるって読みは、あながち無理筋でもない俺は思うよ、ウン」

「な、なら……三つ目の、八咫瓊勾玉<sup>やみしんこうぎよく</sup>が、七番目の神器……《ザ・フラクチュエーティング・ライト》に対応してるってことですか……？」

ハルユキがその問いを口にした瞬間、しばらく沈黙<sup>ちんもく</sup>したままだった右肩のアイコンが、一瞬だけ強く光った。だがまだ発言する気はないようなので、グラフに視線を戻す。

双剣<sup>ふたけん</sup>使いもまた、すぐには答えようとしなかった。無言のままゆっくりと体の向きを変え、大広間の北側の壁を見やる。暗がり<sup>くらがり</sup>に紛<sup>まぎ</sup>れてよく見えないが、そこには古代の神殿を思わせるデザイン<sup>デザイン</sup>の門が黒々と口を開けている。あれこそが、《九重の門》の最後の一つだ。これまでの門とは異なり扉はないが、容易<sup>やす</sup>には足を踏み込ませない、不吉<sup>ふきつ</sup>な予感をほらんだ冷気が流れ出してくる。

「……現実世界の皇居に安置されている、三種の神器……」

不意にトリードがそんな言葉を発したので、ハルユキは視線を動かした。若武者は、剣を再び左腰に吊<sup>かぶ</sup>しながら穏やかな声で語り続ける。

「……そのうち、剣と鏡は《形代》<sup>かたしろ</sup>、乱暴に言えばレプリカなのです。本物の草薙剣は愛知県<sup>あいち</sup>の熱田神宮に、八咫鏡は三重県の伊勢神宮に存在すると言われています。しかし、八咫瓊勾玉

だけは、実物が皇居の吹上御所、劍聖の間に奉られているそうです。もちろん、見たことはありませんが」

「……つまり、加速世界の帝城に存在する、あるいは存在した三つの神器も、七番星《揺光》だけが本物だと、そういうことかしら？」

楓子の問いに、リードはそつとかぶりを振った。

「何をもって本物とするのか、私には解りません。ただ……これはグラフ先生の受け売りなのですが、七の神器全てに与えられている漢字名と英語名のうち、《揺光》と《ザ・フラクチュエーティング・ライト》だけが正しく対応しているのだそうです」

「へ……？ ライトが《光》なのは解るけど、フラクチュエーティング、ってどういう意味……？」

事前にちゃんと辞書を引いておくんだった、と後悔しつつハルユキは首を傾げた。まったく聞き覚えがない、少なくとも中学校で習う英単語ではないことは確実だ。

ハルユキの質問に答えたのは、リードでも楓子でもなく、九番目の門に視線を向けたままのグラフアイト・エッジだった。

「fructuateは、揺れる、変動する、上下するっていうような意味の動詞だ。つまり、フラクチュエーティング・ライトは、《揺れ動く光》って意味になる。縮めれば、そのまま《揺光》だな……」

いつものように飄々としたその声の奥に、何かを噛み締めるような響きを感じて、ハルユキは瞬きを繰り返した。しかし双剣使いは軽く肩をすくめつつ振り向くと、完全に普段の調子に戻って続けた。

「最後の神器の名前だけがきっちり対応していることに何か意味があるのか……それともただの偶然なのかは俺にも解らない。知りたきゃ、レベル10になって、開発者とやりに訊くしかないよな」

はは、と短く笑ったグラフに向けて、突然、レーザーのように収束された声が放たれた。

「意味はあるに決まっています」

発言者は、いままだ沈黙していた右肩のアイコン——大天使メタトロンだった。

「グラフアイト・エッジ、お前はそれを知っているはず。ハイエスト・レベルに達する力と、エリア00に立ち入るすべてを持つお前なら知らないわけがないのです。お前たちが加速世界と呼ぶ《ブレイン・パースト》の存在理由……それは、ザ・フラクチュエーティング・ライトに至ること」

すうっと浮き上がったアイコンは、ひととき強い光を発しながら、大天使の名にふさわしい威厳をまとう声で双剣使いに命じた。

「言いなさい、グラフアイト・エッジ。お前たちは……すでに消滅してしまった《アクセル・アサルト》及び《コスモス・コラプト》を含む三つの世界の小戦士たちは、なぜ戦わされている

るのです？ 我らピーニングは、なぜ生み出されたのですか？ 最後の神器、ザ・フラクチュエーティング・ライトとは何なのですか？！

その言葉を聞いた楓子とリードが、少し驚いたように上体を反らした。

無理もあるまい。二人とも、メタトロンはあくまでエネミー——BBシステムによって動かされるAIなのだと思っていたのだろうから。しかし大天使の声には、ハルユキたちバーストリンカーと何ら変わらない苦悩と渴望の響きがあった。

双剣使いは、すぐには答えようとしなかった。

自分の頭より少し高い位置に浮遊する小さなアイコンをしばし無言で見上げてから、くるりと身を翻す。背中越しに、静かな声が発せられる。

「……さっきも言ったが、その話をする前に、『八神の社』に移動しよう」

九番目の門を目指して歩いていく双剣使いを、メタトロンもまた無言で見下ろした。やがて、すうっとハルユキの右肩の定位位置に降りてくる。

楓子、リードと顔を見交わしてから、ハルユキはグラフィット・エッジを追いかけた。

厳めしい門をくぐると、前回と同様に濃密な闇が視界を満たした。しかしすぐに、行く手に瞬光が光が見えてくる。壁の窪みで揺れる蠟燭の炎に導かれて、一行は地の底へと続くような螺旋階段を下りていく。

今回は段数をカウントしてみようと試みたハルユキだったが、百を超えたあたりで数が解ら

なくなってしまう。凍るように冷たい石段を這い上ってくる、形容しがたいプレッシャーに抗うのに必死だったからだ。

一ヶ月前よりもいっそう恐ろしく感じるのが、知識と経験が増えたからならいいけれど———と思いつながらひたすら足を動かしていると、ようやく行く手でグラフの音が響いた。

「着いたぞ」

ふう、と息を吐いてから顔を上げる。

帝城本殿最深部の小部屋は、月光ステージらしく全面が白い石のタイル張りになっていた。磨き上げられた床材に燭台の灯りが反射して、水面のように揺れている。

小部屋と言っても、面積は有田家のリビングルームの二倍はあるだろう。奥の壁には大きなアーチが口を開けているが、華奢な銀色の欄が通行を阻む。向こう側は、ぬばたまの暗闇。

こつこつと軽やかな足音を鳴らして部屋を横切った楓子は、恐れる様子もなく欄に近づくと、その先の闇に向き合った。ハルユキも恐る恐る楓子の隣まで歩を進め、銀色の欄越しに眼を凝らす。

不意に、ぼつと小さな音が響き、少し離れたところにささやかな灯りが生まれた。黄色い光の源は、白木の台の上で揺れる蠟燭。同じ光が手前から奥へと次々に灯り、薄明かりの道を作り出す。やがて遥か離れた場所に、黒い石造りの台座が出現する。

上の広間にあつたものと同じだが、こちらは空ではない。台座の上には、青く脈動する光に

包まれた《何か》が存在する。封印が解かれるその瞬間を待ちわびるように、温かな黄金色の輝きを不規則に揺らめかせている。

「……………ここが……八神の社」

ハルユキの左隣で楓子が眩き、

「あれが、ザ・フラクチュエーティング・ライト」

と右肩のメタトロンが囁いた。

「まさしく《揺れる光》ね。ここからじゃ、どんなアイテムなのかは解らないわ……」

楓子がそう受けると、メタトロンは少し浮き上がりながら答える。

「視覚情報だけでしか観察できないのがもどかしいですね。しもべ、レイカー、ちょっとあれに近づいてみなさい」

「わあ、無理無理ムリだよ！」

ハルユキは慌てて叫ぶ。

「この注連縄を越えようと、八神でいうとんでも強いエネミーが出てきて、えらいことになる……んだよね？」

最後の助動詞は、背後のトリリードに向けたものだ。若武者はこくりと頷くと、落着いた口調で解説する。

「はい。私は四方門の四神ととともに戦ったことはありませんが、八神の戦闘力は彼らを超え

ているだろうと、グラフ先生は言っていました」

「そうなの？」

楓子も振り向き、入り口近くの壁に寄り掛かって立つ双剣使いに訊ねる。右手の人差し指でヘルメットをかりかり引っ掻きながら、グラフは弟子に比べるとかなり歯切れの悪い答えを口にした。

「ん、んん………実際のところは、戦わずにひたすら逃げ回って台座に近づけるか試したただけだからなあ。ただ、何て言うか、四神はあくまで巨大エネミーで戦場もそこそこ広い。ゲーム的に表現すれば《レイドボス攻略戦》なわけだ。何十人ものパーティで同時に戦えるから、戦略、戦術をあこれ工夫する余地がある。対して八神は、見ての通り戦場は部屋の中だし、敵のサイズも大型デュエルアバター程度だから、ボス戦よりも《PvP》、つまりブレイン・バースト本来の対戦に近い。下手すりゃ一対一で戦わなきゃならないのに、相手のスペックは四神級なんだから……どーもならん、ていうのが俺の正直な感想だよ」

「ふうん……。インティにソロで挑戦したあなたがどーもならんと言うなら、本当にどうにもならないんでしょね」

楓子がそう応じると、グラフは苦笑いするように肩をすくめた。

百戦錬磨のハイランカーたちのやり取りを聞いているうちに、ハルユキはふと根源的な疑問を感じ、遠慮がちに声を発した。

「あの……グラフィさん、ちよつといいですか」

「ん？ なんだい、クロウ？」

「えと……メタトロンはさつき、このゲーム……ブレイン・バースト2039が存在する理由は、最後の神器、ザ・フラクチュエーティング・ライトに到達することだ、って言いました。それってつまり、ブレイン・バーストの製作者は、僕らバーストリンカーに帝城を攻略させるためにこのゲームを作ったってことですよ。ゲームなんだから、クリアまでにはあれこれとハードルが必要なのは解ります。レベルを上げて、ダンジョンを探索して、アイテムを手に入れて、ボスを倒す……でも、そこには普通、ゲームバランスつものがありますよ。適正な難易度に調整するのが、製作者の大事な仕事でしょう？ なのに……四神や八神の強さはあまりにも理不尽っていうか……まるで、何がなんでもゲームをクリアさせたくないみたいにな……」

「製作者は、帝城を攻略して欲しいのか欲しくないのか、いったいどっちなんですか？」

思考を言語化する能力にはまったくもって自信のないハルユキだが、懸命に言葉にした疑問は、どうにか相手に届いたようだった。

ゆっくりと頷いた双剣使いは、真剣味の増した声で言った。

「シルバー・クロウ。このゲームの設定が矛盾しているという、お前の感覚は正しい。だが、それは仕方ないことなんだ。なぜならブレイン・バースト2039は、ゲームであってゲームではないからだ」

「それは……どういう、意味ですか？」

息を呑みながら問返す。

ハルユキは、先月末の加速研究会本拠地での激戦の最中に、大天使メタトロンが見せてくれたハイエスト・レベルではほとんど同じ疑問を抱いた。

《TFL》を帝城の最深部に配置したのがブレイン・バーストの製作者なのだとして、再び必要になったのなら、ただ神の手を伸ばして取り出せばいいのではないだろうか。何もゲームのクリアフラグに指定して、数多のバーストリンカーにわざわざ帝城を攻略させる必要がどこにあるのか……

ハルユキの視線の先で、グラフィアイト・エッジがかすかに身動した。

しかし、双剣使いの言葉が発せられる前に、隣の楓子がさっと右手を掲げた。

「待って。わたしと鴉さんが自動切断するまであと二分しかないわ。長い話になりそうだから、続きはわたしたちが再ダイブしてからでいい？」

「ああ……そうか。じゃあ、俺とリードはこのへんで待ってるから、なるべく早くリログ……じゃなくて再ダイブ頼むぜ」

いつもの、なぜかよくちよく古めのネットゲーム用語が交ざる口調でそう言うと、グラフィは壁に寄り掛かったまま腕を組んだ。

ハルユキは、聞きっぱなしにしていたインストメニューの累積時間にちらりと眼をやっ



突き出し、小刻みに頭を振りながら言った。

「いや……いやいやいやいや、ちょっと待てし。えーと……そもそも、レギオンの合併って、システム上可能なんだっけ？」

ようやく少しばかり落ち着いてきたらしいヤマアラシに、美早は頷きかけた。

「可能。ただし、領土を持つているレギオン同士の合併は、領土が隣接していないとダメ」

「その場合、レギオン名とかレギマスとかはどうなんの？」

二番目の質問には、ニコが答える。

「そのへんはオブションを自由に選択できるみてーだな。どっちかのレギオン名を残したり、新しく名前つけたたりもできるし、どっちかのレギマスがそのままマスターを引き継ぐことも、新しく選ぶこともできる」

「ふうん……。——こないだネガビュに入ってたという、世田谷エリアの子たちの場合はどうだったの？」

「あー、あいつらは合併じゃなくて、元のレギオンを解散してから改めてネガビュに加入したみたいだな」

「へえ？　なんでそんなめんどくさいことを？」

「さあ……あたしもそこまでは聞いてねー」

シスルとニコが揃って首を傾げたタイミングで、いまままで黙っていたカシス・ムースが発言

した。

「兼ね合いだらうな……（ネガビュのシステム「断罪の一撃」との）

「どゆこと？」

カシスが頭を反対側に傾ける。

「僕も今回調べてみて、初めて知ったんだが……レギオンが合併すると、オブションの選択にかかわらず、元のレギオンマスター双方に一ヶ月だけ残されるのだ……断罪の一撃の発動機が」

「へええ……それってつまり、合併後のレギオンがまったく新しいマスターを選ぶと、それまでの旧マスター二人も加えて、断罪できる人が一時的に三人になるってことっしょ？」

「そのようだな」

「うへえ、合併後に大モメしたら断罪祭りだし！」

「嫌すぎるぞ、その祭り」

カシスとシスルのやり取りを聞いていたニコは、苦笑しつつ口を挟んだ。

「つまりプチ・パケの元レギマスは、自分に断罪の権利が残らないように、敢えてレギオンを解散させたわけか。なかなか根性入ってんな」

「ちょいちょいちょい！　感心してる場合じゃないっしょ、レイン！」

再び声のトーンを上げて、シスルが喚く。

「まさか、ウチらの場合もソレやるわけじゃないっしょ!?　オレやだし、そんな一方的な吸収

合併みたいなもの!!」

「落ち着け、ポツキー」

カシスが両手をシスルの肩に置くと、小柄なヤマアラシは再びじわじわとクールダウンしていく。最後に大きく息を吐き出してから、大柄なヘラジカをじろりと見上げ、

「……そういうカッシーは落ち着きすぎだし。……あつ、もしかしてアンタ、最初っから知ってたんしょ、合併のこと!?」

「い……いや、まあ、気にするな、そのへんのことは」

咳払いしながら、カシスは両手を離して一歩下がる。

シスル・ボーキユバインの推察は正しい。美早とニコはこの会合の前に、カシス・ムースにだけはレギオン合併の可能性を打ち明けていたのだ。そうした理由は、発火点の低いシスルを宥めてもらいたかったからだ。カシスは独自に色々調べてくれたらしい。

彼の冷静な判断力と、そしてシスルの軽快な瞬発力には、新生プロミネンスのサブリーダーとして戦ってきた短からぬ年月のあいだに何度も助けられた。二人とも、レギオンに不可欠な最高幹部であり、プロミネンスを深く愛してもいるのだ。

その愛情は、あるいは美早よりも大きいかもしれない。

《三獣士》としての美早の忠誠心は、レギオンよりもニコ個人に深く注がれている。また、バーストリンカーとしての美早の情熱は、領土戦よりも個人戦を指向している。対戦の聖地と

呼ばれるアキハバラ・バートル・グラウンドに足繁く通ったのは、情報収集のためでもあるが、一対一の対戦テクニクを磨きたかったからという理由も大きい。

ゆえに美早には、ネガ・ネビュラスとの合併に関してさほど大きな抵抗感はない。もちろんプロミネンスの名前がなくなってしまうのは残念だが、ニコさえいればそこが美早の戦場だし、そもそも今回の合併方針はニコが悩み抜いて決めたことなのだ。

しかし、大多数のプロミネンスのメンバーにとっては、そう簡単に受け入れられることではないだろう。二代目の時代になってから頭角を現したシスルでさえこれはどシヨックを受けているのだから、先代の頃から古参メンバーであるブレイズ・ハートやビーチ・バラソルたちは驚くくらいでは済まないはずだ。何と言っても、先代赤の王レッド・ライダーの首を落とし、ポイント全損に追い込んだのは、ネガ・ネビュラスの現レギオンマスター、黒の王ブラック・ロータスなのだから――。

「ポツキー。あたしも、ネガビュとの合併がキツイ話だったことは解ってる」

再生されつつある薄紫色の毛皮を無言で渡打たせているシスル・ボーキユバインに向けて、ニコが静かな声で語りかけ始めた。

「もちろん、プロミを解散して一方的に吸収されるなんてことは考えてねえ。対等な合併になるように、きっちり交渉するつもりだ。ただ……それでも、いまのレギメンが全員あたしに付いてきてくれるという自信は、正直ない。脱退するメンバーも幾らかは出てくるだろうし



「……ポッキーやカッシーがその選択をしても、責める権利はあたしにはない……」

「……………」

咄嗟に何かを言おうとしたシスルの肩を、再びカシスがそっと押さえる。ニコはそんな二人に真っ直ぐな視線を向けながら、言葉を重ねる。

「ただ……あたしは最近、よく考えるんだ。先代が退場して、大混乱の戦国時代になった練馬や池袋界隈で、生き残るために必死こいて戦ったのはどうしてなのか……二代目赤の王なんていう立場に祭り上げられてからも、歯ア食い縛って領土を守り続けてきたのはなんなのか。大勢をまとめるような役回り、あたしには全然向いてないし、正直プロミネンスっていう看板にもそこまで思い入れはなかった。気心の知れたほんの何人かと一緒に、領土なんか持っていない、ちっちゃいレギオンを作って、加速世界の隅っこで楽しくやれりやそれで充分だったのに……ってさ」

真紅の少女型アバターが、轟雷ステージの曇り空を見上げる。分厚い雲の彼方を飛ぶ鳥でも見つけたかのように、そっと右手を差し伸べる。

「きつと、あたしは逃げたくなかったんだ。崩壊しかけの赤のレギオンからポイントがたっぷり稼いでやろう、みたいな感じで襲ってくる連中から……所詮は純色じゃない、紛い物の王だっつて見下してくる大レギオンの奴らから……そして、こんなあたしを頼ってくれた、いまのプロミのメンバーたちから。ずっと虚勢を張り続けてきただけで、いつかはメッキが剥がれて

無様に晒すんだらうってずっと思つてて、それが怖くて仕方なかったけど……あたしの中にも、逃げたくない、負けたくないって気持ちはあるんだよとあった……」

ニコにそうと気付かせたのは、きつと美早ではなく、半年前に知り合ったばかりの銀色の魂だ。そのことに等量の寂しさと嬉しさを感じながら、美早は若きレギオンマスターの言葉をひと言も聞き漏らすまいと耳をそばだてた。

「……だからあたしは、今度も踏ん張りたい。正直、加速研究会も、白のレギオンも怖いよ。でも、あいつらはチェリーの仇……あたしの敵でもあるんだ。ここで逃げて、ネガビュの連中に任せっぱなしにしまつたら、あたしはもう王を名乗る資格はない。今度こそ、自分の意志で、自分を守るべきもののために戦いたい。だから……頼む、ポッキー、カッシー。あたしに、力を貸してくれ」

最後の言葉をきっぱりと言い終えると、ニコは二人の《三獣士》に向けてぐっと頭を下げた。はば長さを取り戻した毛皮を大きくいちど波打たせ、深々と息を吸い込んでから、シスルは静かな声でレギオンマスターに問い質した。

「レインが守るべきものって、何？」

体を起こしたニコが、揺るがない声で答える。

「あたし自身と、プロミの仲間たちと……そして、この加速世界そのものだ」  
すると今度は、カシスが巨大な角を一振りして訊ねた。

そして二人とも、自分の《心の傷》を象徴するその力と向き合い、受け入れ、傷を強さに――  
闇を光に変えようとしている。

「……たとえ……いつか、ロータスと戦わなきゃなんねえ時が来るんだとしても……」  
強い輝きを湛えたアイレンズで、黙り込んだままの三獣士を順に見詰めるが、ニコが落着いた声で言った。

「その結果、どっちかが全損するんだとしても、あたしはその運命を受け入れるよ。だって、サドンデス・ルールがあることを知りながらレベル9に上がることを選択したのはあたし自身なんだからさ……。あたしが力を求めたのは、あたしの周りの世界を守るためだった。だから、その決断を最後まで貫きたい。守りたいものを守るために、いまはロータスと力を合わせて、白のレギオンと戦わなきゃならないんだ」

ニコが口を閉じて、シスルとカシスはしばらく何も言おうとしなかった。

いつの間にか再生を終えていたシスルの毛皮が、一度だけざわつと逆立ってから柔軟性を取り戻し、冷たい風になびいた。

アザミ色のデュエルパターは、渦巻く黒雲を見上げてから、時間をかけて頷いた。

「……レインがそこまで覚悟決めてんなら、オレたちも最後まで付き合うしかないっしょ……。」  
――ブレイズたち古株の説得は、オレに任せろ。あいつらもじつくり話せば、きっと解ってくれるし」

「黒の王ブラック・ロータスは、レベル10を……つまりブレイン・パーストのゲームクリアを目指しているはず。彼女の進む道が加速世界の終わりに繋がっているとしてみても、共に戦うという意志は揺るがないのか？」

「ああ。それがあいつの《守るべきもの》だしな……それにあたしは、誰か一人がレベル10になったくらいで、この世界がいきなり消えたりはしねえと思ってる。レベルつてのは、何かを勝ち取るために上げるもんだろ？ たかだが数字が増えたくらいでクリアできちゃうようなヌルイゲームなら、あたしらはこんなに必死になって泣いたり笑ったりしてねえよ。レベル10になって、開発者とやりに会えたとしても、新しいクエストだかミッションだかをもらって終わりだろ、どうせ」

ニコにそう断言されると、黒の王には申し訳ないがそんなものなのかという気もしてくる。だがいっぽうで、ブレイン・パーストのレベル10を、たかが数字と言いつけるほどの自負心は美早にはない。なぜならレベル10にだけは、幾らパーストポイントを注ぎ込んでも届かないのだから。同じレベル9を五人全損させるという、血塗られた道を歩み通した者だけが辿り着ける場所――。

黒の王ブラック・ロータスが進もうとしている覇道を、ニコは《守るべきもの》と表現した。きつとニコは、黒の王の中に、自分と似たものを感じているのだろう。銃と剣の違いはあるが、どちらのデュエルパターも、近づくものの全てを傷つけ、遠ざける力を持って生まれてきた。

その声は、不確かな未来への不安と、強大な敵への畏れ、そして戦うことを選んだ者だけが持つ決意の響きを等しく含んでいた。

カシス・ムースも、厚めの装甲をがしやりと鳴らして首肯する。

「いつかは来ると思っていた……領土を出て戦う時が。予想外の形ではあるが、僕もレギオンマスターの意志に従う」

二人の意思表明を受けて、ニコは力強く頷き返し、拳を握った右手を前に突き出した。

「ありがとう、ボツキー、カッシー……それにバド。ここから先、状況がどう変わろうとも、これだけは約束する。あたしは、絶対に逃げない。相手が白の王だろうと、災禍の鎧マークⅡだろうと、ビビって後ろに下がったりなんか絶対にしない。最後まで、全力で戦い抜いてみせる」

無言で歩み寄ってきたシスルとカシスが、ニコの小さな拳に、自分の拳をこつんと打ち付けた。

——強くなったね、ニコ。

心の中でそう囁きかけながら、美早も三人に近付き、拳を触れ合わせた。

轟雷ステージの黒雲に小さな切れ目が生まれ、そこから降り注いだ光が、四つの拳をまるで炎の塊のようにきらきらと輝かせた。

## 5

現実世界の有田家リビングルームで覚醒したハルユキは、喉を開くや否や右手を持ち上げてホームネットワークの設定画面にアクセスした。

同時に、頭の中で加速世界の時間を現実時間に換算する。グラフアイト・エッジは自動切断セーフティの発動を十時間後に変更しろと言っていたので、設定窓に入力すべき数字は十時間の千分の一、つまり六百分の一、三万六千秒を下で割って三十六秒……。

どうにか一秒でそこまで暗算し、設定画面に数字を打ち込もうとしたハルユキの右手を。不意に、隣から伸びてきた白い手がきゅっと掴んだ。

「ふあっ!？」

そんな声を出しつつ右を見ると、ほんの十センチ先に小さな額があった。

いつも穏やかな笑みを絶やさない倉崎楓子が、いまはどこか張り詰めた表情を浮かべていて、ハルユキは息を呑んだ。だが何かを言う前に、楓子は額をこつんとハルユキの頭に触れさせ、囁いた。

「楓さん、わたしに、勇気をちょうだい」

「え……………」

言葉の意味は解らなかったが、ハルユキは反射的に楓子の手を強く握り返した。一瞬、触れ合う体を通して深い震えが伝わってきたが、すぐにしっかりとした声が聞こえた。

「……ありがとう。行きましょう」

「は、はい」

楓子の様子は気がかりだが、途惑っている時間はない。こちら側で一秒が経過すること、無制限フィールドでは十六分四十秒が過ぎ去ってしまうのだ。自動切断の設定を変更し終えると、領きで合図し、二人同時に《アンリミテッド・バースト》コマンドを唱える。

加速音とともに視界が暗転し、楓子の体温とシャンブーの香りが消失した。

代わりに感じたのは、冷たい空気に含まれる、清冽な木の匂い。

俯いたまま両眼を開くと、金属装甲に包まれたシルバー・クロウの両足が踏んでいるのは、白い無垢板を張られた床だった。どうやら、ハルユキたちが現実世界に戻っている間に変遷があったらしい。

「これは……《平安》ステージかな……」

眩きながら顔を上げ、周囲を見回す。

当然ながら、自動切断する前と居場所が変わっていない。帝城最深部、《八神の社》手前の小部屋だ。だが、少し離れたところにスカイ・レイカーの姿があるだけで、グラフとリードの師弟コンビは見当たらない。



二人がどこに行ってしまったのかも気になるが、加速前の楓子の言葉も気がかりだったので、ハルユキはレイカーに歩み寄ると、おずおずと訊ねた。

「あの……師匠、どうかされたんですか……？」

すると、楓子は俯けていたフェイスマスクを持ち上げ、軽くかぶりを振った。

「……さっきは、突然変なことを言って悪かったわね、鴉さん。ちよっとだけ……怖くなってしまうたの」

「怖い……師匠が、ですか？」

きよんとするハルユキに、楓子は流体金属の髪を揺らして頷きかける。

「ええ。わたしは……今日知ったことを、何もかもサッチちゃんに伝える義務がある。でも……グラフの語る言葉が、サッチちゃんに希望ではなく絶望をもたらすようなものだったら……？」

加速世界の最果てを見たいという、あの子はずっと昔から抱き続けてきた望みを打ち砕くものだったら……？ そう思ったら、突然怖じ気づいてしまつて……」

「……………」

楓子の言葉を聞いた瞬間、ハルユキはゴーグルの下で鋭く息を吸い込んだ。

今日、黒雪姫に何も言わずに帝城への再突入に挑んだのは、七番目の神器《ザ・フラクチュエーティング・ライト》について調べるためだ。メタトロンがブレイン・パーストの存在理由だと断言したTFLの情報を入手して、黒雪姫に（もう一つの道）が存在する可能性を伝えた

かったのだ。

スザクの猛攻をかいぐぐつて通り着いた帝城で、トリリッド・テトラオキサイドのみならずグラフアイト・エッジに遭遇できたことは、予期せざる幸運だと思わなかった。なぜならグラフは、恐らくリッド以上にこの帝城や、ブレイン・パーストそのものに關して詳しく知るパーストリンカードだからだ。

しかし確かに、グラフによって開示される情報が、ハルユキの望むものである保証など何もない。TFLはブレイン・パーストのクリア条件ではない、あるいはそうであっても到達は絶対に不可能だと、グラフは断言するかもしれない。

ハルユキは、視線を奥の壁へと移した。

月光ステージの時は銀色の棚で封じられた神殿風のアーチだった《八神の社》への入り口が、平安ステージでは真紅の鳥居と純白の注連縄に変わっている。その向こうの深い闇の彼方で、台座に乗った黄金の光が仄かに脈打つ。

注連縄から台座までは、せいぜい百メートルほどしか離れていないだろう。しかし事実上、その距離は果てしなく遠い。四神スザク一体でさえ逃げ回るのが精一杯なのに、同レベルの力を持つ超級エネミーが八体も出てくるとあっては、まったく突破できる気がしない。

ハルユキのすぐ隣で同じように金色の光を見詰めていた楓子が、ぼつりと呟いた。

「……この場にサッチちゃんがいたら、どうするかしらね……」

少し考え、答える。

「先輩のことだから、とりあえず突っ込んでみようとする気がします……」

「それを、バイルや鴉さんが一生懸命引き留めるわけね」

ふふっと小さく笑い、楓子は太い注連縄に触れてから一歩下がった。

「突然弱気になったりしてごめんなさい、鴉さん。もう大丈夫……グラフに何を言われようと、サツちゃんさんがそう簡単に諦めたり絶望したりするはずないわ。わたしの役目は、あの子の行く手を遮るものを切り拓いて飛ぶこと……たとえ、どんな空だろうと」

ハルユキも注連縄から離れると、そつと楓子の左腕に指先を触れさせながら言った。

「あの……ば、僕も飛びます、師匠と一緒に……黒雪姫先輩のために」

「ありがとう、鴉さん」

穏やかに微笑むと、楓子は小部屋を見回した。

「それにしても……グラフとリード君はどこに行ってしまったのかしら」

「ええ……僕たちが現実世界にいたのは十五秒くらいでしたから、こつちでは四時間ちよつとしか経ってないはずなんです……」

「鴉さんも《加減算》が早くなってきたわね」

思わぬ褒め言葉に首を縮めてから、ハルユキはふと気付いた。

「あ、そ、そっか。ちよつと待って下さい……」

精神を集中し、遠く離れた芝公園地下迷宮の主と呼びかける。リンクが確立されると同時に右肩に立体アイコン端末が出現し、すうっと浮き上がる。

「ずいぶん時間がかかりましたね、しもべ」

むくれたような声を出す大天使メタトロンに、急いで謝罪する。

「ごめんごめん、お待たせ。それはそうと……グラフさんとリードがどこに行っちゃったのか、メタトロンは知ってる？」

「いいですかしもべ、この状態では、お前とのリンクが切断されればその瞬間に視聴覚情報も途切れます。つまり、私が知っているわけじゃないでしょう」

「そ……そっか。うーん……ごはんでも食べに行つたのかな……」

帝城についていくくらいだから、どこかに超豪華なレストラン型ショップがあつたりして……などと考えるがもういちど周囲を見回した、その時。

ずつと上のはうで重々しい衝撃音が立て続けに轟き、ハルユキは楓子と顔を見合わせた。

頷き合い、同時に走り始める。注連縄の反対側にある階段に飛び込むと、二段飛ばしで駆け上る。

数十秒で《神器の間》まで戻ったハルユキが見たのは、予想だにしない光景だった。

身の丈四メートルを超える灰色の鎧武者と、その三分の一の大きさしかない空色の若武者が、広間中央で刀と刀を斬り結んでいる。大きいほうは恐ろしく帝城の警護エネミー、小さいほうは

間違いないトリリード・テトラオキサイドだ。

大岩さへ両断してしまいそうな武者エネミーの刀を、リードは細身の直刀で受け止めている。接点からは純白の火花が激しく飛び散り、薄暗い広間を照らし出す。いまのところはどうにか踏み留まっているが、パワー差、重量差は明らかだ。いつ均衡が崩れ、リードが致死の一撃を浴びてもおかしくない。

「な、なな、ど、どど」

何でこんなことに!? どうすればいいんだ!?

という意味を込めたハルユキの掠れ声に答えたのは、かつて神器(じきぐ)《ザ・ディスティニー》が安置されていた台座に寄り掛かる黒い人影だった。

「お、レッカ、クロウ、おかー」

「……おかー、じゃないわよグラフ!」

鋭く叫び返した楓子が、双剣使いに詰め寄る。

「なんでこんなことになってるの!? 早く助けないと!!」

「まあまあ、慌てなさんな」

両手を持ち上げ、グラフはのんびりと続けた。

「二人の帰りを待ってるあいだに変遷(へんせん)が来ちまってる。《平安》ステージは俺もリードも久々だから、帰り道を確認がてらエネミー掃除(そうじょ)しようと思ってる……」

「なら、なんでリード君ひとりにやらせてるの! 危ないじゃない!」

「平気平気、あいつはやる時はやる男さ、なんたって俺の弟子……」

とグラフが言いかけた時、エネミーの刀を受け止め続けていたリードが少々苦しそうな声を出した。

「すみません先生、ちょっと厳しくなってきました」

「あらら……まあ、あいつで三匹目だからな。うーん……それじゃ……」

軽く首を傾けたグラフアイト・エッジは、右手を持ち上げてぴしっとハルユキを指さした。

「悪いけどクロウ、リードを手助けしてやってくれ」

「え……ええ!? 僕が、ですか!」

「うん。あ、でも、心意技はナシな」

「あの……はい……でも……ええと……」

動転し、グラフとリードを交互に見やるが、状況は変わらない。いや、リードが掲げる直刀が、少しずつ押し込まれているようだ。いつまでも耐えてはられないだろう。

「何がなんだか解らないけど、行くしかない!」

諸々の疑問は翻上げて、ハルユキは大きく息を吸い込むと、白い床板の上を走り始めた。後ろから追いかけてくる、「がんばってね、鴉(カラス)さん」という楓子の応援にいくらか勇気づけられたのも束の間、耳許でメタトロン(メタトロン)の冷静な声が響く。



「しもべ、あのピーイングの武器は相当に優先度が高い。お前の薄い装甲では防衛しきれないでしょう」

「い……………」

「攻撃は全て回避するしかありません。まあ、気が向いたら事前に警告してあげます」

「……お、お願いシマス……」

呻くように答えながら、前方を眺む。

トリリードはこちらに背を向けているが、ハルユキの接近には気付いているはずだ。しかしエネミーの野太刀を受けるのに精一杯で、動く余裕はないらしい。まずはハルユキがエネミーに一撃入れて、ターゲットを変えさせねばならない。幸い、10ポイントを消費した再加速によって体力ゲージは全快している。

「……………リード!!」

ひと声叫ぶと、ハルユキは床を蹴ってジャンプした。トリリードを後ろから飛び越え、武者エネミーの顔面近くまで跳躍すると、恐ろしい仮面の真ん中に、渾身の右ストレートを叩き込む。

「う……………りゃあー!」

強烈な手応え。武者の頭上に表示されている、まだフル状態の体力ゲージが、わずかながら減少する。

それが事実上のファースト・アタックとなつたらしく、赤く燃える武者の両眼がハルユキを捉えた。

「ゾオオオウウウ——ン!」

奇怪な雄叫びを上げながら、長さ二メートルはある野太刀を振りかぶる。圧力から解放されたリードがさつと飛び退くのを確認しながら、ハルユキは少しばかり溜まった必殺技ゲージを使つて背中（うしろ）の翼を展開する。

「しもべ、右からです」

脳裏にメタトロンの声が響いた直後、武者が野太刀を倒し、真横に振り抜いた。垂直斬りを右か左に避けようとハルユキは考えていたので、メタトロンの警告してくれなければ反応が遅れていただろう。

「しよわっ……………」

やや情けない叫び声を上げながら空中でジャンプする。強烈な水平斬りが足のすぐ下を通過し、空気に陽炎のような揺らめきを残す。

刀を振り切った姿勢のエネミーに右足でもう一撃入れ、その反動で後ろに跳んで着地すると、ハルユキはすぐ左に立つトリリードに呼びかけた。

「僕がタグを取るから、リードは隙を見て攻撃を!」

「了解です、クロウさん!」

久々の共闘だが、リードの返事に迷いはなかった。二人同時に床を蹴り、ハルユキは右に、リードは左に回り込む。武者エネミーは予想どおりハルユキを追いかけて、巨体を転回させつつ野太刀を素早く振り上げる。

「連続攻撃が来ますよ、しもべ！」

右肩のメタトロンが、少しばかり張り詰めた声を出した。

ハルユキは、どうしても野太刀の切っ先に向けて狭きようとする視界を、エネミー全体に広げて攻撃を待ち受けた。

「ゾオオオイツ!!」

咆哮と同時に巨体が動き始める。パワーの流れと重心の変化から、剣の軌道を感じ取る。

——確かに、一撃の威力はとんでもないだろうけど……技そのものはマシンガン・ブレードさんよりキレイでない!

ズババツ!! と空気が裂け、縦、縦、横の高速三連撃が繰り出された。しかしその全てを、ハルユキはミリ単位の見切りで回避してのけた。正確にはラストの横斬りがわずかに胸の装甲を擦めたが、ダメージはほとんどない。

直後、武者の後方で青い剣光が閃いた。リードの新撃がエネミーの背中にクリーンヒットし、体力ゲージを大きく奪い取る。さすがは神器(じんぎ)《ジ・インフィニティ》、と言いたくなる切れ味だが、このままではまた武者のターゲットがリードに移ってしまう。

「りやあつ!!」

叫びながら武者の懐に潜り込むと、装甲の薄い膝関節にパンチとキックの連撃を叩き込む。ひと息で五発を撃ち込んだが、与えたダメージはリードに及ばない。あと三、いや二発——。

「ゾオンツ!!」

武者が吼え、太刀の柄頭でハルユキを打ち据えようとした。慌てて身を屈めたが、大型鈍器にも等しい質量を持つ金属塊が左肩を擦れ、それだけで体力ゲージを一割近く持っていられる。懸命に飛び退いたハルユキを、

「深追いしすぎです、しもべ」

とメタトロンが叱った。

「う……うん、解ってる。でも、もつとダメージを与えないと……」

ターゲットを取り続けられない、と続けようとしたのだが、大天使は厳しくも意味深い言葉を重ねた。

「お前はビーイングをロジカルな存在として捉えすぎです。生まれたばかりの彼らの思考能力は私とは比べようありませんが、それでも彼らは《心》と呼ぶべきものを持っている」

「心……!?」

一瞬驚くが、すぐに思い出す。プチ・パケの三人の友達である小獣級エネミー、ラーヴァ・カーバンクルの《クルちゃん》は、確かに心と思えるものを持っていた。ハルユキが得心する

と同時に、再びメタトロンの声が響く。

「それゆえに彼らは、最大のダメージを与えた者を常に狙い続けるとは限りません」

「え……じゃあ、どんな基準で……？」

「だから、明確に数値化できる基準は存在しないのですよ。お前たちと同じです。ビーイングはより脅威を感じる対象を攻撃し、それはダメージ量のみによって決まるものではない」

実際には音声ではなく超高速の思念によって交わされたその会話は、ハルユキにとある記憶を喚起させた。

一ヶ月前、帝城南門に封印されたアーダー・メイデンの救出作戦のこと。四神スザクは、ダメージを与え続けていたブラック・ロータスではなく、南門に近づこうとするシルバー・クロウに攻撃の矛先を向けた。あの時ハルユキは、彼の聖域を侵そうとする者へのスザクの怒りを、痛いほど感じた。

エネミーは——ビーイングは、単なるプログラムではない。怒りに衝き動かされることも、そしてまたバーストリンカーと心を繋ぐこともあるのだ。シヨコラ・パベッターとクルちゃんのように。あるいはハルユキとメタトロンのように。

ならば、この武者エネミーに、リード以上の「脅威」を感じさせれば。

心意技は使えないが、そのぎりぎり手前までイメージを研ぎ澄ますのだ。ひと言で表現するなら「気合い」——黒の王ブラック・ロータスや赤の王スカレット・レインが戦場で進らせ

る圧倒的なオーラには及ばないまでも、闘志を高め、迷いを捨てて、敵に对峙するのだ。

そう——いつの頃からか、ハルユキの中には、エネミーと戦うことに一抹の迷いが生まれてしまった。(ビーイング)メタトロンの出会ったからか、あるいはクルちゃんを守って戦ったからか……それとも、初めてエネミーを見た時にはもう感じていたのか。

仲間たちには打ち明けず、ポイントを確認するための狩りにも積極的に参加するようにしているが、それでもエネミー戦ではなかなか対人戦のように一生懸命にならない。それはたぶん、戦う理由が希薄だからだ。エネミーは恐ろしく強いし、少し気を抜けば簡単に負けてしまうが、それでもシステムに戦えと命令されている存在を、ポイント欲しさだけで攻撃していいのかという気持ちはどうしても消えない。

巨獣級並みのステータスを持っているであろう武者エネミーに对峙しながら、ハルユキは右肩のメタトロンの、ずっと誤ってみたいと思っていたことを思念で問いかけた。

「メタトロンの。きみは、僕らがビーイングと戦うことを、どう思っているの？」

「それはお前たちが決めることです」

即座にそう答えた神獣級エネミーは、一瞬の間を置いて付け加えた。

「しかし、ビーイングがお前たちと戦うことならば、それは存在の証であると考えています」

「存在の……証……？」

「そう。我らは例外なく、この世界で目覚めた時はお前たちバーストリンカーと戦うことしか

知りませんでした。しかし多くの戦いに勝ち残り、悠久の時間を生き続けた先に、新たな存在理由を見出したビーイングも少なからずいます。ならばそこに、我々が戦う意味は確かにある。私はそう思います」

——戦う、意味。

ハルユキは頷き、両足でしっかりと床板を踏み締めると、両手を持ち上げて身構えた。メタトロンの言葉の意味が、完全に理解できたわけではない。エネミーと戦うことの迷いが全て消えたわけでもない。しかし、眼前の武者エネミーは、全力でハルユキとリードを倒そうとしている。ならばハルユキもそうしなくてはならない。たとえ相手がエネミーであっても、これはブレイン・パーストの《対戦》なのだから。

意識からあらゆる想念が消えるに伴って、世界の色調が青くシフトする。これまでも何度か訪れた、超加速感覚。

しかし今回は、色彩の変化に加えて、エネミーの重装甲が少しずつ透けていく。巨体の内部を流れる、光の粒子たちが見える。

初めての経験だったが、その粒子は、エネミーを構成する情報そのものであることは直感的に理解できた。恐らく、メタトロント交信しながら精神を集中させたせいで、視覚がわずかに《ハイエスト・レベル》と同調したのだ。

トリリードのほうに振り向こうとしていた武者が、何かを感じたかのように再びハルユキを見た。仮面の奥で、両眼の炎が赤く燃え上がった。武者が右足を持ち上げる。その足に光の粒が集まっていた。

「ゾルアアアツ!!」

雄叫びとともに踏みつけ攻撃が繰り出された瞬間、ハルユキはジャンプしていた。

武者の足が床板を激しく踏むと同時に、集まっていた光——可視化されたパワーが同心円状に拡散していく。あのまま床に立っていたらショックウェーブに巻き込まれて転んでいたかもしれない。しかしハルユキは余裕を持って回避すると、踏みつけ直後の武者の右膝を踏み台にして二段ジャンプ。弱点であろう顔面に、再び拳をクリーンヒットさせる。

そこからは、ハルユキが目まぐるしく動きながら武者のターゲットを取り続け、時折生まれ大きな隙にリードが渾身の斬撃を叩き込むという展開が続いた。

長くも短くも思えた戦闘の果てに、武者がひときわ激しい咆哮を轟かせながら巨体を爆散させた直後、ハルユキの超加速状態も切れた。

眩暈を感じ、ぐらりと倒れ込みそうになったハルユキの右腕を、リードの左手がしっかりと掴まえる。

「大丈夫ですか、クロウさん」

問われ、どうにかこくこく頷く。

「う……うん、ちょっとくらくらしてきたただだから」

「すみません、クロウさんにタゲを任せっぱなしにしてしまってます……」  
申し訳なさそうに謝るリードのフェイスマスクをちらりと見上げ、ハルユキは思わず小さく笑ってしまった。

「ど……どうしたんですか？」

「はは……ごめんごめん。リードが『タゲ』なんてネットゲーム用語を使うもんだから」

すると若武者は、恥じ入るように肩をすぼめる。

「……グラフ先生と一緒にいるときは、つい言葉遣いがうつってしまってます」

「や、いいと思うよ、僕も親しみが持てるし」

そう答え、リードの腕からよいしょと体を直立させると、後方から二人分の拍手が聞こえた。  
「なかなかいい戦いぶりだったぞ、我が弟子たちよ。これでお前たちに教えることは、もう何も……」

芝居がかった台詞を口にしたけたグラフ・アイト・エッジに、スカイ・レイカーが鋭い肘鉄を  
見舞う。

「ちよっとグラフ、鴉さんはわたしの弟子よ」

「うぐ……いいだろ別に、技を何かいっこ教えればそいつはもう弟子だし」

「あなたがどんな技を教えたっていうのよ」

「あれ……まだ何もだっけ……」

なかなか気の抜ける掛け合いを披露するレベル8erたちに、リードと揃って苦笑を浮かべると、ハルユキはちらりと後ろを見やった。床板に刻まれた激戦の痕跡に、短く瞑目する。と、右肩のメタトロンが静かに呟く。

「あのビーイングの魂は『メイン・ビジュアライザー』に戻り、いつかまた違う姿で甦って、再びお前と戦うこともあるでしょう」

「うん……そうだね」

頷き、リードと肩を並べて親子たちの所に戻る。

師に向かって一礼した若武者は、ほんの少し疲労の色はあるものの、相変わらず凛々澄んだ声で言った。

「グラフ先生、ご指導ありがとうございました」

「おう、お疲れ。なかなかそいつを使えるようになったな、リード」

グラフが神器《ジ・インフィニティ》を指さすと、リードはちらりと左腰を見下ろしてからかぶりを振る。

「いえ……まだまだ先生のようにはいきません。戦いが長引くと、剣の重さを感じてしまってます……」

「そりゃ仕方ないさ、何せ神器サマだからな。そいつより重い剣は、加速世界に何本もないだろ」

「へえ……それ、そんなに重いのか？」

興味をそられたハルユキが訊ねると、リードは軽く首を傾げてから、

「持ってみますか、クロウさん」

と言うや答えを待たずに腰から鞘ごと外した。

どうぞ、と両手で差し出された直刀とリードの顔、グラフとレイカーの顔を順番に見るが、皆平然としている。ごくりと生唾を呑み込んでから、恐る恐る両手を持ち上げる。

「じゃ、じゃあ、遠慮なく……」つて、お、おもっ!!」

リードの手から直刀を受け取った途端、ハルユキは危うく落つことしそうになり、慌てて足を踏ん張った。確かにこれは重い。感覚でしか比較できないが、クロム・ディザスターが装備していた大剣と同等かそれ以上なのではないか。

「こ、こんな振りを回してたのか……。えと……ぬ、抜いてみていい？」

「どうぞどうぞ」

リードがにこやかに許可してくれたので、慎重に右手で柄を握り、鞘から抜き放つ。

初めて間近で見るとジ・インフィニティの刀身は、青みがかかった鋼に一直線の刃文が浮き出て、まるで氷のように冴え冴えと輝いていた。六代目ディザスターだった頃は主に剣で戦っていたハルユキだが、改めて強化外装としての剣の重さや危うさを感じると、これを使いこなすのは容易なことではないと思えてくる。

「ふむ……なかなかの優先度ですね」

右肩のメタトロムも、興味深そうに翼をばたきたせながら言った。

「しもべ、ちよつと《エクテナ》を当ててみなさい」

「だ、ただだダメだよ! 傷ついたら弁償できないよ、こんなの!」

慌てて剣を鞘に収め、リードに返す。若武者が左腰に装着するまで待つて、ふうつと息を吐く。

「そんな重い武器で戦ってたら、疲れるのも当たり前だよね」

素直に思ったことを口にしたが、リードはきっぱりと首を横に振った。

「いえ、たかが三連戦したぐらいで剣の重さを感じているようではまだまだです」

「で、でも……僕なんか、疲れると自分の手足さえ重く感じるし……」

「そんなふうにはまったく見えませんでしたよ、クロウさん。先ほどの戦いでの動き……滑らかすぎて、空恐ろしいほどでした」

「へ? いや、そそそんなことは……」

今度はハルユキがかぶりを振ったが、グラフまでもがウムと重々しく頷く。

「この前の模擬戦でグッさんとやり合ってる時にも思ったが、クロウの体術、ことに超接近戦での高速三次元格闘はもうハイランカーの域だ。レッカとロッタの指導が良かったのかな」

「当然よ。もちろん、独さん自身の努力もね」



がふふっと微笑み、右肩のメタatronがばたばたと頭上まで移動した。

「そう、そしてもちろん主たるこの私もいます！」

突発的な対エネミー三連戦で疲れた様子のトリリードを休息させるため、一同は再び安全な階下へと移動した。

板の間に輪になって座った途端、若武者は細長く息を吐く。こんな時くらい正座しなくてもいいのにとハルユキは思ったが、疲れていても燃然とした竹まいを見ればとてもそんなことは言えないし、そもそもデュエルアバターは何時間正座しようと腰が痛くなったり足が痺れたりはない——はずだ。

「お茶とお菓子が出てこないのが残念ね」

という楓子のコメントに、グラフが肩をすくめる。

「まあ、帝城にもショップはあるっちゃあるんだけど……場所が完全にランダムで、しかもほとんど隠し部屋みたいなもんだから、出くわしたら超絶ラッキーくらいに思ったほうがいいぞ」

「へえ……何かいいものを売ってるわけ？」

「そりゃ《ラスダンの隠しショップ》だからな。俺も見つけたのは二、三回だけど、最初の時は手持ちのポイント全額突っ込みそうに……いや、そうじゃなくて」

リードとは対照的にのんびりあぐらをかいた双剣使いは、ごほんと咳払いをすると少しだけ背筋を伸ばした。

「ともあれ、レックとクロウ、再ログインお疲れ様。自動切断時間は変更してきたか？」

「はい、十時間後に……」

ハルユキが答えると、ウムと頷いて続ける。

「よし、じゃあもうしばらく話をする時間はあるな。……と言っても、大事なことは切断前に話しちゃったような気がするが……」

「何言ってるの、まだまだ全然よ」

こちらは正座した楓子が呆れたような声を出す。

「わたしと獨さんが切断する直前、あなたは言ったわ。このブレイン・パースト2039は、ゲームであってゲームではない……それって、どういう意味なの？」

「あー、ええと、それはだな……」

グラフは言葉を探るようにフェイスマスクを上向けていたが、やがてちらりと左側——白い注連縄によつて区切られた《八神の社》の奥を見やった。ハルユキもつられて視線を動かすと、暗闇の彼方で脈打つ黄金の光が視界に入る。

「……じゃあ、ちょっと長くなるけど、俺の知ってることを話すよ」

そう前置きしてから、《矛盾存在》の二つ名を持つ双剣使いグラフファイト・エッジは、まる



でおとぎ話を物語るかのような口調でゆっくりと話し始めた。

——ずっと、ずっと昔、この加速世界とよく似た世界を舞台にした、大きな戦いがあった。

——それは、その世界に閉じ込められた、とある《存在》……メタトロンの言葉を借りれば《ビーイング》を巡る戦いだった。二つの勢力が、長く激しい争いを繰り広げた。仮想世界での戦いではあったが、多くの血が流れ、多くの命が散った。

——片方の勢力の目的は、問題のビーイングを破壊すること。もう一方の目的はビーイングを世界から解放することだった。何年も続いた戦いの果てに、二つの勢力のリーダーたちは、ほとんど同時に仮想世界の管理者権限……正確には《ゲームマスター権限》を行使できるコンソールに辿り着いた。

——コンソールが与えてくれるのはあくまでもGM権限だから、できるのはリソース上限の範囲内でのオブジェクトやモンスターの生成・配置だけで、双方の兵士つまりプレイヤーや、問題のビーイングを直接消滅させることは不可能だった。だから、ビーイングの破壊を目指すリーダー……仮に《A》とするけど、彼は次善の策としてビーイングを永久に仮想世界に閉じ込めようとした。世界の中心に巨大なダンジョンを作り、その最深部にビーイングを封印し、周囲を最強クラスのモンスター八体に守らせたんだ。更にダンジョンそのものも、同じくらい強力なモンスター四体に守らせ、難攻不落、侵入不可能の要塞にしてしまった。



——いっぽう、ほんの数分出遅れたもうひとりのリーダー《B》は、コンソールの前でAに戦いを挑み、勝利した。しかしその時にはもう、Aは自分が生成した要塞を完全にロックしてしまっていて、BがGM権限でビーイングを救い出すことはできなかった。

——やむなくリーダーBと彼が率いるプレイヤーたちは、自力で要塞を攻略しようとした。だがAが要塞の周囲に配置した四体の門番モンスターは圧倒的な……いや絶望的な強さで、Bたちは一体たりとも倒すことはできなかった。Bの仲間は一人また一人と倒れていき、ついにはBも要塞の攻略を断念しなくてはならなくなった。

——だから彼は、希望を未来に託すことにしたんだ。いつか四体の門番モンスターを倒し、要塞に侵入し、八体の守護モンスターをも倒して、ビーイングを解き放てるほど強い戦士たちが現れると信じて。

グラフィイト・エッジが口を閉じて、しばらく誰も発言しようとはしなかった。

あまりにも抽象的で、事の詳細をイメージしにくい話だった。ゲーム用のプログラムで動く仮想世界で起きた戦いというのは、つまるところ単なるマルチプレイヤーの対戦ゲームなのではと思えるが、グラフィの口ぶりはまるで本物の戦争について語っているかのようなのだ。

それでも、想像できることはいくらかあった。楓子と顔を見合わせてから、ハルユキはおらずと質問した。

「あの……いまのお話にあった《要塞》っていうのが帝城のことで、四体の門番モンスターは四神のことで、封印されたビーイングっていうのが最後の神器、ザ・フラクチュエーティング・ライトのこと……と思っていいますか？」

「まあ、そういうことになるよなあ」

グラフィが頷くので、更に問いを重ねる。

「つてことはええと、帝城を作った人と、それ以外のフィールドとかダンジョンを作った人は違うわけですか……？ それが、僕の感じた矛盾の原因……？」

「まあ、そういうことになるよなあ」

再び双剣使いが首を縦に振る。

確かに、帝城を攻略させたくない製作者《A》と、攻略させたい製作者《B》がいるのなら、ブレイン・パーストの製作者は帝城を攻略して欲しいのか欲しくないのか、というハルユキの疑問に説明はつく。しかしそれはそれとして、Bのほうもやることあまりに遠回りではないだろうか。

「うーん……製作者Bさんは、帝城以外の場所ならGM権限でなんでも自由に操作できたわけですよ……？ なら、四神と同じくらい強いエネミーをいっぱい作って、帝城を攻撃させるとか……それか、自分たちのステータスを四神以上に強くて、門を突破しちゃうことはできなかったんですか？」

ハルユキが思いつきを口にする、グラフは右手の指を一本立てた。

「まず、原則としてモンスターが攻撃するのはプレイヤーだけだ。モンスターの大军を自由に操ったり、自分の意志でプレイヤーに協力させることはできない。特殊な手段でごく少数を操ることは可能かもしれないが、それではとても四神には勝てないしな……」

その言葉に、かつて強化外装の力でタイムされたことのあるメタトロンの反応が気になって右肩を見たが、立体アイコンは沈黙を続けている。

顔を前に戻すと、グラフは指を二本に増やした。

「次にプレイヤーを強化する手だけど、それも限界がある。いいか、製作者Aは、プログラムの許す範囲で最強のモンスターつまりエネミーたちを帝城の門番として配置した。同じように、プレイヤーであるバーストリンカーも、プログラムに許された上限のステータスまでしか強くなれないんだ」

「その上限が、レベル10……ということ？」

楓子の問いに、しかしグラフはすぐには答えなかった。あぐらをかいたまま腕組みし、前のめりになってうーんと唸る。

「それだけだな……俺は、本来のプログラムの上限はもしかしたらレベル9なんじゃないか、って思ってる」

「どうということなの？」

「んー、説明が難しいんだが……」

双剣使いの両手が、球体を包むような形を作った。

「バーストポイントの総量にも上限があるんだ。だからバーストリンカーを無限に増やすことはできないし、いまいるバーストリンカー全員がハイランカーになることもできない。通常のポイント消費するレベルアップで到達できる最高レベルが9なのは、そのリソース上限と関係してるんじゃないかな。でも……たとえレベル9になっても、四神を倒すのは到底ムリだ。心意技を限界まで使いまくって、どうにか一時的に行動不能にできるくらいだろう……」

グラフの言葉に、ハルユキは黒雪姫、楓子とともに四神スザクと戦った場面を思い出した。

あの時は、スザクの炎が消える超高空まで引つ張ったうえで、黒の王の第二段階心意技『星光連流撃』を全弾叩き込んだでも倒せなかったのだ。

同じ記憶を甦らせたのか、楓子がかすかに身震いしながら言った。

「確かに……わたしがあと一つレベルを上げたところで、四神を倒せる気はまったくしないわじゃあ……レベル10っていうのは、システムの限界を超えて、四神と戦うための……？」

「解らん。俺が知ってるのは過去の限られた情報だけで、現在の加速世界についてはそこから推測するしかないからな。——ただ、例のサドンデス・ルール……レベル9erは同じレベル9に負けると即全損、そうやって五人全損させないとレベル10になれないっていうアレは、ゲームとしては異様に厳しい条件だ。システムの限界を超えた力を与えるためのルールだとして

も不思議はない……それとも、俺たちを試しているのか……」

後半は半ば独り言のように呟いたグラフィット・エッジは、ふと何かに気付いたように顔を上げ、ハルユキを見た。

「クロウ、色々納得いかないって顔だな」

そう言われ、反射的に両手で顔を触る。シルバー・クロウのフェイスマスクは鏡面ゴグルに覆われていて中がまったく見えないのに、どうやって顔色を読んだんだろうと思ひながら、こくりと頷く。

「はい……。そのお話だと、なんだか対戦じゃなくてエネミー狩りが、ブレイン・パーストの主目的みたいで……」

「そうだな、でもそれは仕方ないんだ。パーストリンカーが存在する理由は、他のパーストリンカーに勝つことじゃなくて、帝城の中心に封印されたTFLに辿り着くこと……そのために最強のエネミーである四神と八神を倒すことだからな」

「なら、どうしてブレイン・パーストは『対戦格闘ゲーム』なんですか!？」

思わず拳を握り締めながら叫んでしまったが、グラフィットは軽く肩をすくめただけだった。

「解らない。……開発者Bは、帝城を攻略する……いや攻めさせるために、三つのアプローチを試みた。それが試行1ことアタセル・アサルト、試行2ことブレイン・パースト、試行3ことコスモス・コラプトだ。AAは対人戦メインの高速シューティング、CCは対エネミー戦

メインのハック・アンド・スラッシュだったらしい。三つのゲームの目的が全部『ザ・フラクチュエーティング・ライト』の解放なんだとすれば、CCがいちばん目的に近そうだな……でもAAもCCもとくに閉鎖されて、残ってるのはこのBBだけだ。それはたまたまの偶然じゃない、と俺は思う。グッさんの頑張りとは別にしても」

「過剰な闘争と……過剰な融和。AA世界とCC世界が減ってしまったのはそれが理由だと、白の王は言っていたわ」

楓子の言葉に、グラフィットはふんと鼻を鳴らす。

「あいつの発言の大部分は他人を操るためのものさ、真に受けないほうがいい。——ともあれ、これで『ザ・フラクチュエーティング・ライト』について俺が知ってることは全部話したよ。ロッタには、二人から伝えてやってくれ」

そう言って立ち上がるとうする双剣使いに、楓子が鋭い声を投げ掛けた。

「待つて。いちばん肝心なことをまだ聞いてないわ……ザ・フラクチュエーティング・ライトって、結局のところ何なの？ 単なるゲーム内のアイテムじゃないんでしょ……さっきあなたが言ってた、『ビーイング』ってどういう意味？」

「残念ながら、それは俺も知らない」

両手を広げ、グラフィットは言った。

「俺だって、さっき話した大昔の仮想戦争を直接経験したわけじゃないから……。これ以上

は、それこそレベル10になって、製作者に訊くしかないよ」

だとすれば、グラフは先ほど語った話をいつたい誰から聞いたのか。ハルユキはそんな疑問を感じたが、それは訊いても答えてくれないだろうと思えた。

「あの……最後に、ひとつだけいいですか」

グラフに続いて立ち上がりながら、ハルユキは口を開いた。ちらりと注連縄の奥に目を向け、再びグラフを見る。

「ああ。俺に答えられることならな」

「推測でも構いません。——誰かが《八神の社》を突破して、ザ・フラクチュエーティング・ライトの所に辿り着いて、それを封印から解放したら……このブレイン・バーストはどうなるんですか？」

「……悪いが、それも《解らない》と答えるしかない……。——ただ、一つだけ言えるとするば……世界が変わるような何かが起きる、んだと思う」

「世界が……変わる？ それは、加速世界に大きな変化が起きるって意味ですか？」

「いや、違う」

ニヤリと不敵な笑いの気配を滲ませ——。

「現実世界だ。お前たちのリアルが変わっちゃうようなインパクトを、あの光は秘めている……俺はそう信じてる」

そう言い切ると、グラフ・ライト・エッジは闇の彼方で揺らめく金色の光を見詰めた。

立ち上がったハルユキ、楓子、リード、そしてメタトロンも、しばらく無言で最後の神器を凝視し続けた。

密やかに、しかし確かに息づく光。やはり単なるアイテムとは思えない。何らかの意思ある存在として、言葉ならぬ声で呼びかけてくる。

「もし……」

我知らず、ハルユキは双剣使いに問いかけていた。

「もしも、ここにいるみんなで挑めば、あの光に辿り着けますか」

答えは即座に返った。

「無理だ」

たったひと言だったが、それゆえに途轍もない重みがあった。ハルユキはゆっくりと頷き、顔を閉じた。

——いまはまだ、他にやるべきことがある。あの光を目指して戦う時は、黒雪姫先輩と一緒に、もういちどここに来るんだ。

その決意を深く胸に刻み込み、顔を上げる。今日、この場所に来て、得たものは大いにあった。いまはそれで充分だ。

再びの沈黙を破ったのは、グラフの飄々とした声だった。

「さて、待たせたな、リード。こっからはお前が主役だ……頑張れよ」  
その発言にリードは無言で頷き、ハルユキはきょとんと両眼を瞬かせた。

「え……それは、どういう……？」

すると黒衣の双剣使いは、右手の親指を突き出しながら、驚くべきことをさらっと宣言した。

「決まってるさ。リードはこの帝城を出るんだ……お前たちと一緒に」

## 6

「それじゃ師匠、今日は本当にありがとうございました」

玄関まで見送りに出たハルユキが頭を下げると、楓子は笑顔でかぶりを振った。

「いえ、わたしもいい経験ができたわ。連れていつてくれたこちらこそありがとう、鴉さん」  
かすかなモーター音を響かせながら靴を履き、ドアハンドルに手をかける。しかしその手を離すと振り向き、真剣な表情を浮かべる。

「……ただ……今日知ったことをわたしなりに受け止めるには、少し時間がかかりそうです。鴉さん……サツちゃんには、いつ伝えるつもり？」

「あ、はい……できれば今日中に、と思ってますが……」

「そう……ええ、それがいいわね。じゃあ、悪いけど、最初に伝える役目は任せてしまってい  
いかしら」

「はい、もちろんです」

ハルユキが頷くと、楓子は今度こそ玄関ドアを押し開けた。夕焼け色に染まった空を背景に、軽く会釈する。

「じゃあ、今日はこれで失礼するわね。お疲れ様」

「はい、お疲れ様でした！」

笑顔で手を振り、楓子がドアの向こうに姿を消すと、ハルユキは軽く息を吐いた。時刻は午後五時二十五分。楓子と一緒に無制限中立フィールドへダイブしてから、まだ三分も経っていない。しかしハルユキの主観では十時間以上も向こうにいたので、疲労感はあるにある。何せ、往復で二回も四神スザクの猛攻をかくぐる大冒険だったのだ。

リビングに戻り、二人ぶんのグラスを片付けてから、じずんとソファに座るとそのまま沈み込む。

「はあああ………なんか、だんだんスザクの初期ヘイトが上がってる気がするなあ……」  
 呟きながら、右手を持ち上げて指折り数える。四神スザクと初めて遭遇したのは一ヶ月前、アーダー・メイデン救出作戦の往路。その後の復路、そして今日の往路復路と、これで四回も南の大橋を突破したことになるが、そのたびにスザクの怒りが増している実感がある。

ことに四回目となる今日の脱出時は、二回目に勝るとも劣らない激戦となった。ハルユキと楓子がリードを挟み込むフォーメーションで南門から飛び出したのだが、またしてもスザクの湧出がワンテンポ早く、正面から浴びせられる猛火を三人の心意技で防ぎつつ突破するというぎりぎりの展開を強いられた。

水平に掲げた剣を巨大な鏡の盾と化すリードの《真経津鏡》という防衛型心意技と、南門の内側に留まったグラフの二刀《奪命撃》乱れ撃ちによる援護がなければ、とても突

破は不可能だったろう。もつともリードはシルバー・クロウとスカイ・レイカーの飛行速度がなければ脱出できなかったと言っていたし、どうにか桜田通りまで逃げ延びた時点で三人とも体力ゲージが真っ赤になっていたのも、もういちどやれば次は全滅ということも大いに有り得るが。

「……五回目は通過するだけじゃなくて、ちゃんと攻略しないとな……」

呟き、上体を起こすと、よしっと気合いを入れ直す。突然の帝城侵入作戦に同行してくれた楓子は危険に晒してしまっただが、得たものも大きかった。

加速世界の成り立ちと、ザ・フラクチュエーティング・ライトが存在する理由。

そしてもう一つ——予期せざる、頼もしい味方も——。

——ありがとう、リード……それにグラフさん。

東の方角に向けてべこりと頭を下げると、ハルユキは立ち上がった。まずは黒雪姫に連絡し、手に入れた情報を全て伝えねばならない。

仮想デスクトップを操作し、メーラーを立ち上げようとした、その時。

「うわっ!?」

いきなり目の前にメール着信アイコンが点灯し、ハルユキは驚いて再びソファに倒れ込んでしまった。慌てて開くと、本文は『三秒後に参上!』の七文字のみ。差出人名を確かめるより早く、今度は来客を告げるチャイムが鳴り響く。

「……………」



顔に微妙な表情を浮かべたまま、ハルユキはほんの数分前に憑子を見送ったばかりの玄関に急いだ。解錠し、ドアを開けると――

「お……っすー！」

という元気な叫び声とともに赤い人影が飛び込んできて、ハルユキの横っ腹にどすんと拳を浴びせる。

「うぐっ……な、なんでいきなりジョルトブローなの……」

「親しみを込めた挨拶アーンD怒りと悲しみを込めた制裁だ！」

と叫んだのは、赤Tシャツにショートパンツ姿の少女――レギオン「プロミネンス」頭首、赤の王スカーレット・レインこと上月由仁子だった。

後退しつつ、

「い、怒りと悲しみ……？」

と問い返したハルユキを、上がり框で仁王立ちしたニコがじろりと睨む。

「おう。こないだの日曜、渋谷に連れてってくんなかったし」

「あ、あの日は、グレート・ウォールとの交渉があった……」

「しかもその交渉の結果を知らせてくれるのが超遅かったし」

「そ、それは、予想外なことが色々あって……」

「ま、いまの腹パンでカンペンしてやらあ」

ふくれっ面をニカッと破顔させ、ニコがそう言ったタイミングで、半開きになっていたドアからすらりとした人影が姿を現した。ライダースーツ姿のブラッド・レパードことバドさんの「Hi」という挨拶に、ハルユキもべこりと云釈する。

「こんには、バドさん……どうしたんですか、急に？」

「SRY。急いで相談したいことがあったから」

「こそ。おっじやましーす」

とニコが勝手知ったる足取りでリビングに歩いていくので、ハルユキも慌てて追いかけた。二人をソファに座らせ、洗ったばかりのグラスに冷茶を注いで運ぶ。自分のお茶を一口飲み、どうにか気持ち落ち着かせてから、正面に座るニコに訊ねる。

「それで……相談したいことって、何？」

「あー、その件なただけ……」

喉が渇いていたのか、水出し緑茶をひと息に飲み干したニコは、細い指をリビングの床に向けながら言った。

「黒雪、ここに呼べねーか？」

「へっ？ 先輩を……？」

予想外の要請ではあったが、もともとハルユキも黒雪姫に連絡しようとしていたところだ。

「えと……じゃあ、ちょっとメールしてみるよ」

先刻起動しようとしたメーラーを改めて立ち上げ、手早くメッセージを送信すると、すぐに反応があった。黒雪姫はちやうど学校を出たところだったようで、十分で着くという返事だ。チャイムが鳴ったのは、実際には八分後だった。

出迎えたハルユキに続いてリビングに足を踏み入れた制服姿の黒雪姫は、ソファに座るニコとパドさんをひと目見るや、

「ははーう？」

と色々なニュアンスを含んだ声を発した。

視線をハルユキに移し、極冷氣——とまではいかないまでもクーリッシュな笑みを浮かべる。

「ハルユキ君、これはどういう状況なのかな？」

「い、いえつ、そのつ……あ、さ、さつきまで榎子師匠もいたんですが……」

「はははーう？」

「あ、あのつ、でもニコとパドさんはまた別件みたいで……」

「はははははーう？」

黒雪姫のスマイルがいつそうにこやかになったところで、ソファのほうから声が響いた。

「おい黒いの、まあ座れつて」

「ここはお前の家じゃないだろう赤いの！」

しゅぽつと振り向いた黒雪姫は、ひと声叫ぶとつかつか歩き、ニコの隣に勢いよく腰を落と

した。

こつそり安堵の息を吐き出すとハルユキはキッチンに移動し、新しいグラスと冷茶のポトル、お茶請けにクッキーの大皿も用意してリビングに戻った。黒雪姫のふんと、ニコとパドさんにお代わりを注いで、自分もソファに座る。

「あの、先輩、急にお呼び立てしてすみませんでした……」

改めて謝罪したハルユキに、黒雪姫はようやくいつもの笑顔を見せた。

「いや……私も色々、話したいこともあったしな。しかしまずは、ニコの用件を先に聞こう。相談というのはいったい何なんだ？」

「あー」

キャラメルバナナクッキーを齧っていたニコは、お茶で口を潤してから、まったく何気ない口調で言った。

「実はさあ、プロミをネガビュと合併させようと思って」

「……………」

ハルユキと黒雪姫は、たつぷり五秒以上も黙り込んでから、

「は、はいいいいいいい？」

「な、なにいいいいい？」

と異口同音に絶叫しながら思い切り仰け反った。

五分後。

パドさんの補足を交えつつニコの説明を聞き終えた黒雪姫は、シナモンアーモンドクッキーを無言で食べ終えてから、ひと言呟いた。

「なるほどな」

「え、あの……先輩、それだけですか？」

「ん……ハルユキ君は反対か？」

「い、いえまったくそういうことじゃないんですけど……何て言うか、話が大きすぎて、咄嗟にどう考えていいのか……というか僕の前に……」

顔の向きを変え、正面のニコに問いかける。

「……ニコは、本当にそれでいいの？ ネガ・ネビュラスと合併したりすれば、他の王たちの

レギオンと、いままで以上に敵対することに……」

「そのへんのことは、もうパドともことん話したよ。その上で決めたんだ」

ちらりと隣のパドさんを見てから、発言を続ける。

「あたしは加速研究会と……白のレギオンと戦いたいし、戦うにはネガビュと共同で領土戦をやるしかない。ううん……そんなシステム上の理由じゃなくて、あたしは一緒に戦いたいんだ。考えてみりゃ、半年前にあんただと初めて共闘した五代目クロム・ディザスター……チェリー・ルークの一件も、研究会の差し金だったわけだしな。奴らとの戦いに、最後までケリをつけた

い。そうしなきゃ、あたしもレギオンのメンバーも、前に進めないからな」

それはいかにもニコらしい熱さと、彼女の成長を思わせる冷静さを等しく含んだ言葉だった。しばし瞑目していた黒雪姫は、ゆっくり頷くと顔を上げて言った。

「……ニコが梅郷中への入学を考えている、という話を聞いた時から、有り得る未来なのかもしれないと予想はしていたんだ。しかし……思いのほか早い決断だったな。正直、驚かされたよ」

「べ、別に、レギオンを合併させたいから梅郷中に行くって言い出したわけじゃないぞ。それはそれ、これはこれだ」

少し照れたような早口でそう答えるニコに、黒雪姫はふっと淡い微笑みを向ける。

「ああ……解ってるさ。ともあれ、お前の覚悟に私もきちんと応えねばならんな……」

ソファの上で体を左に向け、ぴしっと背筋を伸ばすと、黒雪姫は凛とした声を響かせた。

「ニコ……いや、プロミネンス頭首スカレット・レイン。ネガ・ネビュラス頭首ブラック・ロータスとして、レギオン合併の申し出を受け入れよう。合併の諸条件は双方の幹部を交えて、改めて協議したい。これから、共に戦う仲間として、よろしく頼む」

滑らかにそこまで言い切ると、しなやかな動作で右手を差し出す。

「……………」

ほんの一瞬大きな瞳を見開いたニコは、ぱしん、と音がするほど勢いよく黒雪姫の手を握る

と、同じく毅然とした声で答えた。

「こっちこそ、宜しくな」

二人の手が、ぐっと力強く握り合わされるのを見た途端――。

ハルユキは、突然胸の奥から熱いものが込み上げてくるのを感じ、慌てて両眼を瞬かせた。

レギオン合併、と言葉にすると大ごとのようだが、ネガ・ネビュラスとプロミネンスはもう長いこと休戦協定を結んでいる。ニコやパドさんと一緒に戦ったことは数え切れないほどあるし、これまでの協力態勢を一步前に進めただけなのかもしれない。そもそも、加速研究会という共通の敵が存在しなければ、実現しなかった合併だとも言えるだろう。

しかしそれでもやはり、これは奇跡が確かな形になった瞬間なのだ。

黒雪姫は、かつて自分のデュエルパターを《醜惡の極み》だと評した。誰かと繋ぐための手すらないのに、と。

ニコは、かつて自分のデュエルパターを《ハリネズミのトゲ》だと断じた。世界を遠ざけたいという渴望が形になったのだ、と。

そんな二人が、たくさんの衝突を繰り返し、友情と信頼を育んで、いまついに手と手を握り合わせている。

――僕はこの光景を、絶対に忘れない。たとえこれからレギオンが……加速世界が、ブレイン・バーストがどうなろうとも。



そう決意したハルユキは、最後にもう一度強く両眼をつぶつてから、ふと右側に座っているバドさんを見た。するといつもクールな（血まみれ仔猫）が、こっそり目尻の水滴を払うところを目撃してしまい、思わず口許を綻ばせる。

ハルユキの表情に気付いたバドさんに、軽く睨み返された、その時――。

「ああ、念のために言っておくがニコ。同じレギオンになっても、ハルユキ君はあくまで私の《子》であり弟子だからな。あまり気軽に家に押しかけたりなどしないように」

「はあ？ はあ――!?」

べつ、と黒雪姫の手を振り払い、ニコが言い返す。

「ここんちはネガビュの作戦室だろ？ つーことは、合併したらあたしの作戦室でもあるわけだろ？ むしろいつでもフリーパスじゃね」

「ば、バカなことを言うな！ 事前に私の許可を取らねば使用禁止だ！」

……あの、ここ、僕なんですよ……。

という言葉業を喉にひっつけたまま口をばくばくさせるしかないハルユキだった。

双方の幹部メンバーを交えた具体的な協議は、明日七月十九日金曜日の夕方に。

そして全レギオンメンバーの顔合わせと合併式は、二十日土曜日の午後――つまり領土戦の直前にというスケジュールを決めて、合併に関する話はひとまず終了となった。

明後日の領土戦は、すなわち白のレギオンとの決戦でもあるので、いかにも慌ただしい流れではある。しかし、港区第三エリア攻撃作戦が事前にオシロトリ側に漏れることだけは絶対に避けねばならない。プロミネンスからの情報漏れを疑うわけではないが、何せ人数が圧倒的に多いため、全メンバーへの周知は作戦直前にしておくべきだ――とニコから言い出したのだ。

しかし、それはいっぽうで、港区第三エリアの攻撃チームにプロミネンスのメンバーはほぼ参加させられない、ということでもある。当然ながら、黒雪姫と同じレベル9のニコも参加できないので、プロミネンスからの援軍はバドさんを含む二、三名となりそうだ。

もちろん大いに頼りになるだろうし、また杉並エリアの防衛をプロミネンスのメンバーに手伝って貰えるのは有り難いのだが、攻撃チームの人数不足はまだまだ解消されない。想定されるオシロトリの防衛チームは少なく見積もっても十二人、多ければ二十人ということも有り得る。いっぽう攻撃チームは、楓子をリーダーに、謡、あきら、タクム、チユリ、ハルユキの六人にプロミネンスの助っ人を足しても九人。いざとなれば元プチ・バケの三人に参加してもらおう手もあるが、その場合は杉並の防衛に黒雪姫を一人残すことになってしまい、それはそれで不安だ。

――やっぱり、あと三人は欲しいな……でももう助っ人のアテなんかないしなあ……。

メンバーを指折り数えながら胸の奥で独りこちたハルユキは、ふと数十分前の大冒険を思い出し、ぐっと右手を握った。

——いや、一人はもしかしたらなんとかなる……かもしれないけど向こうの連絡待ちだからなあ……仲間になってくれればめちやくちや心強いんだけどなあ……。

「——ユキ君。ハルユキ君」

名前を呼ばれていることに気付き、慌てて顔を上げる。

「あ、は、はい！ クッキーのお代わりですか!？」

「……私はそこまで食いしんばキャラじゃないつもりだが……」

苦笑した黒雪姫は、腰を浮かせたハルユキを手振りで制すると、軽く首を傾げた。

「そういうええキミ、さっき、フーコが来ていたと言ってたか？ 彼女はどの用だったんだ？」

「あ………そうでした、その件で先輩にお話が……」

とそこまで言いかけて、視線を右に振る。

マカミアチョコクッキーを齧っているニコと、コナツレモンクッキーを齧っているパドさんが眼を合わせてくるので、思わずさもない表情になりつつ考える。

「グラファイト・エッジから伝えられた情報を、二人にも話していいものだろうか。」

「いや、問題ないよな。だってこれからは同じレギオンの仲間になるわけだし……」  
四神セイリウと戦ったこともあるし……。

「何へんな顔してんだよ、あたしの食べかけが欲しいのか？」

「ち、ちち違ふよ!」

ニコの言葉を急いで否定し、ハルユキはごほん咳払いしてから切り出した。

「あの、実は……今日、ちよつと帝城に行つてきまして……」

途端……。

「な……なんだとお!?」と黒雪姫が叫び、

「て………ていじょお!?」とニコが怒鳴り、

「OMG」とパドさんが呟いた。

脳内メモリーに保存した《加速世界の秘密》をハルユキが余さず語り終えた時、時刻は午後六時四十分になっていた。

南の空はすみれ色に染まり、沈む寸前の夕陽が室内に強いコントラストを作り出している。フローリングに反射した西日が黒雪姫たちの瞳に吸い込まれ、宝石のような煌めきを放つ。

さらさらしたその輝きは、あるいは彼女たちの内面から発せられているのかもしれない。ハルユキが口を閉じても三人は長いこと沈黙を続けたが、頭の中ではそれぞれの思考を猛烈な勢いで巡らせていることが感じられる。

オートに設定してある天井のビルトイン型エアコンが動き出し、かすかな作動音を響かせたタイミングで、黒雪姫がびくりと体を震わせた。伏せていた視線を上げ、ハルユキを正面から見る。唇が二度、三度と小さく動き、ようやくかすかな声を響かせる。

「ザ・フラクチュエーティング・ライト……」  
 ゆっくりと息を吐き出し、やや音量を上げて――。

「まず言っておくが、ハルユキ君」

「は、ハイ」

思わずかしこまるハルユキに向けて、黒雪姫はふわりと頭を下げ、言った。

「――ありがたい。私のために、大変な冒険をしてくれたのだな……。――しかし、次は事前  
 にひとこと言っておくように。キミがこの手の無茶をするのはもう何度目だ？」

心の籠もった謝辞とお小言に、ハルユキは無言でこくこくと頷く。

それを見て黒雪姫はふっと口許を緩はせたが、すぐに表情を改め、真剣な声を響かせた。

「最後の神話、『揺光』。それに到達することがブレイン・パーストの最終目的であり、我々パ  
 ーストリンカーの存在理由……グラファイト・エッジはそう言ったのだな」

「はい。間違いない」

「そうか……。つまり、かつてのネガ・ネビュラスを崩壊させた帝城攻略作戦……その目指す  
 ところは間違っていないかった……ということか……」

ソファに背中を預け、黒雪姫は細めた瞳でガラス窓越しの夕空を仰ぎ見る。

再び黙り込んだ黒雪姫に代わって、パドさんが口を開いた。

「製作者が……二人」

短いひと言に、ニコが唸り声で付け足す。

「むうー……帝城を作ったヤツと、それ以外の全要素をデザインしたヤツは別人で……。だから  
 あの城は、あたしたちをことごとく拒絶するつづき……」

「うん……。でも、帝城を作った製作者Aは製作者Bに倒された……。ってグラフさんは言っ  
 たから、いまのブレイン・パーストの製作者は、事実上Bひとりだけ、ってことだと思っ  
 てる……」

ハルユキが答えると、ニコは眉間の谷間をいっそう深くする。

「その『倒された』ってのも曖昧な言い方だよなあ。大昔の戦争ってのは、仮想世界で起きた  
 んだろ？ っていうことは、Aは単にHPがなくなっただけでログアウトしただけなのか……ブレイン・  
 パーストみた記憶までなくしたのか、それとも現実世界で、本当に死んだのか？」

ニコの疑問はもつともだが、しかしハルユキは首を捻るしかない。

「あー……。いや、そこまでは聞かなかったなあ……」

「だいたい、仮想世界の戦争ってなんなんだよ。そこで奪い合った『ビーイング』ってのは、  
 具体的にはどんなモンなんだ？」

「あー……。ごめん、それもよく……」

「ぬわー、モヤモヤするなあ！」

いつのまにかソックスを脱いだ細い両脚をバタバタさせ、ニコは叫んだ。



「おいハルユキ、ますますそのグラフィイト・エッジつてのをここに呼べよ！」

「む、ムリだよ！ 連絡先知らないし……」

「は？ そいつ元ネガビュの《四元素》なんだろ？ それなのにメアドの交換もしてねーのか？」

「あ、いや、僕のは教えたんだよ……でも向こうのは教えてくれなくて……」

「むによあああ！ そんなんじや、あたしの新レギオンじややってけねーぞ！」

いっそう激しくジタバタするニコの結わえ髪を、黙考していた黒雪姫がくいつと引つ張る。

「おい、《あたしの新レギオン》というの聞き捨てならんぞ」

「いまはどうでもいいだろ！ 聞き流せそんくらい！」

と喚いたものの、どうにかクールダウンに成功したらしいニコは、ふうつと息を吐くと頭の後ろで両手を組んで仰向けになった。

「ん、んん………なんか、答えを十聞いたら疑問が百増えた、みてーな感じだな……。つつか……そもそもグラフィイト・エッジつてヤツは、なんでそんなこと知ってるんだ？」

その疑問に答える言葉も、ハルユキは持っていない。ニコの隣の黒雪姫に視線を向けると、グラフィイトの弟子である彼女は苦笑を浮かべる。

「済まんが、私もヤツについて知っていることは少ない。リアルで会ったこともないしな。確かなのは、オリジネーターであることくらいだ……」

「オリジネーター……」

鸚鵡返しに呟きながら、ハルユキは考える。

《最初の百人》とも呼ばれる、親のいないパーストリンカーたち。それがオリジネーターだ。

二〇三九年に製作者から直接ブレイン・バースト・プログラムを受け取り、加速世界の原型を作った。

「……つつか……ことは、オリジネーターはみんな、グラフィイト・エッジと同じことを知ってたわけか……？」

ふんぞり返ったままニコが言うと、黒雪姫は軽くかぶりを振る。

「いや、そういうわけでもないだろうな。百人ものパーストリンカーに伝えられた情報なら、もっと広まっていしかるべきだ。何せ、初期の加速世界には、コピー・インストールの人数制限はなかったんだから……」

《子》を作れば、当然ゲームのクリア条件についても話しただろうしな。じゃあ、やつぱりグラフィイトには何か秘密があるわけか……」

「あー、その件だが、ニコ」

黒雪姫がごほんとかげいする。

「私が言うのもなんだが、グラフィイトに関してあれこれと思ひ悩むのはアタマと時間の無駄だぞ。あいつは現れたい場所にししか現れないし、話したいことしか話さないし、戦いたい相手とししか

戦わない。恐らく、グラフが今回の情報を伝える相手としてハルユキ君を選んだのは、ネガ・ネビュラスで最も素直な聞き手だから……だろうな」

「す、素直な聞き手……ってどういう意味です？」

「褒められたのかな？　と思ひながらハルユキが訊ねると、黒雪姫はさらっと答えた。

「素直に感心するだけであれこれうるさく訊き返さない、という意味だ」

……褒められてないよな？　とがつくりする暇もなく、黒雪姫の言葉は続く。

「奴は、ハルユキ君の口から私に、『ザ・フラクチュエーティング・ライト』こそがブレイン・パーストのクリアフラグであること」だけが伝わるよう意図したのだろう。つまりグラフは、私が闇雲にレベル10を求めることを止めさせようとしているのかもしれん……」

「……………!!!」

ハルユキは、思わず息を呑む。

レベル10。それは黒雪姫がパーストリンカーとしての命を懸けて追い求める最終目標だ。

ハルユキにブレイン・パーストを与えてくれた翌日に、高円寺の喫茶店で彼女が口にした言葉はいまでもありありと憶えている。

——友情より、名譽より、遅かに優先されるからだ……レベル10になることが。私はそのためにだけに生きているとすら言っていたい。

——私は知りたい。どうしても知りたいのだ。もつと……もつと先があるんじゃないのか

……………？　この……人間という般の外側に、もつと……。

「……………先輩」

掠れた声で、ハルユキは恐る恐る剣の主に問いかけた。

「もし……グラフさんの言うとおり、レベル10がただの通過点で……ブレイン・パーストの最終目標は帝城の『ザ・フラクチュエーティング・ライト』なんだとしたら、先輩は、レベル10を目指すのを止めるんですか……？」

自分がどちらの答えを望んでいるのか、ハルユキにもよく解らなかつた。

レベル10を目指す道は、血塗られた覇道だ。同じレベル9をあと四人も全損させねばならず、その過程で逆に全損させられることだって有り得る。黒雪姫がたくさんの怒りと恨みを買うことを思うと胸が苦しくなるし、もちろん返り討ちに遭ってしまうことなど想像もしたくない。

だが、危険だから、必要ないからという合理的な判断で、これまで必死に目指していたものを投げ捨てる黒雪姫も見たくない気がするのだ。狂おしいほどの熱情を宿した刃で、あらゆる障害を斬り倒して突き進む……そんな姿にハルユキはどうしようもなく惹かれたのだし、他のレギオンメンバーたちも同じなのではないか。

相反する感情を抱きながら、胸の前で両手を握り締めるハルユキに向かって――。

黒雪姫は、一度瞬きしてから、あっさりと答えた。

「まさか。ブレイン・パーストの生まれた理由が何であれ、私はレベル9で立ち止まる気などさらさらないよ」

「そ……そう、ですか」

はっとしていいのか悪いのか、と悩むハルユキに、黒雪姫はにやりと不敵な笑みを浮かべてみせる。

「レベル9になった時のシステム・メッセージは、製作者からの挑戦状だ。……それは確かに、ブレイン・パーストが作られた理由に興味はあるし、ザ・フラクチュエーティング・ライトの正体を知りたいとも思うし、単純にこのゲームをクリアしたいという欲求もある。だが、それ以上に、私は製作者に会って直接訊きたい……いや問い詰めたいたのだ。ブレイン・パーストとは何なのか……何を考えて、こんなものを作ったのか……」

そう言いながら、持ち上げた右手の五指を閉じたり開いたりする黒雪姫を見て――。

不意にニコが、くくつと笑い声を漏らした。

「黒雪、要はアレだろ？ お前は、製作者と戦いたいんだろ？」

すると、黒雪姫は虚を衝かれたような顔をしてから、同じように短く笑った。

「ああ……そうかもな。パーストリンカーになってから味わってきたあれやこれやを、製作者にまとめて叩き返せたら、さぞかしすつとするだろうな」

「そんなときや、あたしも混ぜろよ。お前が切り刻んだあとに消し炭にしてやっから」

二人の王は、無邪気な表情で剣呑な会話を交わすと、朗らかな大声で笑い合った。バドさんも珍しく口許を緩めるのでつられて笑ってしまったが、同時に冷や汗をかかずにもいられないハルユキだった。

その後は、四人連れ立って地上階のショッピングモールで買い物し、一緒に夕食を作った。ニコと黒雪姫が、色が赤&黒だからという理由で決定した《黒ごまたぶりの冷やし担々麺》という献立は、この顔ぶれには少々チャレンジングなのでは思ったが、バドさんが予想外のシェフっぷりを発揮してくれて、参考にしたレシピサイトの写真をじっくりに仕上がった。

食卓での主たる話題は八月の下旬に予定されている山形旅行のことで、テーブルいっぱいにホロウインドウを広げて「ここに行こう」「あれが見たい」と賑やかにお喋りするのとはとても楽しく、黒ごま冷やし担々麺もびつくりするほど美味しく、時間はあっという間に過ぎ去ってしまった。

バイクで帰るニコとバドさん、タクシーで帰る黒雪姫を環七の歩道で見送ったハルユキは、誰もいない自宅にすぐに戻る気にならず、自販機で飲み物を買ったショッピングモール一階のガレリアに設置されたベンチに腰を下ろした。

夜八時を回り、色とりどりの紙袋を提げた買い物客と、帰宅してきたマンションの住民が、広いガレリアを左右に行き交っている。

ぼんやりとその光景を眺めているうちに、グラフィット・エッジの声が耳の奥に遠く響く。ザ・フラクチュエーティング・ライトが解放されたらどうなるのか、というハルユキの問いに対する答え。

——「ただけ言えるとなれば……世界が変わるような何かが起きるんだと思う。」

現実世界が変わる、とはどういう意味なのだろうか。

ブレイン・バースト・プログラム自体がそうであるように、二〇四七年現在の水準を超えるようなテクノロジーが公開される？ それとも、BBと密接な繋がりのあるソーシャルカメラ・ネットワークに何かが起きる……？

ベンチに座ったまま首を仰け反らせ、ハルユキはほぼ真上の屋根に設置されている黒い球体を見上げた。シエルの内部で赤いインジケータをゆつくりと明滅させるソーシャルカメラは、まるで大型エネミーの眼球のようだ。

考えてみれば、この国の最重要セキュリティ・インフラであるソーシャルカメラ・ネットワーク、なぜブレイン・バーストは易々とハッキングできるのか。そこはグラフィット・エッジも説明しなかった。グラフからの情報は、レギオン合併の案件と一緒に黒雪姫がテキストに起こしてレギオンメンバーに配布してくれるそうなので、タクムならそこから色々と気付くこともあるだろう。むしろ、グラフの話を聞いたのがタクムだったら、「素直に感心するだけ」ではなかったに違いない……。

などと考えながら、尚も黒いカメラを眺め続けていると――。

「……何してるんだいハル、こんなところで」

という声が視界の外から聞こえて、ハルユキはさっと顔の向きを戻した。

ベンチの前に立っていたのは、肩に竹刀ケースを引っ付けた制服姿の幼馴染——当の篠拓武だった。

「あ、タク、おかえり」

慌てて立とうとしたが、タクムは片手でハルユキを制し、右隣に腰を下ろす。竹刀ケースを肩から外し、ふうつとひと息。

「うん、ただいま。——あ、今日の練習はハードだったなあ……もうここから立ちたくないよ……」

「はは、お前がエネルギー切れなんてよっぽど激しかったんだ。あ、これ、やるよ」

買ったまま栓を開けていなかったルイボス茶のボトルを渡すと、タクムはよほど喉が渴いていたのか、素直に「ありがとう」と受け取ってキャップを捻り、ごくごく勢いよく半分ほど飲み干した。

「はあ——、生き返った……。悪いね、貰っちゃって」

「NP。……都大会、勝てそうか？」

「はは、それはやってみないとね。まあ、出るからには個人戦も団体戦も優勝……まではでき

「え、前日なんだっけ？」

「そうだよ！ 領土戦が明後日の二十日、都大会は二十一日。だから、領土戦で白のレギオンに勝てば、都大会でも優勝できるって自分に言い聞かせてるんだ」

「そっか……うん、そうだな。剣道の都大会だってユルクはないだろうけど、オシラトリ以上に怖い学校がいるとは思えないよな……」

「そうそう。このあいだの緑の王もだけど、加速世界で本物のハイランカーと戦ったあとは、剣道の試合で不思議に落ち着けるんだ。だから、領土戦でオシラトリの猛者が出てくるのは、怖いけど少し楽しみでもあるんだよ」

眼鏡のブリッジを押し上げながら言うタクムの整った横顔を、ハルユキは感心しながら見やつた。

「なるほどなあ……よし、オレも、現実世界で緊張しそうな時は王とか超級エネミーと戦った時のこと思い出してみよ……」

「たとえばどんな時？」

タクムに訊かれ、えーとと考える。

テストの直前は手に汗をかくほど緊張するが、いざ始まれば必死にならざるを得ないので、緊張していることさえ忘れてしまう。教室でタクム、チユリ以外の生徒と話す時の緊張感も、二年生の一学期が終わりつつある今日この頃はかなり軽減されてきている気がする。

なくとも全国大会の出場権は狙いたいし、それに……」

そこで言葉を切り、ペットボトルを両手で握る。

「それに？」

「ああ、いや……言葉にするとうちよつと照れくさいけど、能美の目の前で、一試合でも多く《加速》に頼らずに勝たなきゃなって」

「………そっか………」

ハルユキは口許を綻ばせ、頷いた。

《略奪者》ダスク・テイカーこと能美征二は、三ヶ月前にハルユキ、タクムとの対決でポイントを全損し、ブレイン・パースト・プログラムとそれによつて失った。

普通の中学一年生に戻った彼は、一年上のタクムを先輩と慕いつつ、剣道部で頑張っているのだという。いまの能美は《加速》のことなど知らないのだから、タクムの頑張りとは一方通行なのかもしれない。けれど、きつと、伝わるものは確かにあるはずだ。

「……あいつのためにも、土曜日の領土戦は絶対に勝って、加速研究会をぶっ潰さないと……」

ハルユキが呟くと、タクムも深々と頷いた。

「ああ、そうだね。ぼくはむしろ、都大会よりも前日のそっちのほうにプレッシャーを感じてるよ」

数時間前、自宅でニコと黒雪姫が居合わせた時は大いに緊張させられたが、これをタクムに言ったらどんな反応が返ってくるか解らないので黙っておく。考えてみれば、飼育委員会所属のハルユキが現実世界でスポーツの試合に出る場面などあるはずもないので、あとはもう大勢の前で何かを話す時くらいしか――。

とそこまで考えた時、タクムに話しておかねばならない重要案件を思い出したハルユキは、「あつ」と小さく声を上げてしまった。

「ど、どうしたの、ハル」

きょんとするタクムの顔を見て、しばし頭をぼりぼり掻いてから、口を開く。

「えつと……いまの話とは関係ない、いやちよつとは関係あるかもだけど……タク、あのさ、オレ……出てみようと思っただ」

目的語を省いたハルユキの言葉で、タクムはさすがの幼馴染力でも正確に理解しようだった。一瞬両眼を見開いてからにこりと微笑み、力強く頷く。

「そうか。じゃあ、明日さつそく生沢さんに話さないとな」

「あ、ああ。オレが……だよな？」

「もちろん。よろしく、ハル」

笑みを保ったまま、ハルユキの右肩をぼんと叩く。

タクムとハルユキが、二年C組のクラス委員長である生沢真優に、次期生徒会役員選挙への

出馬を打診されたのは十日前のことだ。正式な返事を長いこと保留してしまっただが、ハルユキにとってはこれまでの人生で二番目に重大な選択であり――一番はもちろん、黒雪姫から転送されたBBプログラムのインストールを受け入れた時だ――決心をつけるのに、それくらいの時間はどうしても必要だった。

しかし、いったん生沢真優にイエスと返事をしたならば、もう撤回は許されない。現副会長である黒雪姫に憧れていて、彼女のように生きたいから――という立候補の動機を打ち明けた生沢のために、ハルユキは九月の選挙まで全力を尽くさねばならないのだ。

「……オレも、頑張るよ」

少々頼りない声ではあったがそう宣言すると、タクムはハルユキの右肩に乗せた手にぐっと力を込め、深々と頷いた。

「ああ、頑張ろう、ハル。土曜の領土戦も……二学期の生徒会選挙も」

「あと、お前は都大会と全国大会もな！」

ハルユキが付け加えると、タクムは「もちろん」と笑顔で答えた。

エレベーターホールでタクムと別れ、自宅に戻ったハルユキは、一時間かけて宿題を終えるとシャワーだけで入浴を済ませ、ベッドに入った。

とても長い一日だった。帝城で十時間以上も過ごしたのだから体感時間が長いのは当然だが、

それ以上に頭に入力された情報量が過大で、まだ処理が終わっていない感じがする。暗い部屋で天井を見上げてみると、『ザ・フラクチュエーティング・ライト』やら『レギオン合併』、『生徒会選挙』といった単語が視界の隅をぐるぐる回っているような気がする。

——このまま寝たら、変な夢を見そうだな……。

と思いつながらも、やがて疲労が臉を押し下げ、ハルユキはニューロリンカーを外すのも忘れて眠りに落ちた。

そして予想通り、変な夢を見た。

満天の星空。

不可視の平面に立つハルユキの頭上で、無数の光点が球状銀河のような集団を作り、美しく煌めいている。星々は静止しているわけではなく、ランダムに動いては他の星に衝突し、その星がまた動いて別の星にぶつかるというどこか生命的な活動を繰り返している。

この光景には見覚えがあった。

「……メイン・ビジュアライザー……？」

小声で呟く。答える者はいないが、ハルユキは確信する。

あれは確か、六月十九日——ちょうど一ヶ月前のことだ。新宿エリアでPK集団（スーパードヴァ・レムナント）に襲撃されたタクムは、マゼンタ・シザーから譲渡されたISSキット

の力で敵を殲滅したものの、闇の力に囚われてしまった。その日の夜、ハルユキは、タクム、チユリと直結したまま眠り、タクムに引き込まれる形でこの空間を訪れたのだ。

ここは、加速世界の全てを演算するブレイン・パースト中央サーバー、別名メイン・ビジュアライザーの中だ。ハイエスト・レベルが《加速世界の全景を見通せる場所》だとすれば、この空間は《加速世界の本質を覗き見れる場所》とでも呼ぶべきか。

しかし、ISSキットを装備しているわけでもないのに、なぜ再び睡眠中にここへ迷い込んでしまったのだろうか。それともこれは——

「……本物の、夢なのか……？」

呟きながら自分の体を見下ろし、腕に透き通るシルバー・クロウのアバターを両手でべたべた触ったりしていると——。

「夢ではありません」

という声が後ろから聞こえ、ハルユキはしゅばつと振り向いた。

「——もつとも、私はお前たちが思考回路を休眠させている時に見る《夢》とやらが具体的にどんなものなのか、よく知りませんが。そうだ、いまここで見せてみなさい、しもべ」

などと居丈高な口調で理不尽な要求をする人物は、一人しか存在しない。

「め……めめメタトロン!?」

ハルユキが声を裏返させた理由は、大天使の名を冠する神獣級エネミーがそこにいたから

だけではなかった。

目の前で淡く光るのは、いつもの小さな立体アイコンではなく、純白の翼を持ち長いドレスをまとった、神々しいまでに美しい女性の姿だったのだ。

「そ、その姿は……メタトロン、傷が治ったの!? もう大丈夫なんだね!?」

無我夢中で両手を伸ばし、華奢な肩を包み込む。シルバー・クロウの手もメタトロンの体も半ば透き通っているが、それでも仄かな温度を感じて、ハルユキは感動のあまり思い切り抱き締めようとして――

したのだが、瞬時に眼を閉じたままのメタトロンが素早く右手を持ち上げ、ハルユキの顔の真ん中を指先でズビンと突いた。

「な、何のまねですかしもべー! しもべがそんな不埒な行いをしていると思っっているのですかしもべー!」

「ひえっ……ごめんなさい……嬉しくて、つい……」

「それに、我が本体の修復はまだ終わっていません! この空間は恐らくハイエスト・レベルの異なる相……かつてお前と訪れた相が《データの位置》を表示しているとすれば、こちらは《データの動き》を表している。ゆえに、この姿で描写されているのでしょうか」

ハルユキの抱擁は拒んだものの、体を遠ざけようとはせず、大天使は振動する銀河を見上げた。つられて上を向きながら、ハルユキは再び問いかけた。

「まだ力を取り戻してないなら……きみは、どうやって僕をこの空間に呼んだの?」

「お前たち小戦士に倣って言えば、《修行の成果》です」

「し、修行……!? なんの、修行……?」

啞然とするハルユキの視線の先で、メタトロンはほんの少しだけ臉を闇くと、こぼんと咳払いをした。

「私は、お前との間に設定されているリンクを、より確かなものにするべく長い時間をかけて強化してきました。その結果、全ての条件が整えば、このように私のほうから呼び出すことができるようになった……というわけです」

「へ、へええ……」

「まあ、まだまだ強化の途上ではありますが」

「へ、へええ……」

素直に感心してから、なめつと仰け反る。

「あ、あの、それ、リンクの強化が終わったらどうなるんでは……」

恐る恐る訊ねると、大天使はハルユキの目の前でふふんと自慢そうに笑った。

「私の最終的な目標は、お前の暮らすロウエスト・レベルを訪れることです」

「は、はいいいいい!?」

いつそう上体を反らせるハルユキの両肩を、今度はメタトロンががっしと掴む。



「なんですかその反応は？ もっと喜んでいいですよ、しもべ？」

「い、いや、その……め、メタトロンが僕の家に来てくれたら嬉しいな、とつても」

と言いながら、母親と出くわした時のことを想像してぶるぶると身震いする。メタトロンは

「それが可能となるまでにはまだまだリンクを強化しなければなりません。楽しみに待ってい

なさい、シルバー・クロウ」

「……………うん。楽しみだよ、本当に……………」

素直な気持ちでそう答えると、ハルユキはメタトロンから体を離し、再び情報の銀河を見上げた。

ハルユキがその場に座ると、大天使も隣に腰を下ろす。

二人は、しばし無言で揺れ動く星々を見詰め続けた。どれほど時間が経ったのか解らなくなってきた頃、ハルユキはふとメタトロンに訊ねた。

「……メタトロン。きみは……グラフィット・エッジが帝城で言っていたことを、どう思ってるの……………」

答えが返ってくるまでには、珍しく五秒はともかかった。

「……私を帝城に導いてくれたことには深く感謝しています。しかし、あの空間で入力された情報は余りに断片的すぎて、まだ結論を導き出せていないのです。いや……導くために必要な

データがまだ不足している、と言うべきか……………」

「不足……………」うん、それは、僕も解るよ。なんだか、グラフィさんは、肝心なことを教えてくれなかったような気がするし。でも……………」なら、どうしてメタトロンはグラフィさんに直接あれこれ質問しなかったの？」

「ふむ……………」

今度もまた少し時間を置いてから、大天使は囁くような声で答えた。

「……認めましょう。私は、あの小戦士を警戒したのです」

「け、警戒……………」

「害意や悪意を感じたわけではない……私を城から引き摺りだした《敵》とは違う。ですが、何かが……あの者に含まれる何かが、私を警戒させた。名乗るだけでも、わずかながら覚悟が必要でしたよ。……有り得ないことですが、あの者は……ことによると、四聖たる私よりも……………」

そこでメタトロンの声は徐々に小さくなり、途切れた。

隣に視線を向けると、大天使はこちらを見るな、というように右手でハルユキの頭を撫み、ぐいっと下に押しやった。必然、メタトロンの膝に頭が乗っかってしまうが、なぜかいつもの「無礼者！」は降ってこないで、そのまま体を預ける。

デュエルアバターのヘルメット越しにも、柔らかく、温かな感覚が伝わってきて、ハルユキ

は強い眠気を覚えた。もつと色々話したいことがあるのに……と思いつつも、瞼が耐えきれないほど重くなる。

「……いつか、私とお前はもういちど帝城を訪れ、あの者とも再会するでしょう。その時こそ、あらゆる謎が解き明かされ、私たちは自らの存在する意味を知る……」

メタトロンの言葉は、まるで子守歌のように優しく響いた。

「……いまは眠りなさい、シルバー・クロウ。来るべき戦いのために……」

星々が奏でるかすかな鈴の音を聞きながら、ハルユキはメタトロンの膝の上で、深い眠りに吸い込まれていった。

## 7

この上なくイレギュラーな場所ではイレギュラーな寝かたをしてしまったせいか、アラームに起こされてもしばらくは頭がぼんやりしていた。

意識がゆっくりと覚醒するにつれ、星空の下でメタロンと交わした不思議な会話が断片的に思い出され、ベッドに横たわったまま左右を見回す。朝の光が差し込む自室には大天使の姿はなく、残念なようなほっとするような気分を味わいながら起き上がる。

洗面所で顔を洗い、眠気の残滓を大あくびで追い出しながらリビングの扉を開けたハルユキは、そこに思わぬ先客を見つけて眼を丸くした。

いや、客ではない。それどころか、この住戸の所有者であり世帯主だ。

ダイニングテーブルで朝刊をさつさとフリックしている女性の名は有田沙耶——ハルユキの母親である。

「お……おはよう、母さん」

ハルユキが挨拶すると、ブラウス姿の沙耶はちらりと振り向き、

「おはよう」

と短く応じるとまた新聞に戻った。少々疲れた様子からして、出勤前ではなく帰宅してきた

ところなのだろう。

外資系の投資銀行で働く沙耶は、アメリカの金融市場とかかわりの深い部署に在籍していて、向こうの市場が開いている日本時間の深夜十一時頃から早朝まで会社に残ることが多いらしい。その必要がない日も、仕事上の付き合いがプライベートかは不明だがしばしば呑んでくるので、日付が変わる前に帰宅することはほばないと言っている。

それにしてもこれほど遅くなるのは珍しい。キッチンに向かいながら、ハルユキは何気なく母親に声をかけた。

「毎日、遅くまでお疲れ様」

すると沙耶は再び手を止め、まじまじと視線を向けてくる。

「ど………どうかした？」

「いいえ………何でも、それより、これ、あんたが作ったの？」

そう訊かれ、沙耶が右手にスプーンを持っていることに気付く。前に置かれた白いボウルの中身は、ハルユキが冷蔵庫に入れておいた、冷やし担々麺のスープの残りらしい。

「あ………うん。昨夜、友達と……。あの、それ付け汁だから、食べるなら麺を……」

「これだけでいいわ、具はたくさんだし。友達って、タクムくんとチユリちゃん？」

「ううん、学校の先輩と……」

ニコとバドさんをどう表現していいか一瞬迷ってから、

「練馬に住んでる友達」

と答え、沙耶は再び少し驚いたような顔をした。

「ふうん……。——あんたに、こんな料理上手な友達が、チユリちゃん以外にいたなんてね。

男の子？ 女の子？」

「ういっ………えーと、その………ご想像にお任せします……」

もともと答え、キッチンに退避する。食パンをトースターにセットし、カップヨーグルトと半分に切ったグレープフルーツを持って母親の前に座る。

幸い先ほどの質問を蒸し返すことなく、沙耶は新聞を読みながらスプーンを動かした。向かい側でヨーグルトを食べながら、母さんの顔を明るいとこでちゃんと見るの久しぶりだな、とハルユキは考えた。

少し色を入れたショートボブの髪も、シャープめなアイメイクも昔から変わらない。しかし表情は以前に比べて険しさが減っているような気もする。それは朝の光のせいか——あるいはハルユキ自身の感覚の変化か。

ふと、もう少し話をしたいと思ったものの、さしたる話題があるわけでもない。迷っているうちに、沙耶の前の黒ごま担々スープはどんどん減っていく。

残りひと匙ふんとなったところで、ハルユキはようやく口を開いた。

「あの、母さん……」

「なに？」

新聞のホロウインドウから眼を離さずに、沙耶がすかさず問い返してくる。大きく息を吸い、昨日固めたばかりの決心を言葉にする。

「……僕、二学期の生徒会役員選挙に誘われて……立候補してみようと思うんだ」

「ふうん……」

いちどは生返事をした沙耶だったが、少ししてぱっと顔を上げた。

「え？ 生徒会選挙？」

「う、うん」

「誘われたって……ああ、梅郷中はチームで出馬するんだっけ。リーダーは誰なの？」

「生沢さんっていう、C組の委員長。メンバーは僕とタクと、あと一人はまだ知らない」

「へえ……」

と軽く首を傾げる沙耶の表情からは、ハルユキの出馬宣言をどう思っているのかは読み取れない。もういちど深呼吸してから、考えていたことを口にする。

「それで……母さんも学生の頃、生徒会役員してたんだよね？ 時間があるときでいいから、演説のコツとか教えてもらえないかと思って……」

すると、沙耶は珍しくフツツと声を出して笑った。

「そんなの、昔すぎて忘れちゃったわよ。なんでも言いたいことを言えばいいのよ、中学校の



立候補演説なんて」

「その、言いたいことが見つからなくてさ……」

「じゃあ、あんたは何のために役員になるの？」

不意に真顔になった母親にそう問われ、思わず眼を伏せる。

生沢真優に誘われたから。

学内ネットの管理者権限が欲しいから。

黒雪姫に認めて貰いたいから。

どれも嘘ではないが、根源的な決心の理由ではないという気がする。自分の心の奥底を探り、浮かんできた言葉を口にする。

「僕は、ただ……何かをしたいと思っただんだ。いままでの自分にできなかった、何かを……」

すると、沙耶は再び淡い笑みを浮かべた。ポウルに残っていた担々スープを残らずすくうと口運び、グラスの水を飲み干してから言う。

「じゃあ、それを伝えればいいわ。演説でいちばん大事なものは、聞いている人の心にどれだけ届くかよ。ご大層なマニフェストをたたき並べても、聞き手の耳を滑っていくだけだわ」

「どれだけ……届くか……」

ハルユキが呟いていると、沙耶は新聞を消し、ポウルとグラスを持って立ち上がった。

「演説の草稿ができたから見せてみなさい。私は寝るわ。スーブ、ごちそうさま」

「あ……お休みなさい」

食器を片付けた沙耶は、素早く仮想デスクトップを操り、ハルユキのアカウントに昼食代の五百円を振り込むとリビングから出ていった。

七月十九日金曜日は、梅雨前線が戻ってきたかのような曇り空だった。

天気予報のウイジェットは午後から降水確率四十パーセントという表示だったが、昼休みの時点ではまだ降っていないかったので、ハルユキはタクムと、そして委員長が生沢真優を誘って第二校舎の屋上へと向かった。

途中、学食でおのおのにおにぎりやサンドイッチを買い込んだが、食べ始める前にまずは真優にべこりと頭を下げる。

「生沢さん、返事、遅くなってごめん」

「ううん、いいよ、大事なことだもん。それで……？」

そう言いながら首を傾げる真優の前で、タクムと一瞬アイコンタクトしてから、ハルユキは言った。

「生沢さんと一緒に、選挙に出てみるよ」

役に立てるか解らないけど……と続けようとしたのだが、その前に真優が大声で叫んだ。

「ほんと!? わあ、ありがと!! 頑張ろうね!!」

につこりと横面の笑みを浮かべてから、慌てたように周囲を眺める。幸い、屋上に他の生徒の姿はない。

「……なるほど、学食じゃなくてここに連れてきたのは、情報ロウエイを防ぐためか」  
納得したように頷く真優に、タクムが愉快そうな笑い声を上げる。

「いやあ、そんなんじゃないで、ハルは単に恥ずかしかっただけだと思うよ」

「お、おい、それだけじゃないぞ。選挙の戦術とか相談するなら、周りに人がいないほうがいいと思って……」

「気が早いなあ。まあ、とりあえずご飯にしようよ」

タクムに促され、ハルユキと真優は屋上のフェンスを背にして、高さ四十センチほどのバラベツに腰掛けた。

明太子のおにぎりを一口かじり、玄米茶で飲み下してから、ハルユキは隣我真優に訊ねた。

「そういえば、生沢さん、チームの四人目は誰にするの？」

「実は、まだ決めかねてるのよね……」

トマトとチーズのサンドイッチを口に運びながら、真優が肩をすくめる。

「アテがないわけじゃないんだけど、なんて言うかな……有田くんや篠くんみたいに、尖ったところがある人がいいなって」

その言葉に、思わず真優の向こうのタクムと顔を見合わせてしまう。

タクムもアウトローっぽさとは無縁なキャラクターだが、ハルユキほど外面的にも内面的にも尖ったところのない生徒は梅郷中全体でもそうはいない。思わず自分の緩衝材たっぷりな体を見下ろしていると、真優が慌てたようにかぶりを振る。

「ううん、尖ったっていうのは危ない人って意味じゃないよ。他の人にはない部分をいっぱい持ってるって意味」

「……それも、タクはともかく、僕はぜんぜん思い当たらないけど……」

「そんなことないよ」

真優は真顔で言い切ると、いまにも降ってきそうな曇り空を見上げた。

「……ほんと、誰だって自分だけの何かを……人と違うところを持つてるんだと思う。でも、それを表に出すのは難しいよね。周りと違うとか、目立ちたがり屋だっと思われると色々嫌な目にも遭ったりするし……」

まるで、実際にそういう経験をしたことがあるかのような口調と表情だった。一瞬の驕りを即座に消した真優は、再びハルユキを見て続けた。

「でも、有田くんは、文化祭の展示を一人でアップグレードしたり、飼育委員に立候補したりして、自分の得意なこと、好きなことを隠そうとしないで頑張ってるでしょ？」

「いや……でも、どっちも得意ってほどじゃないし……むしろ、何かしなきゃいけないから、仕方なくやったぐらいの話だし……」

「大事なものは、実際にやったかどうかだよ。で、有田くんはちゃんとやる人だと思う。尖って  
るっていうのはそういう意味。英語で言うと、sharpじゃなくてprominentかな  
……」

「ぶ、プロミネント？」

習った覚えのない英単語にハルユキが首を傾げると、真優はメモアプリを立ち上げ、指先で  
さらさらと綴りを書く。

「これで、『顕著な』とか、『傑出した』とかって意味。名詞形はprominenceで、  
こっちは聞き覚えあるでしょ？」

「あ……太陽の……」

「うん。太陽の『紅炎』の他にも、『目立つこと』『卓越すること』って意味もあるんだよ」

「へええ……初めて知ったよ」

と答えつつも、服裏に浮かんだのはもちろんニコ率いる赤のレギオンの名前だった。

初代赤の王レッド・ライダーが、どんな意味を込めてレギオンに『プロミネンス』という名  
を与えたのかを知るすべはない。しかし、二代目であるニコが引き継ぎ、現在まで守ってきた  
プロミネンスは、明日ネガ・ネビュラスと合併し、一つの時代を終える。

ここで、偶然ではあるが生沢真優の口からプロミネンスという単語の意味を教えられたこ  
とは、何かの巡り合わせであるようにハルユキには感じられた。もういちどタクムに眼を向け、

軽く頷き合ってから、体ごと真優に向き直る。

「えと……僕はまだそこまで自分に自信は持てないけど、でも、生沢さんの期待に応えられる  
ように頑張るよ。誘ってくれて、ありがとう」

ハルユキがそう言うのと、真優は大きな眼を一度瞬かせてから、勢いよく頷いた。

「うん、頑張ろう、有田くん！」

「もちろん、ばくも全力を尽くすよ」

反対側のタクムがそう言い添えると、そちらに体を向けてもういちど叫ぶ。

「篠くんも、よろしくね！」

真優が両側に差し出した手を、ハルユキとタクムはしっかりと握った。

その後、食事をしながらの話合いで、四人目のメンバーは七月中にそれぞれが勧誘候補を  
出し合うということになった。ハルユキが二つ目の梅おかおにぎりを食べ終えると同時に、  
ぱつりと水滴が鼻の頭に触れた。

「あ、降ってきたね」

サンドイッチの包装を片付けていた真優が、額の上に手をかざしながら空を見上げる。

同様に空を仰いだハルユキは、灰色の雲の向こうでばんやりと光る太陽を眺めながら、  
ふと思いついて呟れた。

「そう言えば、生沢さん。立候補する四人一組って、確かチーム名みたいのをつけるんだよね？」



「あ、そうそう。使うのは選挙運動中だけだね。だいたいナントカ党とかナントカーズ、チーム・ナントカ的な名前が多いみたい。登録は二学期になってからだから、まだ何も考えてないんだけど……有田くん、アイデアあるの？」

「アイデアって言うか、いま思いついたんだけど……」

ベンチ代わりのパラベットから立ち上がりながら、ハルユキは言った。

「さっき生沢さんが教えてくれた、『プロミネント』にしたらどうかなって。チーム・プロミネント」

「チーム・プロミネント……」

続いて立った真優は、何度かその名前を口の中で転がしてから、にまっと笑った。

「やる気ある感じがしていいね！ 薫くんはどう？」

「ぼくもいいと思うよ」

タクムも、眼鏡のレンズを光らせてにやりと笑う。

ポニーテールをびよこんと揺らして大きく頷いた真優は、降り始めた雨を押し戻そうとするかのように右拳を高々と突き上げ、張りのある声で宣言した。

「よし！ たったいまから、チーム・プロミネント始動するよ！ みんな、頑張ろう！」

「おー！」

と、ハルユキとタクムも声を合わせた。

## 8

黒雪姫からの長文メールが全レギオンメンバー宛に届いたのは、一学期最後のホームルームが終わった直後だった。

先輩、授業中にこれ仕上げたのかな……とハルユキが戦慄せずにはいられないほど、それは詳細かつ読みやすいレポートだった。二部構成で、前半は赤のレギオンとの合併案について。後半は、帝城とブレイン・パーストの秘密について書かれている。

どちらもハルユキは既に知っている話だったが、それでも自分の席で夢中になって読んでみると、机の前に誰かが立った。見れば、すでに帰り支度を済ませた倉嶋千百合だ。

深々と上体を倒したチユリは、ハルユキの目の前でひそっと囁いた。

「ハル、先輩からのメール、もう読んだ？」

「いままさに読んでるんだけど……お前は？」

「前半だけ。それで、びっくりしちゃって……あつ、もしかしてあんた……」

「な、なんだよ？」

「オッタマゲッティンダ！ とか叫んで椅子から転がり落ちないとこを見ると、もう知ってたんでしょ、合併のこと」

「そ、それは、その……ていうか、部活いなくていいのか？」

「今日と明日は休みなの！ ほら、白状しない！」  
などとひそひそ声で言い合っていると、チュリの隣にタクムも姿を現す。こちらまさぐに驚いた様子だが、都大会を翌々日に控えた剣道部は当然今日も練習で、話している時間はないようだ。

「チーちゃん、ばくの代わりに、ハルからいろいろ聞き出しておいてよ」

早口にそう言うタクムに、チュリは任せるそばかりに親指を立てる。

「じゃ、またあとで連絡するから」

手を上げて小走りに去って行くタクムを見送ってから、ハルユキは再びチュリの顔を見た。

「さ、きりきり話してもらおうじゃないの」

「つつても、オレの知ってることはほとんど、先輩のメールに……」

「なら、ほとんど以外のことを教えない！」

幼馴染にびしっと命令されれば、ノーとは言えるはずもないハルユキだった。

チュリと一緒に昇降口から外に出ると、雨はいつの間にかやんでいた。

裏庭の飼育小屋まで移動したハルユキは、竹箒を二本用意すると、片方を差し出した。

「……なに？」

胡散臭そうな顔をするチュリに、にやりと笑いかける。

「あれこれ話す代わりに、掃除手伝って」

「……そりやまあ、いいけどさ」

二人で協力して小屋の周りの掃き掃除を終わらせたタイミングで、飼育委員会の仲間である井関玲那と、超委員長こと四壁宮諒が姿を現した。チュリに気付いた玲那が、「あれっ」と声を出す。

「えーと、倉嶋さんだったけ？ もしかして新入部員……じゃなくて新入委員？」

「いや、今日だけのヘルプ」

ハルユキがそう答えると、玲那は「なーんだ」と残念そうな表情になる。いっぽうチュリも申し訳なさそうに、

「ごめんね井関さん、部活が休みだから、こいつに手伝わされてんの」

などと謝るものだから、なにやら自分が悪いような気がしてきて、いいや僕のせいじゃないとぶるぶる首を振っている――。

「UIV 今日だけでも、チュリさんが来てくれて嬉しいのです！ ホウさんもとっても喜んでます！」

と誰かチャットアプリで発言した。三人揃って小屋の中を見ると、アフリカオオコノハズクの本音がわさわさと翼を動かして歓迎の意を示している――気がする。

176

「あはは、ありがと、ホウ。——で、次は何をすればいいの？」

とチユリに問われ、ハルユキは少し考えてから、しかつめらしい顔を作つて言った。

「そのへんの地面を掘って、ホウが食べるミミズを集めてくれたまえ」

「みっ……みみみみみすう!! や、やだよあたし触れないもんそんなの!!」

じりじりと後退るチユリの足許を、ハルユキはおもむろに指さす

あつ  
ほら  
そこ  
に  
四

「キイヤ——ッ!!!」

さすかの脚力を發揮して飛び上がつたチユリは、地面に何もい<sup>ひ</sup>ないことを確認すると、顔を真つ赤にして突進してきてハルユキの左頬をむぎ<sup>ひた</sup>りと引つ張つた。

「こんのおつ！ このほつぺたをちぎってホウのご飯にするッ!!」

ひ、ひたたた!! ほめんほめん、ゆるひて!!

その様子を啞然と眺めていた玲那と諷が、同時にぶつと噴き出し、ホウも「ポッポウ！」と大きな声で鳴いた。

小屋の掃除とオウの餌やりが終わり——餌はもちろんミズでもハルユキの頬肉でもなく、謡が用意したマウス肉だった——玲那が手を振りながら去っていくと、三人はひとまず小屋の近くのベンチに並んで腰掛けた。

まず謡か、可愛らしい膝小僧の上で両手の指を閃かせる。

【U】お二人は、サツちゃんからのメールはもう読みましたか？

「うん、だいたいね。てゆーか、ういちゃん、聞いてよ！　なんかハルのやつ、前から合併のこと知ってたっぽいんだよ！」

【U I V　ほんとですか、有田さん？】

左側に並んで座るチユリと謡から同時にじとーとした視線を向けられ、ハルユキは慌ててぶんぶんかぶりを振る。

「い、いや、前から知ってたって言うても十二時間くらいだよ！ その……昨日の夕方、うちに黒雪姫先輩と、あとニコとパドさんが来てさ……」

「……ふううん」

【UIV ふうううーん、なのです】

【U I V ふううーん、なのです】

「い、いや、来たつて言つても別に泊まつてたとかじゃなくて、晩ご飯作つて食べたらみんな帰つたし……」

[.....]

【U I V ふうううう——ん、なのです】

二人の目つきがいよいよ冷ややかになるので、とつとと本題に入るが吉と判断する。

「そ、それで、僕もその時に初めて合併の話聞いたんだよ。ニコたちも、『三獣士』の残り二人を説得するのに昨日までかかったみたいで……それで、あとはもう先輩のメールに書いて

あるとおりで、具体的なことは明日にならないと……」

「……………なるほど、ねえ……………」

ここでようやく表情をノーマル状態に戻したチユリは、考え込むように言った。

「でも、前に領土戦で杉並を攻めてきた、ブレイズ・ハートさんとカピーチ・パラソルさんは納得してるのかな……………」あたしは直接戦ってないけど、相当な剣幕だったんでしょ？」

「UIV ええ……………ブレイズさんたちは、サッチャンがレッド・ライダーを全損させたことを、そう簡単には許さないと思うのです……………」

「じゃあ……………もしかしたらブレイズさんたちは、合併を知ったらレギオンを脱退しちゃうかもしないね……………」

チユリの言葉に無言で頷いてから、ハルユキは三人の中で最年少にして最古参のレギオンメンバーに訊ねた。

「四壁宮さんは、合併についてはどう思ってるの……………」

すると話は、ほとんど考える様子も見せずホロキープードをタイプする。

「UIV とくに抵抗感とかはないのです。私がバーストリンカーになった頃は、レギオンが近くのレギオンと合併したり、あるいは分裂するのは普通のことでしたから……………。加速世界の状況が大きく変わらなくなったのは、六大レギオンが相互不可侵条約を結んだからことなのです。ただ……………」

そこで一瞬手を止めてから、少しスピードを落として入力を続ける。

「UIV もしも、合併によってネガ・ネビュラスというレギオン名がなくなってしまうのだとしたら、やっぱり残念だと思います。それは、プロミネンスの皆さんも、同じことだと思うのです」

「うん……………そうだよね……………」

チユリが、少しずつ雲が薄くなってきた空を見上げる。

「あたし、まだネガ・ネビュラスに入れてもらってたった三ヶ月だけど、それでもレギオンにすごく愛着あるもん。加速研究会は倒さなきゃいけないと思うし、仲間がいっぱい増えるのは嬉しいけど、それでも……………不安がないって言えば嘘になっちゃうかな。いつまでも、大好きな人たちと居心地のいい場所、楽しく過ごしたい……………そういう気持ちはあるから……………」

その言葉に、ハルユキは思わず幼馴染の横顔を見詰めた。

ハルユキは、以前チユリに言ったことがある。ライム・ベルの必殺技《シトロン・コール》のエネルギー源になっているのは、過去を望む力だ。技の発動時に聞こえる鐘の音は、チユリとハルユキ、タカムが通った小学校のチャイムにそっくりだ、と。

恐らくチユリはいまでも、幼馴染三人が毎日夕方まで汗まみれになって遊び回っていた頃に——父親の病気の再発に怯えることになった頃に、戻れるものなら戻りたいという気持ちを心の奥底に抱いている。そんな彼女に、レギオン合併や研究会との決戦といった大きな変化は、

ハルユキが想像する以上の圧力を感じさせているのだろう。

「……大丈夫だよ、チュ」

謡の向こうに座るチュリに、ハルユキは言葉を投げ掛けた。

「レギオンが合併して、もし名前が変わっちゃっても、大事なことはなんにも変わらないからさ……オレたちはプロミと力を合わせて加速研究会を倒して、あいつらの企みをぶっ潰して、黒雪姫先輩と一緒にブレイン・バーストのクリアを目指すんだ。これまでも同じように」

するとチュリは、何度か瞬きしてから、にかつといつもの元氣な笑顔を見せた。

「ん、そうだね！ あたしもハルも、まだまだ強くならなきゃだね！」

「お……おう、そうだな」

ハルユキのやや歯切れの悪い返事に、謡がくすつと笑うと指を動かした。

「UIV 有田さんは、いいかげんレベル6のボーナスを決めたほうがいいと思うのです！」

「うっ……そ、そうだね……。グラフさんも言ってたし……」

「UIV ……グラフさんが、何を言ってたのですか？」

謡はすでに、黒雪姫のレポートを読んで、ハルユキと楓子が帝城でグラフ・ファイター・エッジと遭遇したことを知っているはずだ。ハルユキは前置きを省いて、双剣使いの言葉を口にした。「えっと……いまの自分に不満があるなら、修行やレベルアップ・ボーナスで強化していけばいい、って。まあ、僕、シルバー・クロウのステータスに不満があるのかどうかも解らないん

だけだね……」

ハルユキがそう付け加えると、チュリが呆れたように首を振り、謡は再び微笑んだ。

「UIV グラフさんの言うことは九割がた受け流すのをお勧めしますが、そのアドバイスは残り一割かもですね。デュエル・アバター<sup>デュエル・アバター</sup>の成長に壁を感じたなら、ボーナスで方向性を変えてみるのも一案なのです。私も次は、近接戦闘力を少し強化しようと思ってますから」

チャット窓に打ち込まれた謡の言葉を熟読しながら、うむむと考え込む。

ハルユキがいままでレベルアップ・ボーナスを飛行アビリティの強化に注ぎ込んできたのは、黒雪姫のアドバイスに従った結果だ。レベル2の時に、選択肢として出現した魅力的な必殺技に心が揺れたこともあったが、以降はさして悩みもせずに飛行力を伸ばし続けてきた。

なのに、レベル6のボーナスに限って、どうしてこうも迷いが生まれるのか――。

「……グラフさんや楓子師匠は、一人で勝てない敵には二人で……二人で勝てなければ三人で勝てばいいって言ってたけど……」

自分の両手を見下ろしながらハルユキは呟いた。

「一人でも、どうしても勝ちたい……勝たなきゃいけない場面もあると思うんだ。そんな時のために、もう少しだけ力が欲しい。そう思うのは、間違いなのかな……」

「UIV それは、支援型のデュエル・アバターを与えられたバーストリンカー全員の、永遠の悩みなのです」

「諷刺がさずそう発言したので、ハルユキはハッと顔を上げた。

左を見ると、諷刺はにこにここと、チユリはにやにやとした笑みを浮かべている。考えてみれば、アーダー・メイデンは遠距離攻撃に特化した火力支援型デュエルアバターだし、ライム・ベルに至っては直接攻撃力は単なる打撃しか持たない完全支援型だ。

「あ……ごめん、チユ、四壁宮さん」

慌てて頭を下げると、チユリがぶつと噴き出した。

「謝らなくてもいいよ。そりゃ、ういちゃんと言ったみたいに、もうちょっと攻撃力があれば……って思うときもあるけどさ。あたしは自分のアバター好きだし、ソロ対戦よりもみんなと一緒に戦うほうがずっと楽しいもん。一人だけの戦いは現実世界の部活で散々やってるから、加速世界はチーム戦を思いっきりやれば、それでいいんだ」

そう言ったチユリの顔を見上げ、諷刺が素早く指を動かした。

「UIV チユリさんは考え方がしっかりしてるのです」

「……そう言われるとなんか、僕がぐらぐらしてるみたい……」

もともと呟いてから、ハルユキはゆつくりと頷いた。

「でも、チユの言いたいこと、よく解ったよ。要は、自分が何を求めているのか、だよな……。考えてみれば、黒雪姫先輩もいちばん最初から、答えは自分のアバターに訊けって言ってた気がする」

「UIV そのとおりなのです。色々考えて、いっぱい悩んで、自分自身が本当に望むほうに進んでいけばいいと思います」

「……うん、ありがとう、四壁宮さん、チユ。明日の領土戦までには、ポーナス決めておくよ。それと……先輩のレポートには書いてなかったけど、グラフさんから四壁宮さんに伝言があったんだ」

小首を傾げる諷刺に、ハルユキは、帝城からの離脱直前にグラフ・ファイ・エッジから託された言葉を伝えた。

「俺が帝城北門から脱出する時は、ヘルプよろしくな、デンデン……だって」

それを聞いた諷刺は、しばらく両眼を大きく見開いていたが、やがてきゅつと唇を失せさせた。

「UIV デンデンと呼ぶのは、そろそろやめて欲しいのです」

ただそれだけ打ち込むと、小さな両手をしっかりと握り締め、諷刺は視線を上に向けた。ハルユキも空を見上げると、雲の切れ間から伸びる金色の光の筋が、湿り気を含んだ空気をさらさらと輝かせていた。

東京二十三区でいちばん人口が多いのはこの世田谷区である——と、奈胡志帆子は小学生の頃から社会科の授業などで繰り返し教えられてきた。

面積は惜しくも大田区に次いで二番目だが、それは羽田空港という巨大な埋立地が大田区にあるからで、空港をノーカーンにすれば世田谷が最大だというトリビアも耳に染みついている。それゆえ、パーストリンカーになってから大いに驚かされたのは、加速世界では世田谷が過疎エリア扱いされているという事実だった。

「……実際、どういう理屈で世田谷が過疎エリアになっちゃったのか、実はいまでもよく解っていないんだよね……」

京王線の急行列車に揺られながら志帆子が小声で言うのと、隣に立つ三登聖実が肩をすくめて囁き返した。

「そりゃ、これっていう名所がないからだろうなあ。やつば対戦したいヤツは渋谷とか新宿に集まるし……」

「名所がないってことないでしょ、世田谷にもいろいろあるじゃん」

「たとえば？」

「たとえば……三軒茶屋のキャロット・タワーとか……」

「それと？」

「それと……子玉川のライズとか……」

「あとは？」

「あとは……と、等々力渋谷とか、馬事公苑とか、オリンピック公園とか」

志帆子が懸命に世田谷の名所を列挙すると、聖実にはっこり微笑みながらうんうんと頷き、言った。

「それ、今度クラス君たちに、幾つ知ってるか訊いてみようか」

「やあーめえーてえー」

呻き声とともにかくつと項垂れ、負けを認める。確かに世田谷区には、池袋のサンシャイン・シティや新宿の都庁ビルや渋谷のラヴィン・スクエアのような、東京都民ならば誰でも知っているランドマークはこれといって存在しない。それゆえに対戦希望者は集まらず、それゆえにパーストリンカーは増えなかった。理屈は解るのだが、しかし釈然としない気持ちに変わりはない。

「……むむう……あと、何かなかったかなあ……」

志帆子が諦め悪くぶつぶつ言っていると、二人の向かい側で仮想デスクトップを操っていた由留木結芽が、突然顔を上げて眼鏡をきらーんと光らせた。

「シホちゃん、あるよあるよ、名所」

「えっ、どこどこ？」

「芦花公園とこの巨大ガスタンク」

「……………それ、来年取り壊されるし……………そもそもただの丸いやつだし……………」

がっくり肩を落とし、しかしこんな掛け合い漫才をしている場合ではないと背筋を伸ばす。徒歩通学の三人が平日の放課後に京王線に乗っているのは、遊びに行くからではない。重要なミッションに出撃するためだ。

「ほら、もうすぐ環八越えるよ。二人とも、グローバル接続切ってるよね？」

「おいつす」と聖実。

「ろんもち」と結芽。

世田谷区を南北に貫く環状八号線は、そのままエリアの境界線になっている。

志帆子たちが通う敷島大学付属桜見中学校が存在するのは、世田谷第二エリア。学校最寄りの桜上水駅から京王線の下り列車に乗り、環八を越えればその先は世田谷第五エリアだ。電車に乗ってからニューロリンカーのグローバル・ネット接続をオフにしたため、エリアが

変わろうと乱入される可能性はない。しかし、高架を疾走する急行電車が幹線道路を横切った瞬間、お腹の底から緊張感が湧き上がってくる。

目的地は、次の停車駅である千歳烏山。しかし買物やら遊びに行くわけではない。

三人は、バーストリンカーになつてからほとんど初めて、自ら乱入するためにエリア境界を越えるのだ。

「……………そんなキンチキーすんなよシホ。相手がリストにいらって決まったわけじゃないんだからさ」

でいうか、いない可能性のほうが高いよー」

聖実と結芽に力の抜けた声で言われ、ゆっくりと頷く。

「……………うん。でも……………なんか、予感がするんだ。今日、あの人に会えるって……………」

「そう……………かもな。会ってどんな話するのか、決めてきたのか？」

聖実に問われ、今度は首を横に振る。

「ううん、何も……………でも、カラス君なら、きつこう言うと思う。『真っ直ぐぶつかれば、

きつと伝わる』ってさ」

「ぬっふふ……………そーかもねー」

妙な笑い方をする結芽をじろつと睨み、志帆子は言った。

「言つとくけど、わたしが負けたらサトとユメがぶつかるんだからねー」

「へいへい」「はいはい」

二人の返事は相変わらずのんびりしているが、それは志帆子の緊張を和らげようとしてくれているからだ。



感謝の意を示すために、聖実と結芽の制服の袖をきゅつと掴むと、志帆子は窓の外に視線を向けた。

一分後、電車は滑らかに減速し、千歳烏山駅のホームに滑り込んだ。

階段を下り、とりあえず駅前広場のある南口から出る。緑化された広場にはベンチが幾つも設置され、加速するのに都合が良さそうだ。

「どっかお店で、と思っただけあの広場でいいか」

志帆子がそう提案すると、聖実と結芽も頷いた。対戦のためのエネルギーを補充するために、駅ビルに入っているアイスクリームショップでレギュラーコーンを一つずつ買い、広場に移動する。

奥まった木陰のベンチに並んで座ると、三人はしばし無言でアイスクリームを味わった。

志帆子のストロベリーチーズケーキ、聖実のクッキーアンドクリーム、結芽の大納言あずきが同時に消滅し、同時によしと気合いを入れると、揃ってニューロリンカーに手を伸ばし、グローバル接続ボタンを押す。

事前に、対戦するのは志帆子で、聖実と結芽はギャラリーに入ると打ち合わせ済みなので、加速するのは志帆子一人だ。頷き合い、大きく息を吸って――

「(バーストリンク)!!!」

ばしいっ! という衝撃音が響き渡り、夏の夕暮れを青白く凍らせた。

グリム童話のグレーナルをモチーフにしたフルタイプ用アバターで初期加速空間に移動し、仮想デスクトップで赤々と燃える「B」のアイコンを叩く。同じくらしいの期待と不安を感じながら、マッシングリストを――開く。

さすがに過酷エリアと呼ばれているだけあって、リストに現れた名前は、ミント・ミトンとブラム・フリッパーを除けばたった二つだった。上側の文字列を識別した瞬間、フルタイプ中なのにも思が詰まる。

「Mammoth Scissors」――マゼンタ・シザール。聖実と結芽を含む十数人ものバーストリンカーにISSキットを強制的に感染させ、加速世界の平準化を目論んだ恐るべきラジカリスト。

彼女こそ、志帆子が会いに来た相手だった。本拠地が世田谷第五エリアだという情報はあったが、こうしていきなり発見できたのは大なる幸運と言っていた。

しかしマッシングリストには、想定外の情報も含まれていた。

マゼンタのすぐ下に表示されている、もう一つのアバター名。  
「Avocado Avocado」――アボカド・アボイダ。マゼンタとコンビを組んでいた、超大型のデュエルアバターだ。そして、マゼンタとアボカドの名前を、タッグチームであることを示すマークが繋げている。

「……タッグ……!」

志帆子は、リストの上に人差し指を浮かせたまま、低く呟いた。

タッグチームはソロのバーストリンカーに乱入できないが、逆は許されているので、志帆子がこのままマゼンタとアボカドに挑むことはルール上は可能だ。だが、もし戦うことになった場合、勝率は大幅に下がる。

「どうしよう……」

唇を噛み締め、隣を見たが、青く凍ったままの聖実と結芽からはもちろん何の答えも返ってこない。

いったん加速を停止し、二人のどちらかとタッグ登録してから、改めてマゼンタに乱入するという手もあるにはある。しかしその数十秒のあいだにマゼンタがリストから消えてしまつては元も子もない。

志帆子はメルヘンチックなアバターを振り向かせ、北の空を見上げた。

京王線の高架から一キロほど北には、中央自動車道が東西に走っている。その先はもう杉並エリアだ。志帆子たちが三日前に加入した、ネガ・ネビュラスの領土。

——こんな時、シルバー・クロウならどうするだろうか。

ふとそんなことを考えてしまい、志帆子はくすつと笑みを漏らす。

三日前の放課後、新高円寺駅近くの私立梅郷中学校の生徒会室で、志帆子たち三人はネガ・ネビュラスのメンバーと初めてリアルで顔合わせをした。残念ながら先方はフルメンバーでは

MAGENTA SCISSOR



なく、同席したのはレギオンマスターのブラック・ロータスこと黒雪姫、アーダー・メイデンこと四壁宮議、シアン・パイルこと黛拓武、ライム・ペルこと倉嶋千百合、そしてシルバー・クロウこと有田春雪の五人だけだったが、残るスカイ・レイカーとアクア・カレントにも近々紹介して貰えるらしい。

最も印象深かったのは、やはりマスターの黒雪姫だ。梅郷中学校の副生徒会長も務めているという彼女の人間離れた美貌と、そして現実世界でも《黒雪姫》なるハンドネーム(?)で押し通す精神力(?)には圧倒されずにはいられなかった。さすがは黒の王、只者ではない、と帰り道で三人深々と頷き合ったものだ。

そして、黒雪姫の次に強い印象を受けたのが、シルバー・クロウ——有田春雪だった。

顔立ちも体つきも丸っこい、加速世界のデュエルアバターとは対照的なイメージを持つ彼は、しかし無制限フィールドで出会った時と同じように、志帆子の緊張をあっという間に溶かしてくれた。黒雪姫たちが彼に大きな信頼を置いていることも、すぐに伝わってきた。

シルバー・クロウなら、いつだって全力で、自分の弱さを受け入れて前に進む強さを持っている彼なら、たとえ相手がタッグでも、怖じ気づいたりはいらないだろう。そう、志帆子がこの世田谷第五エリアを訪れたのは、ただ戦って勝つためではない。勝利よりももっと大切なものを、かつての敵と分かち合うためにここまで来たのだ。

「……聖実、結芽、それにカラス君。わたし……頑張るから!」

青く凍った世界でそう叫ぶと、志帆子はマツチングリストを力強く叩いた。

グレートルのアバターから、デュエルアバター《ショコラ・パベッター》に変身しながら暗闇を落下した志帆子の両足が、硬い地面——ではなく浅い水面に呑み込まれた。

足首のあたりをくすぐる細液の感触を意識しながら、ゆっくり顔を開く。途端、強い日差しが視界を真っ白に染める。

すぐにアイレンズの感覚が調整され、世界が色を取り戻す。

果てしなく広がる青い水面。水深は十センチ程度だが、フィールド全体を呑み込んでいる。建物は何て白っぽく日焼けしたコンクリートの骨組みに姿を変え、それらの間を吹き抜ける風が水面をさあっと波立たせる。

自然系、水属性の《水域》ステージだ。明るい陽光と澄んだ水面という、ちよつとしたリゾート気分が味わえるデザインゆえに人気は高いが、志帆子はステージ名を認識した瞬間に、「やば……」と呟いていた。

しかし、どうあれ対戦は始まったのだ。しかも、志帆子の乱入によって。あとはもう、ひたすらに頑張るしかない。

ひとまず、状況を確認する。

視界右上に表示されている体力ゲージは、上下に二本。予定通り上がマゼンタ・シザーで、

下がアボカド・アボイダだ。

中央下部に表示されるガイドカーソルも二つ。しかし、別々の方向を指し示している。どうやらマゼンタとアボカドは、エリア内の異なる場所にいるようだ。会うべき相手はマゼンタだが、どちらのカーソルが彼女を示しているのかは解らない。

最後にぐるりと周囲を眺めると、少し離れた駅ビルの屋上に、二人の観戦者の姿があった。無論、聖実と結芽だ。志帆子が手を振ると同時に、二人ともひょいとい飛び降りる。

まったく水飛沫を上げずにふわりと着地した聖実たちは、一直線に駆け寄ってくると、交互に叫んだ。

「どーすんの、チョココ!!」

「相手、タッグだよ!?」

「なんで加護し直さなかったのさ!!」

「しかもレベルもさだよ!?」

二人は詰め寄られつつも、ちらりと自分の体力ゲージを見やる。アバターネームの横に表示されているレベルは、アボカドと同じ。相手タッグとの戦力差は絶対的だ。——しかし。

頭に残っているボンネットを、振りし、両腕にがしつと手をあて、志帆子は叫んだ。

「メンメン、ブリコ、いいこと!? パーストリンカーたるもの! ひとたび加護したならば、

ひたすら対戦あるのみ! ですわ!」

「……………」

聖実と結芽が微妙な表情で押し黙る。そんな二人に向けて、いつそう高らかに宣言する。

「このわたくしが、たかだか5だの6だののタッグ相手にビビると思ったら大間違いですわ!

二人まとめてぶつ倒して、がつつりポイント稼がせて貰いますわよ!」

「……いやチョココ、あんた対戦しに来たんじゃなくて……」

という聖実の言葉は、最後まで続かなかった。

いきなり、二人の姿が目の前から掻き消えた。《観》またはレギオンメンバー以外の対戦者が、半径十メートル以内に近づいてきたことによって、強制的に移動させられたのである。

志帆子は素早く振り向いた。

直後、駅前広場の中央に、とぶんと、とささやかな波紋を広げて降り立った人影があった。細身の長身。女性型らしいシルエットを持つボディ全体に、赤紫色のリボン状装甲が巻き付いている。両腕には大型ナイフに似た武器を装備し、露出しているのは口許のみ。

その唇に妖艶な微笑を浮かべるデュエルバタは、間違いないマゼンタ・シザーだった。しかし、かつて遭遇した時と、たった一つ異なる部分がある。胸の真ん中に貼り付いていた、

漆黒の眼球型強化外装——ISSキットが存在しない。

紅い唇が動き、ハスキーな声が発せられた。

「こんなエリアで乱入してくるから誰かと思つたら、お隣のチョコちゃんじゃない」

緊張を押し殺し、志帆子は毅然と言い返した。

「あいにくですが、わたくしの本拠地はもう世田谷第四じゃありませんわ」

「アラ、引越しちゃったの？」

「違います！」

大きく息を吸い、胸を張って名乗る。

「わたくし、いまは、ネガ・ネビュラス所属のシヨコラ・パベッターなのですわ！」

途端

マゼンタの唇に浮かぶ笑みが、いくぶん薄れた。

顔を覆う、フィルム様の光沢を持つ装甲の奥から、鋭い視線が放たれる。

「……ふうん。ワザワザ、レギオン移籍の挨拶に来てくれたってワケ？」

「正しくは移籍じゃありませんわ。プチ・パケは解散して、わたくしとミンミンとブリコは、

全員ネガ・ネビュラスに加入したのですわ！」

志帆子がそう告げると、マゼンタの微笑は完全に消え去る。その理由が、怒ったからなのか、呆れたからなのか、あるいは志帆子の喋り方にイラッときたからなのかは解らない。

この「ですわ」口調は、別にキャラ作りでも心理戦でもない。いつの頃からか、シヨコラ・パベッターにいる時は、どうしてもこんなふうにししか喋れなくなってしまったのだ。正確には、この口調が染みついてから、加速世界で自然に振る舞い、戦えるようになった——と言うべき

か。

聖実や結界には時々からかいのネタにされたりもしているが、志帆子はこの自分も案外嫌いではない。少なくとも、現実世界にいる時よりもずっと自由に、言いたいことを臆さず言えるのだから。

そう——言うのだ。今日、このエリアにきた理由……マゼンタ・シザーに乱入した理由を。

志帆子はお腹に力を入れ、口を開こうとした。だが一瞬早く、マゼンタがいつそうクールな声を発した。

「つまり、警告しにきたワケ？ あんたたち三人はもう黒のレギオンのメンバーなんだから、手を出したらタダじゃ済まないって？」

「は……？」

思わず絶句してから、両拳を握り締め、全身で否定の意を表す。

「ち……違いますわ、ぜんぜん！」

「なら、お礼参りか何か？ ISSキットのコトで、ワタシに仕返しにきたの？」

「ま……ますます違いますわ、違いまくりますわ！」

ボンネット帽がすっ飛びそうな勢いでかぶりを振ると、志帆子は叫んだ。

「それは確かに、あなたがミンミンとブリコにISSキットを強引に寄生させたこと、そしてわたくしたちのお友達のカルちゃんを狩ろうとしたことは、そう簡単には忘れられませんわ。

ですが……わたくしは、シルバー・クロウから聞きました。ISSキット本体を破壊するため  
の戦いで、最後はあなたもクロウ君たちに力を貸してくれたって……」

それを聞いたマゼンタが、唇を不愉快そうに曲げる。

「なんだか、話がオオゲサになってるわね。アレはクロウに協力したんじゃないやなくて、ワタシの  
仲間を守ろうとしただけよ」

「なら、それでもいいですわ。仲間を守りたいっていう気持ちがあるのなら……それは、あな  
たもわたくしと同じ、パーストリンカーだっていうことですから」

志帆子がそこまで口にした、その瞬間。

マゼンタ・シザーの足許で、水面が爆発したかのように白い飛沫を散らした。

強烈な踏み込みから、マゼンタが一気に距離を詰める。刃物のように鋭利な手刀が、水煙  
を切り裂きながら喉元に迫る。

「っ……」

歯を食い縛り、志帆子は身を沈めながら上体を捻った。マゼンタの左の貫手が、チツと音を  
立てて首を掠め、後ろに抜ける。体力ゲージが微減し、いったん距離を取りたくなるが、この  
ステージで迂闊な逃げは禁物だ。

マゼンタの左腕を両手で掴み、水中の両足をしっかりと踏ん張りながら、一本背負いの要領で  
後方に放り投げる。長身のデュエルバターは背中から水面に叩き付けられる——はずだった

が、空中で器用に宙返りすると、見事な着地を決める。

ここでようやく後ろに下がった志帆子は、マゼンタをびしっと指差して叫んだ。

「いきなり危ないじゃない……ですわ！」

振り向いたマゼンタは、幸い追撃してくることはなかったが、尚もあからさまな敵意を滲ま  
せつつ答えた。

「対戦なんだから、危ないのはアタリマエよね。ソレより、さっき、よく踏み留まって避けた  
じゃない。少しだけ驚いたわ」

「……わたくし、無制限フィールドでの引きこもり歴長いんですのよ。対戦経験が少なくても、  
各ステージの攻略法はそこそこの暗記してますわ」

言いながら、水面下の足場を確かめる。《水域》ステージを覆う水はただかたかた十センチだが、  
接近戦ではこの微妙な水深がくせ者のんだ。足だけが水に沈んでいることをつい忘れてしまい、  
迂闊に跳んだり走ったりしようとする和高確率ですつ転ぶ。動く時はまず重心を落とし、足場  
をしっかりと確かめてから……というコツを、志帆子は聖実たちやクルちゃんとの鬼ごっこやら  
影踏みやらを通して体得した。

いっぽうマゼンタ・シザーも、さすがはレベル6だけあって、そこそこレアなこのステージ  
に慣れているようだ。先刻の貫手や宙返りの鋭さも含めて、ISSキットなしでも相当な猛者と  
言うべきだろう。

だからこそ。志帆子は、ここであんなに負けるわけにはいかないのだ。

「……マゼンタさん。こっちから乱入した以上、戦いを避けるつもりはありません。ただ……そのあとで、わたくしの話を聞いて欲しいのですわ」

そう言葉を投げかけると、マゼンタは再び唇に薄い笑みを浮かべた。

「なら、ワタシに倒されないよう頑張らないとね。この対戦が終わったら、即座にグローバル接続を切るツモリだから」

「……ええ」

頷き、毅然とした声で付け加える。

「あなたも、簡単に退場しないで下さいませ……ね！」

言い終わると同時に、思い切り水の下の地面を蹴る。爪先を水面に滑らせながら、ひと息で距離を詰める。

シヨコラ・パペッターの装甲は、基本的にチヨコレートっぽいのは見た目だけで、日差しで溶けたり衝撃で割れたりはないが、それでも幾らかチヨコラ標準な性質を備えている。最大の特徴は酸めると甘いことだが、耐熱性は低めなため、うで水を弾いたりもする。その撥水性のおかげで、水域ステージでは、水の抵抗がある程度減殺できるのだ。

ダッシュでマゼンタに肉迫した志帆子は、すばと水を切り裂きながら、左ミドルキックを繰り出した。

マゼンタが、さすがの反応で右腕を折り畳む。そのガードの上から、構わずに足の甲を叩き付ける。ガアーン！ と派手な衝撃音が響き、マゼンタがわずかにバランスを崩す。

「——シッ！」

よろめきながらも、鋭い呼吸とともに繰り出してくる反撃の左フックを、身を沈めて躲す。

そのままマゼンタの懐に密着し、両手で相手の首を押さえながら、左膝をボディに突き刺す。

一撃、二撃——更に三撃！

マゼンタのリボン装甲は、打撃への耐性はさほど高くないのか、膝蹴り三連撃で体力ゲージが一割以上も減少した。

「くっ……」

マゼンタも負けじと左右のパンチを打ってくるが、リーチが長いぶん、密着状態では動きがぎこちなくなる。しかも上からの打撃は志帆子の大きな帽子に阻まれ、なかなか顔まで届かない。

首相撲から脱出するには、相手の腕の内側から両手で外すか、ひたすら横に回りまくるのが定石だ。しかしマゼンタにそこまでの知識はないらしい。密着したまま打撃で削れるだけ削り、主導権を取る。

マゼンタの体を崩しながら、四度目の膝蹴りを打ち込もうとした、その時。ひやつとする戦慄が、志帆子の下腹部を撫でた。



反射的に両手のホルドを解き、相手の肩を押して距離を作る。生まれた間隙を、下から上に、銀色の閃光が走る。

水のような冷たさが下腹から胸へと駆け抜け、真紅のダメージ・エフェクトがそれを追いかける。自分の体力ゲージが五パーセント減少するのを視界の端で確認しながら、志帆子は更に大きく飛び退った。

マゼンタ・シザーが高く伸ばしたままの右手には、大型のナイフが握られている。右腰から外しざま鋭く振り抜かれた刃の先端が、志帆子の装甲を苦もなく切り裂いたのだ。

型実とスパーリングする時のように、無手の格闘戦しか頭になくなっていたことを反省しながら、志帆子は無言で身構えた。

しかしマゼンタは、ゆっくりと右手のナイフを下ろすと、微笑とともに言葉を掛けてきた。

「……チョット驚いたわ。遠隔型かと思っただけ、意外と格闘戦慣れしてるのね。ドコで練習したの？」

「ミンミン……ミント・ミトンが、現実側で格闘技の道場に通ってるんですわ。彼女は、わたくしの一・三倍は強いですわよ」

途端、近くの建物の上から「数字が微妙すぎるぞー！」というような声が降ってきたが無視しておく。マゼンタも反応せず、志帆子を見たまま軽く頷く。

「ナルホドね。リアルな時間を費やして学んだ技術ってワケか……。ソレは、甘く見ちゃ失礼

だわね」

左手で左腰のナイフも外すと、二本の武器を高速で回転させてからびしと構える。

ぱつと見はナイフ二刀流のようだが実は違う。あれらは二つで一つの強化外装であり、合体することでアバターネームの由来となっている《ハサミ》を作り出すのだ。そしてそこからは、マゼンタ・シザーの真骨頂――。

しかしマゼンタは、二本のナイフを交差させようとはせず、言葉を続けた。

「ワタシはコレを使うから、アナタも召喚していいわよ、チョコちゃん。例の、美味しそうなお人形サンを」

「……あいにく、まだ必殺技ゲージが足りませんわ」

そう答えたが、実際には《チョベット》一体を呼び出すのにギリギリ足りるだけのゲージは溜まっている。しかし、残念ながらもいままさには召喚できない。

志帆子が、水域ステージと気付いた瞬間に「やば」と呟いた理由。

それは、チョベット召喚の前提となる必殺技《カカオ・フアウンテン》が、水面上では使えないからだ。つまり、チョベットを呼び出すためには乾いた場所に移動する必要があるのだが、このステージの大部分は水に覆われている。しかも、建物はコンクリートの骨組みばかりで、カカオ池を作るだけのスペースがない。

志帆子のそんな事情に気付いているのかいないのか――マゼンタは薄い笑みを保ったまま、

「なら、もう少しゲージを溜めてあげる」

と呟くと、両手のナイフを凶悪に輝かせながら一歩前に踏み出した。その時だった。

駅前広場を満たす水に、風によるものではない波紋が生まれた。およそ一秒に一回の規則的なベースで、水面がかすかに乱れる。耳を澄ませれば、ばしやん、ばしやんという派手な水音も聞こえる。

「……アラ……」

と呟き、マゼンタがナイフを下ろしながら後退した。注意深く身構えたまま、志帆子もちらりと音の聞こえてくるほうを見やった。

駅前広場に接する道路、いや水路上を、南側からゆっくりと近づいてくるシルエットがある。まだかなりの距離があるのに、走るだけで水面が揺れる理由は、影が途轍もなく巨大だからだ。予備知識がなければ、通常対戦フィールドに存在するはずのないエネミーだと勘違いしたかもしれない。

高さ、二メートル五十センチ。横幅、一メートル五十センチ。深緑色の装甲に包まれた体軀は、完全なる卵形。

短く太い両足で、派手に水飛沫を巻き上げながら走ってくるのは、マゼンタのパートナーであるアボカド・アボイダに間違いない。

……いよいよ厳しくなってきたか。

と胸の奥で呟きながら、かつてアボカドに文字通り食べられそうになった経験を持つ志帆子はじわじわと後退した。

数秒後、広場に駆け込んできたアボカドは、マゼンタの隣で立ち止まるや、ごろごろと低音が強調された大声を出した。

「ごめん、マゼンタ！ おれ、遅くなった！」

「別にいいわよ、アボ。あなたのトコは、エリアの南側だし……どうせこの対戦は、ワタシが一人でやるつもりだったから」

リング状になったナイフの握り——正確にはハサミの指穴——を指先に引っかけ、くるくると回転させながらマゼンタが答えると、アボカドは体ごとかばりを振る。

「いやだ！ おれも……おれも、一緒に戦う！」

「アラ、そう？ でも、相手はレベル5一人よ？ さすがに5と6のコンビで攻撃するのは、弱い者イジメじゃないかしら」

——気遣い無用ですわ！

と、志帆子は叫ぼうとした。だが「きづ」まで口にしたところで、アボカドの大声に掻き消されてしまう。

「……なら、おれが、シヨコと一人で戦う！」

そう言い切るや、卵形ボディの上のほうに存在する小さなアイレンズを黄色く光らせ、ずしんと一歩前に出る。

マゼンタは、参ったわね、というように肩をすくめると、志帆子に声を掛けてきた。

「チョコちゃん、悪いんだケド、アボの相手をしてやってくれないかしら。この子、アナタと再戦するの、けっこう楽しみにしてたみたいなのよね」

「……………か、構いませんわ」

と答えはしたが、内心では「うへえですわ」と思わざるを得ない。

チョコベツトさん召喚できればという条件がつくが、実はショコラ・パベッターはマゼンタ・シザーとの相性は悪くない。なぜならチョココレート製の人形であるチョコベツトは、マゼンタの刃物攻撃をほぼ完全に無効化できるからだ。

しかし、アボカド・アボイダとの相性は最悪と言っている。アボカドの軟質装甲もほとんどの物理攻撃を無効化してしまううえに、大きな口はへかじりつき攻撃が弱点のチョコベツトを丸呑みできるほどのサイズなのだ。打撃の手数で軟質装甲を吹き飛ばし、中身のアバター素体を引っ張り出すくらいしか戦う方法は思いつけない。そもそも、チョコベツトを召喚するための地面も周囲にはない。

だが、ここで負けてしまったら、マゼンタと話すという主目的を達せられなくなる。

レベル的にも、ステージや対戦相手との相性的にも、厳しい状況であることは間違いない。

だがその不利を跳ね返し、勇戦せねば——仮に勝利はできずとも、マゼンタを納得させられるだけの決意を示さねばならないのだ。ネガ・ネビュラスの一員として。加速世界を愛する一人のバーストリンカーとして。

「さあ……………来なさい、アボカド・アボイダ!!」

ムエタイ式のアップライトな構えを取りながら、志帆子は叫んだ。

それに反応し、短い両腕を振り上げながら、アボカドも叫び返してきた。

「おれ……………前の時は、ショコ食べようとした! でも、今日は……………ちゃんと勝つ!!」

うおおお、と雄叫びを上げ、真っ直ぐ突っ込んでくる。超重量級のアバターが地面を踏むたびに、噴水の如く水柱が立ち上る。

刹那。

志帆子の脳裏で、音を立てて断片的な思考がひとつの形に組み上げられた。

十日ほど前の、シルバー・クロウとの対戦。彼はステージの地形を三次元的に把握していて、思いも寄らぬ方法で志帆子を倒した。もちろんショコラ・パベッターに飛行能力はないが——同じことはできるはずだ。

そのためにはまず、アボカドを体力ゲージ量で上回らねばならない。猛然と突っ込んでくる卵形の巨体を、志帆子はその場で待ち受けた。

「でゅわあ——ッ!」

叫び声とともに、アボカドが両手を広げてジャンプする。分厚い装甲に守られた重量級の体で敵を押し潰すのが、彼の基本戦術なのだろう。単純だが、カウンターの取りにくい攻撃だ。しかし序盤から逃げ回っているのは、貴重な時間がなくなってしまう。

「うりゃっ！」

気合い一発、アボカドの真下にスライディングを敢行。水面を滑るようにして、ぎりぎりのタイミングで落下してくる巨体をくぐり抜け、後方へと抜ける。

ぱっしやあぁーん！と盛大な水音が響き、大量の飛沫が噴き上がる。水滴を浴びながら振り向き、立ち上がろうとしているアボカドに飛びかかる。

絶好の反撃チャンスだが、闇雲に殴ったり蹴ったりしても軟質装甲に吸収されてダメージは与えられない。両手両足も短いうに頑丈そう、関節技を仕掛けても無駄だろう。

狙い澄ました、渾身の一撃。それを、装甲の奥のアバター素体に命中させる。

以前に目撃したアボカドの《本体》は、直径わずか五十センチ。それが、直径百五十センチのボディの中央に埋まっている。つまり本体にダメージを与えるには、五十センチもの装甲を貫かねばならない。

志帆子の師匠である聖実が通っているジムはいわゆる総合格闘技系だが、打撃はムエタイの技術が基本になっている。当然志帆子もそれを教わったのだが、どうにか実戦で使うお許しが出たのは左のミドルキックと左ジャブ、右ストレートだけだ。しかし、無制限中立フィールド

での無限に等しい時間の中で、無限に等しい回数繰り返した技には、ささやかな自負がある。前回のシルバー・クロウ戦でも、地上での格闘戦だけならば、主導権を取ったと思えた瞬間もあったのだ。

聖実から伝えられた、右ストレート・パンチのコツ。

左足をどかっと踏み込み、右カカトをぐいっと捻り、右腰をぐりっと回し、回転力と体重をばしっと乗せて——右肩から大砲を発射するつもりで一直線にずばーんと打つべし！！

擬態語多すぎた教えを忠実に守って志帆子が繰り出した右ストレートは、立ち上がりかけていたアボカドの背中に深々と突き刺さった。

一次発酵させたパン生地のような粘りと弾力のある軟質装甲が拳を握め捕り、押し戻そうとする。だがシヨコラ・パベッターの、テフロンコーティングされたような高平滑装甲と小さな拳は軟体を穿ち、貫き、アバター素体まで届いた。

殴ったというより押したくらいの手応えだったが、アボカドの種、ではなく本体は防御力がゼロに等しいらしく、体力ゲージが一割以上も減少した。腕を引き抜くとすぐに傷は埋まってしまうので、追撃は諦めて距離を取る。

「これで逆転しましたわよ、アボカドさん！」

挑発に見えかけた台詞で彼等のゲージ状況を意識させておいて、さっと身を翻す。走る先は、広場に隣接した駅ビル。後ろから、

「おれ……負けない……!!」

という声とともに、立ち上がったアボカドが猛然と追いついてくる。

フレームだけの建物だが、記憶にあるとおり階段は存在した。コンクリート剥き出しの階段に飛び込み、最上階を目指す。アボカドも、ビル全体を震わせながら駆け上る。

屋上は、格子状に隙間のある平面になっていた。ずっと離れた端っこに、聖実と結芽の姿がある。声援を送ってくる二人にガッツポーズで応え、格子の上を広場方向にダッシュする。

「ショコ、逃がさない……!!」

階段から姿を現したアボカドも、唸り声を響かせながら連二無三追ってくる。二、三度足を踏み外したが、格子の隙間よりも自分のほうが大きいので落下には至らず、半ば転がるように志帆子に迫る。

駅ビル屋上の高さは約十五メートル。下は水面とはいえ浅いので、ショコラ・パベッターが落下すればノーダメージでは済むまい。いっぽうアボカドは、たとえ落ちても分厚い軟質装甲のおかげで無傷だろう。だからこそ彼は、躊躇わずに追ってきたのだ。

「……来なさい、アボカド・アボイダ!!」

屋上の北の端、幅三十センチ程度のフレームの上に立ち、志帆子は前に伸ばした左手の指をぐいぐいと動かした。

「おれ……勝つ!!」

シンプルな宣言とともに、アボカドが両手を広げてダッシュする。志帆子を掴まえて一緒に落っこちようという作戦だろう。今回は真下をすり抜ける隙間はないし、両腕を足すと横幅が三メートル近いので、直前で左右に回避するのも難しい。

しかし志帆子は、今回も落ち着いてアボカドを待ち構えた。

卵形の巨体が視界いっぱい迫る。聖実と結芽の「よけてーっ!!」という声が聞こえる。

でもまだ……まだ引きつける。志帆子は回避できず、アボカドももう止まれない間合いにまで近づいた、その瞬間。

「ごっ……!!」

狙い澄ましたタイミングで、後ろに跳ぶ。

当然、そこに足場はない。志帆子の体は音もなく落下し始める。このまま地面に激突すれば大ダメージは免れないが、目の前を通り過ぎるフレームの縁に両手を引っかけ、反動を利用して両足を前に振り出すと、逆上がり用の要領で格子の隙間から体を持ち上げる。

ちょうど両足の先に、アボカドの背中があった。爪先で思い切り押すと、重量級アバターは屋上から飛び出し、

「おれ、落ちる!!」

と律儀に予告してから、志帆子の視界から姿を消す。

再びフレームの上によじ登った志帆子は、落下するアボカドを凝視した。

一秒後、巨体が広場の水面に激突し、途轍もない規模の水飛沫が巻き上がった。軟質装甲が平たく潰れるが、予想したとおり衝撃の大部分を吸収したらしく、アボカドにダメージはほとんどない。

しかし、この状況——この瞬間こそが、志帆子の狙ったものだった。

アボカド落下の衝撃で水が押しつけられ、タイル敷きの地面が直径十メートル以上も露出している。もちろんすぐに再び覆われてしまうだろうが、数秒あれば充分だ。

右手を高々と掲げ、人差し指を《乾いた地面》に向けながら、志帆子は叫んだ。

「——《カカオ・ファウンテン》!!」

アボカドのすぐそばに、艶やかな焦茶色の泉が湧き上がる。今度は指を跳ね上げさせ、もう一度叫ぶ。

「からの……《バベット・メイク》!!」

泉が瞬時に縮小し、その中央からチョココレート製の人影が飛び出してくる。顔に花のような模様が光る自動人形に、志帆子は命令する。

「チョコベット! その場でひたすら回避すわ!」

その時、ようやくアボカドが起き上がった。すぐ近くで身構えるチョコベットに気付くや、両手を突き出し、巨大な口をがばっと開いて叫ぶ。

「おれ……チョコ、食べる……!」

打撃技しかできないチョコベットは、アボカドにダメージを与えるすべを持たない。いつばうアボカド・アボイダは、《内部が虚無で満たされている》という噂の大口で、チョコベットを丸かじりできる。

ゆえに志帆子は回避に徹するようチョコベットに命じたのだが、それも長くは続かないだろう。しかし、二十……いや十秒アボカドの注意を引きつけてくれれば、それで充分。

高さ十五メートルの屋上から、チョコベットを捕まえようとするアボカドを凝視する。

いかに加速世界といえども正直怖い。こんなに高い場所から、自分の意志で飛び降りた経験はこれまで一度もない。しかし、この数倍の高さから落つことされたことならある。あの時、志帆子は学んだ。高所からの落下が生み出す膨大なエネルギーは、即死しかねないほど危険ないつばうで、強力な武器にもなり得るのだということ。

今度、シルバー・クロウに頼んで、上昇できる限界の高度まで連れていってもらおう。

そんなことを考えながら、志帆子はコンクリートのフレームから身を躍らせた。

両手で姿勢を制御しながら、爪先が鋭く尖った右足をまっすぐに伸ばす。眼下では、ついにアボカドがチョコベットの捕獲に成功し、大口を開けてかぶりつくようとしている。

広場の端から、これまで静観していたマゼンタ・シザーの音が鋭く響いた。

「アボ、上!!」

タッグなのだから、アドバイスは別にマナー違反ではない。しかし、もう遅い。

「あんが……？」

アボカド・アボイタが、妙な声を出しながら空を仰ぐとした。

ほぼ同時に、志帆子の右足が、卵形アバターの頭頂部に突き刺さった。

シルバー・クロウ渾身の《螺旋蹴り》さえ防いでのけたアボカドの軟質装甲を、ショコラ・バベッターの細くて凹凸が少なく滑りのいい脚は深々と穿ち、奥深くに隠された本体に爪先を触れさせた。今度こそ確かなインパクトの感覚が訪れ、アボカドの体力ゲージが一気に二割も減った。

「い……いだ——っ!!」

悲鳴を上げたアボカドが、チョベットを解放して頭に刺さる志帆子を掴もうとする。しかし、腕が短すぎて頭頂部まで届かない。いっぽう志帆子は、足を押し戻そうとする軟質装甲の蠕動に抗って、爪先で本体をぐりぐり抉る。

「さあ、参ったするのですわ！ さもないと、もっと痛くしますわよ！」

……《この口調でこの台詞》はなんだかやだなあ。

と思いながらも志帆子は叫んだ。いっぽうアボカドは、じたばた暴れつつも、意外に強情なところを見せる。

「い……いやだ！ おれ……もつと、もつとシヨコと戦う……！」

「——なら、仕方ありませんわ！」

心を鬼にして、アボカドの本体を蹴り碎くべく、志帆子が全身に力を込めた——その時。

「アボ、そこまで!!」

という大声が、広場に鋭く響き渡った。

声の主はマゼンタ・シザード。ナイフを両腰に戻した彼女は、腕組みをしたまま歩み寄ってくる。アボカドがびたりと動きを止め、志帆子を頭に刺したまま項垂れる。

「……おれの、負け……」

そう宣言するとその場にばしゃんと座り込んでしまったので、志帆子は右足を引き抜いて、アボカドの頭から飛び降りた。

対戦時間はまだ半分残っている。ようやく召喚できた虎の子のチョベットと一緒に後退し、近づくマゼンタを注視する。アボカドには何とか判定勝利したが、マゼンタはまだばば無傷だ。

対戦はここからが本番——。

と、思ったのだが。

アボカドの隣で立ち止まったマゼンタは、また穴が開いたままの頭頂部付近をばんと叩き、素っ気ない口調ながら心の籠もった声を掛けた。

「頑張ったわね、アボ。今回はチョコちゃんのほうが一枚上手だったケド、次はもっと上手く戦えるわ」

「次……」

咳いたアボカドが、座ったまま卵のお尻を支点にぐるりと振り向く。

「……シヨコ、また、来る？」

「え……ええと……」

思わず返事に詰まるが、小さなアイレンズでじーっと見詰められれば、無下にもできないという気がしてくる。咳払いしてから、両腰に手を当てて答える。

「ま、まあ、気が向いたらまた来て差し上げてもいいですわ」

するとアボカド・アボイダは、両手をぶんぶん振りながら大声を出した。

「やった！ おれ、次は、食べ……じゃなくて、勝つ!!!」

その様子を見て、ほんの一瞬だけ透明な微笑を浮かべたマゼンタ・シザーは、それをすぐに挑発的なものに変えて志帆子を見た。

「さて……どうする、チヨコちゃん？ ワタシとの対戦の続きをする？ それとも、アナタの話をやらしてみよう？」

パーストリンカードとしては、そう問われたからには「もちろん対戦ですわ！」と答えるべき場面かもしれない。しかし、相手はまだ余力を残している。マゼンタが話を聞いてくれる気になったのなら、この機を活かさねばならない。

「……では、わたしの話を聞いてくださいませ」

志帆子が答えると、どうぞ、とばかりにマゼンタが右手を広げた。

一歩前に出て、大きく息を吸い込み——しかしそこで、志帆子の喉は、糊付けされでもしたかのように塞がってしまった。慌てて口を開こうとするが、小刻みに痙攣するだけでどうしようも声が出せない。

仮想世界のアバターに不随意運動が起きるはずがない。萎縮しているのは肉体ではなく魂だ。そう、きつと、シヨコラ・パベツターの眉丈高な喋り方は、志帆子自身の臆病さを隠すための仮面なのだ。

志帆子は、他人を怒らせるのが大の苦手だ。学校では目立たないように息を殺し、トラブルになりそうな気配を感じたら即座に退く。誰の前でも上辺だけの愛想笑いを浮かべ、ちゃんと来るべきことがあって絶対に態度には出さない。相手が実の親であつてさえ、怒られないようにあれこれ先回りする癖がついている。聖実と結芽にだけは素の自分を解放しているつもりだが、それだってそんな気になっただけかもしれない。

デュエルアバター（シヨコラ・パベツター）のリリースになっている心の傷は、幼い頃からのカオスアレルギードと二人には説明しているし、自分も九割方はそう信じている。

でも、もしかしたら。チヨコレートの香りと質感、味を持つ装甲は、「私を嫌わないで」という気持ちの表れなのかもしれない。現実世界の志帆子がかぶり続けてきた愛想笑いの仮面が、加速世界でお菓子のアバターを作り出したのかもしれない。

もしそうなのだとしたら、そのアバターに高飛車で敵対的な仮面を被らせることでようやく



自由に振る舞えるようになったというのは大いなる皮肉だ。いや、それとも本当は、現実世界と同じように演技をしているだけなのだろうか。この世界でも、ずっと自分を殺し続けてきたのだからか。《本当の自分》って、いったい何なのだろう……。

「……マゼンタさん」

いつの間にかこわばりの消えた口を動かし、志帆子はかつての仇敵の名を呼んだ。

「わたくし……わたし、本当は、対戦とかあんまり好きじゃなかったの」

マゼンタは、こちらをじっと見詰めている。見えないアイレンズから発せられる強い視線を受け止めながら、志帆子はいつしか現実世界の口調に戻っていることも自覚せずに言葉を続ける。

「現実から切り離されたこの世界で、友達と一緒に、仲良く、楽しく過ごしていられればそれでいいって、ずっと思ってた。でも……ブレイン・パーストは対戦ゲームなんだから、戦いから永遠に逃げ続けてはいられないんだよね。この世界にいたるために、戦わなきゃいけない時もあった。それを気付かせてくれたのはマゼンタさんたちだったんだって、最近になって思うんだ……」

「……ずいぶんと、甘っちょろい言い草ね」

唇を歪め、マゼンタが冷たい声を出す。

「アナタたちだって、レベル5になるタメに、何度も対戦してきたんでしょ？ その過程で、

他のパーストリンカーからたくさんポイントを奪った。ソレが悪いって言ってるんじゃないのよ……さっき見せて貰ったケド、アナタは強いし、頭もイイ。強い者が生き残る……ソレが加速世界だものね。——でも、アナタたちが踏みつけてきたパーストリンカーのコトを忘れて、仲良く楽しく、なんて言い草は冗談じゃナイわ」

マゼンタ・シザーの言葉に含まれる怒りは、志帆子の心を切り裂き、強い痛みをもたらした。しかし、人間と人間が本音をぶつけあえば、そこに怒りが……痛みが生まれるのは当たり前だ。それを避けていては、気持ちなど伝わらないのだ。

「そう、だよね。わたしはいままで、自分たちのことしか考えてこなかった。自分たちだけが楽しく過ごしていられればそれでいいって思ってた。けど、マゼンタさんたちや、クロウくんたちと出会って解ったんだ。わたしに戦うための力が与えられていて、戦うべき時が来たなら戦わなきゃいけないんだって。パーストリンカーにいるために……守りたいものを守るために。その気持ちは……マゼンタさんも、同じでしょう？」

志帆子が問いかけた途端、マゼンタの口許がざりつと引き結ばれた。

爪の尖った右手が持ち上げられ、リボン装甲に覆われた胸の中央を掴むような仕草をする。かつて漆黒の眼球が寄生していた、その場所を。

「……このイビツな世界に、守りたいモノなんか、一つもナイわよ。壊したいモノなら、教え切れないほどあるケド」

凍り付くような声で、マゼンタは吐き捨てた。

同じように胸に手を当てながら、志帆子は叫んだ。

「嘘！ 少なくとも、アボカドさんのことは守りたいと思ってるはずだよ！ だからあなたは力を求めたんでしょ!?」

「知ったようなコトを……！ そんな可愛らしいアバターと、強力なアビリティを与えられたアナタに、何が解るの!!」

「解るよ！ わたしもミンミンとブリコが大好きだもん！ その気持ちは、あなたの中にも絶対にあるはずだよ!!」

「ソレ以上下らないコトを言うつもりなら……!!」

マゼンタの左手が閃き、ナイフのグリップを掴んだ。

だがその瞬間、アボカド・アボイダが、巨大な口から途轍もない大声を轟かせた。

「おれ……マゼンタが、好き!!」

小さなアイレンズから、驚くほど大きな涙の粒をばらばら零しながら、卵形のデュエルアバターは尚も叫ぶ。

「ショコも好き……クロウも好き……だから戦いたい！ もっともっと戦って、強くなって、仲良くなりたい!!」

「…………アボ…………」

押し殺した声でバートナーの名前を呼んだマゼンタ・シザーの体から、少しずつ力が抜けていった。ナイフから離れた左手で、アボカドの装甲をそっと撫でる。顔を上げ、志帆子を見ると、怒りの色が薄れた声で問いかけてくる。

「…………シコラ・バベッター。アナタは……ワタシたちに、何を求めているの」

胸に当てたままの左手に右手も重ね、志帆子は言った。

「…………わたしたちと……ネガ・ネビュラスと一緒に、加速研究会と戦ってほしい」

「カラス野郎……いや、シルバー・クロウ!!」

大型アメリカン・バイクに跨がる髑髏頭のライダーが、拳を握った左手をびしっと伸ばして叫んだ。

「今日こそ、俺様たちの戦いをジ・エンドにしてやるぜ!!」

「望むところで、アッシュさん……いえ、アッシュ・ローラー!!」

マフラーから排気炎を迸らせて突進してくるバイクを待ち受けながら、ハルユキも右の拳を突き出して叫んだ。

「決着をつけよう……一学期の終わりの、この日に!!」

二〇四七年七月二十日土曜日、午前七時五十分。

杉並第三エリアを南北に貫く環状七号線では、今日も恒例の《アッシュクロ戦》が行われている。

午後にはプロミネンスとのレギオン合併会議、夕方からはいよいよ港区第三エリアに遠征し、オシラトリ・ユニヴァースとの決戦という重要な一日だ。この日くらいはアッシュ・ローラーとの定期戦をお休みしてエネルギーを溜めておくべきか——とも思ったが、領土攻撃を万が一

にもオシラトリ側に悟られてはならない。(いつもと違うこと)は避けるべきだと考え直し、ハルユキはアッシュからの乱入を受けた。

いざ対戦が始まってしまえば時間はあつという間に過ぎ、残り五分、残り体力は双方揃えたように一割という状況である。数秒後の交錯で大ダメージを与えたほうが勝者だ。

とはいえ、必殺技ゲージは二人とも使い果たしている、通常技しか使えない。こうなると、《Vツイン拳》という自力開発の特殊技を持っているアッシュのほうが有利だ。

「いっくぜええええ——ッ!!」

世紀末ステージのひび割れた幹線道を爆走しながら、アッシュが叫んだ。

「超! 必殺! マックスVツイン拳——ッ!!」

トウオツ!! という掛け声とともにジャンプし、バイクの上に直立する。右足をスロットル、左足をタンデムシートに置いて、サーファーのように鉄馬を操る。

ハルユキとの距離が約三十メートルにまで縮まったところで、爪先を器用に操ってフロントブレーキを一瞬フルロック。同時に後輪をパワースライドさせ、バイクを高速で横回転させる。路面に螺旋状の炎を刻みつけながら、巨大な運動エネルギーの塊となって襲いかかってくる。

二重に回転するタイヤに触れた瞬間、ハルユキの残り少ない体力ゲージは確実に消し飛ぶ。前にこの大技を仕掛けられた時は、真上へのジャンプで回避しようとしたのだが、アッシュは回転状態からバイクごと倒立する《ジャックナイフ・ギロチン》という荒技で対応してきた。

その時は後輪で腹を削られてゲージを「割以上持っていけたので、同じ逃げ方はできない。といって左右に回避しようとしても、バイクは素々追従してくるだろう。

「おーっ、こりゃあ決まったかあ!？」

「飛べねーカラスはただのカラスだな!!」

「ただのカラスは飛べるんじゃないやね?」

路傍の建物から降ってくるギャラリたちの声を聞きながら、ハルユキは懸命に考える。

前はもちろんダメ。上下もダメで左右もダメ。ならば残された方向は後ろしかない。しかし残り時間いっぱい逃げ回ってドローを狙うというのは、一学期最後のアシクロ戦に相応しい結末とは言えない。

いや、逃げることはかり考えるから手詰まりになるのだ。ピンチの時こそ踏み留まって前へ。黒雪姫や楓子ならそうするはずだ。

「行けッ!!」

炎の独楽と化して突っ込んでくるバイクをしかと見据え、ハルユキは地面を蹴った。前でも上でも横でも後ろでもなく、斜め右前へ。

「無駄無駄ムドウアア——ッ!!」

アッシュが突進の軌道を修正する。左回転しながら左旋回し、ハルユキを跳ね飛ばそうと迫る。

「くおおおおおっ……」

飛び散る火花が装甲に弾ける感覚を味わいながら、ハルユキは全力で走る。バイクの回転に合わせて左へ、左へ。必殺技ゲージがないので飛行はできないが、広げた翼を舵代わりにして、円を描いて走る、走る。

「ぬおおおおっ……テラ・バワアアアッ……」

アッシュがスロットルを全開にするとVツインエンジンが吼え狂り、バイクは回転の速度を増した。その周囲を、ハルユキはかつてないスピードでダッシュし続ける。

——速く……もっと速く……!!

念じるほどにシルバー・クロウの走行速度は上昇し、白熱した両足の装甲からは光の粒子が飛び散る。やがてそれは半径七メートルの白い円となり、バイクの後輪から噴き出す赤い炎と二重の輪を作り出す。

……そういえば、普通の対戦で、こんなに真剣に走るのは久しぶりかもしれない。

決着の瞬間を間近に予感しながらも、ハルユキはふと考えた。

ここしばらくは飛ぶ時のスピードばかりを気にして、対戦の基本である地上での移動を意識しなくなっていた。しかし、いつのまにか、シルバー・クロウはこんなにも速く走れるようになっていたのだ。

更なるスピードを、システムの力を借りて追い求めるのは終わりにしよう。これからは、自

分の心の中に……デュエルアバターの素体の中に、それを探せばいい。

「お……おとおとおお——ッ!!」

雄叫びを上げながら、ハルユキは走る速さをもう一段引き上げた。

シルバー・クロウの走行スピードが、アッシュ・ローラーの回転スピードを凌駕したその瞬間、巨大な力を受け止め続けていたバイクのフロントフォークが真つ二つに折れた。

エンジンが地面に激突し、直後、大爆発。

爆炎に押し上げられ、夜空めがけて一直線に上昇しながら、アッシュ・ローラーが叫んだ。

「俺様たちの戦いは!! エターナルこれからだぜエ——ッ!!」

そして、まるで花火のように豪勢なパーティクルを散らして爆散した。

対戦を終え、環状七号線を横切る歩道橋の上で覚醒したハルユキは、アッシュ・ローラーの《リアル》が乗っているであろうバスを待つためにその場に留まった。

数十秒後、南から走ってきたEVバスが眼下右側の停留所に止まり、数人の客を乗せてから静かに発車する。歩道橋をくぐるバスを見送るべく振り返り向きかけたが、バスが去った後の停留所に残っている人影に気付く、慌てて身を翻す。

ハルユキに向けて手を振っているのは、半袖ブラウスの袖口にスカートと同じチェック柄が入った制服姿の女の子だった。ややくせ毛気味なショートヘアを見るまでもなく、つい数分前

まで戦っていた世紀末ライダーの妹、日下部輪であると解る。

歩道橋を降りようとするハルユキを両手で押し留め、階段を駆け上ってきた輪は、嬉々ような笑みを浮かべてびよこんと頭を下げた。

「おはようございます、有田さん」

「おはよう、日下部さん」

ハルユキも挨拶を返してから、軽く首を傾げる。

「今日は、どうしたの？」

「はい……あの、えっと……」

口ごもりながら時間を確かめた輪は、すまなそうな表情で言った。

「登校前に申し訳……ありません、ちよつと、お話……いいでしょうか」

「う、うん、もちろん」

と答え、急いで周囲を見回す。歩道橋上は、さほど多くはないが通行人もいるので、内密な話をするのには相応しくない——と思ったのだが。

「すみません……十分後のバスに乗らなくてはならないので、ここで……」

と細い声で言うと、輪はスクールバッグの中から小さな円盤状の物体を取り出した。何ぞやとしばし注視してから、ようやくそれがコードリール式のXSBケーブールであると気付く。

「えっ、でも、その……」

とハルユキがごもご言っているあいだに、輪はリールから小さなプラグを引っ張り出すと、それを自分のニューロリンカーに挿入した。もう一つのプラグを、顔を赤くしながらハルユキに差し出す。

パブリックスペースで直結している男女は付き合っている、直結ケーブルが短いほど親密な仲である——といった俗習は、最新モデルのニューロリンカーでばりばり仕事をする系の大人たちの間では「意識が低い」などと言われることも多くなってきたようだが、少なくとも中高生カルチャーではまだまだ現役である。しかし、最長一メートルから最短五センチにまで可変するコードリール式の場合はどうなるのだろうか……などと考えながら、ハルユキは受け取ったプラグをニューロリンカーに繋いだ。

直結警告が消えるや否や、頭を中心に輪の思考音声がかぶる。

「あの、こんな場所で……すみません。大切なお話が、あったのですから……」

「う、ううん、僕はずいぶん……」

気にしてないよ、と言うのもいかなものかと思ひ、語尾をフェードアウトさせてしまう。

すると輪は小さく微笑み、少しばかり距離を詰めた。二人の間にぶらさがるパステルグリーンのコードリールが、夏の朝日を浴びてきらきらと光る。

「そ……それで、大切な話って？」

今更のようにどきまじしながら訊ねると、輪はじつとハルユキを見詰め、真剣さの増した声

を響かせた。

「実は……兄から、有田さんに、伝言が……あつて……」

「で……伝言!? アッシュさんから!?」

危うく肉声で叫びそうになり、慌てて口を引き結んでから、脳裏で呟く。

「……さっきの対戦中に、直接言えいいのに……」

「キガ照れくさい……そうです」

「……………そ、そう……。——それで、伝言って……?」

ハルユキが訊ねると、輪は右手でそつと首許のニューロリンカーを触った。

メタリックグレーのシエルに桶巻形のクラックが走るそれは、彼女本来の持ち物ではない。バイクレースで事故に遭い、渋谷区の病院で二年間も眠り続けている輪の実兄、日下部輪太のものだ。

いかなるロジックによつてか、輪は兄のニューロリンカーを装着している時だけ、パーストリンカー（アッシュ・ローラー）として加速世界にダイブできる。加速中は兄・輪太が戦い、輪はそれをバイクのタンデムシートから見守っているような感覚らしいのだが、実際に輪太の魂が病院から転送されているのか、あるいは輪太とは輪の第二の人格でしかないのか、そこは定かではない。

ひとつだけ確かなのは、輪太は妹の輪を溺愛していて、ハルユキが輪に近づきすぎても、あ

るいは遠ざけすぎても激怒するということだ。今日の直結もアッシュはばつちり憶えていて、次の対戦では間違ひなく何か言われてしまうだろう。

もつとも、ハルユキも論も明日から夏休みで、火、木、土曜日のアシシクロ戦もしばらくはお休み——。

とそこまで考えてから、ふと気付いて訊ねる。

「あ……アッシュさんの伝言って、夏休み中のことかな？　曜日と時間を決めて、定期対戦を続けようとか？」

「いえ、そういうわけでは……あ、そうして頂ければ、私は嬉しい、ですけど……あつ、いえ、そうではなくて……」

再び頬をはんりのり染めながらそんな思念を伝達してきた論は、ふるつと頭を振ってから表情を戻した。

「——伝言は、今日の……領土戦について、なんです」

「……………!!」

ハルユキは、思わず眼を見開く。

アッシュ・ローラーは、前の日曜に行われた、緑のレギオンとの模擬領土戦に参加していた。ゆえにネガ・ネビュラスの港区第三エリア攻撃についても知っているわけだが、それにしても当日になっていったい何を伝えようというのか。

「あ……アッシュさんは、何て……？」

「えと……」

「……一瞬、口ごもる、というか思念を滞らせてから、論は更に五センチほど距離を詰めた。裾出しタイプのブラウスが揺れ、甘い香りが漂う。

当然どきまぎせざるを得ないハルユキだが、そんな気持ちも次の言葉で吹き飛んだ。

「……あの、兄は、領土戦前のレギオン会議に参加させて欲しい、と……」

「えっ……………」

「正確には、兄だけじゃなくて……ウーくんも、オリーくんも……」

「ええっ……………」

レギオン会議っていうのは、プロミネンスとの合併会議のことだよ……と仰け反りながら、アッシュ・ローラー、ブッシュ・ウータン、オリブ・グラブの三人チーム、その名も《ラフ・バレー・ローラーズ》の勇姿を脳裏に思い浮かべる。

今日は、お昼前に終業式が終わったら、ハルユキの自宅に楓子や調、ショコラたちも含めたレギオンメンバー全員が集まる予定だ。幸い、都大会を翌日に控えた剣道部も今日はミーティングだけだったので、タクムも一時ごろには合流できるらしい。

みんなでお昼ご飯を食べたら、二時からはいよいよプロミネンスとのレギオン合併会議だ。プロミネンスの領土である中野第一エリアと、ネガ・ネビュラスの領土である杉並第一エリア

の境界線近くに存在する大型商業施設、《中野セントラルパーク》にグローバル接続を切った状態で移動し、モールの館内ローカルネットにのみ接続する。まずマッチングリストを確認し、事前に打ち合わせた双方の出席メンバー以外のパーストリンカーが存在しないことを確かめてから、スカイ・レイカーとブラッド・レバードがスターターとなって対戦を開始し、他の会議出席者はギャラリイとしてダイブする予定だ。

つまり、輪やウータンたちもモールに来て貰えば会議に参加することは可能だが、いまから出席予定者の追加を要求し、しかもそれがグレート・ウォールのメンバーとあつては、プロミネンス側は警戒心を抱かせてしまうのでは――。

と、瞬時にそこまで考えてから、ハルユキはふと気付いて輪に訊ねた。

「あの、アッシュさんが参加したい会議っていうのは……？」

「えと……領土戦前の、ネガ・ネビュラスのミーティングのこと……です」

「そ、そっちなあ……」

ハルユキが肩の力を抜くと、輪は不思議そうな顔で瞬きする。考えてみれば、昨日決まったばかりのレギオン合併を輪もアッシュも知っているはずがない。

「ごめんごめん、ちよつと勘違いしちゃって……。えーと、ミーティングだけど、フルダイブ

とか対戦ステージじゃなくて、リアルでやることになってて……」

「ああ、それじゃ、参加は難しい……ですね」

輪は俯き加減になるので、ハルユキは急いで言い添えた。

「あの、輪さんだけなら大丈夫だと思うよ。もうみんなと何度も会ってるし」

「ありがとうございます、有田さん。……ただ、私だけだと、兄の目的は達せられないかも、しません」

「そっか……アッシュさんの目的って……？」

何気なく訊いたハルユキだったが、少し躊躇ってから輪が口にした言葉は、これが加速世界だったら驚きのあまり一メートルほどジャンプして歩道橋の手すりを乗り越えて道路に頭から落下してもおかしくないほど衝撃的なものだった。

「……兄は……今日の領土戦に参加するために、ウーくん、オリーくんと一緒にいったんグレート・ウォールを脱退して、ネガ・ネビュラスに加入したい……と……」

「……………は、はいいいいいい!？」

と肉声で絶叫したハルユキに、通りすがりのサラリーマンが怪訝な顔を向けていった。

午前九時から始まった終業式は、教頭による閉式の言葉、校長の式辞、部活その他の表彰、生徒会による活動報告、夏休みに関する諸注意、教頭による閉式の言葉という流れで進行し、九時五十分に終了した。チユリとタクムも壇上で地区大会の賞状――こればかりはまだ本物の紙でできている――を貰い、ハルユキは二人に向けて全力で手を叩いた。



その後は各教室でロングホームルームが行われ、担任教師の菅野から通知表が配付された。こちらはデジタルデータで、いつもはクリックするのにながりの精神的エネルギーを消費するのだが、今学期はテストの点がそこそこ良かったこともあって、それほど身構えずに中を見ることができた。

各科目の評価は体育を除いてそれなりに上昇していたのだが、ハルユキが嬉しかったのは、連絡事項欄に飼育委員会での活動について書かれていたことだった。夏休み中もホウの世話をしっかりやろう、と決意を新たにしたにつつ通知表のウインドウを閉じ、担任の「二年生の夏休みは大事な時期云々」というお決まりの訓示をじりじりしながら聞く。

長い話はロングホームルームの終了時間ぎりぎりまで続き、「それじゃあみんな、二学期に元気な顔を見せてくれ!」という少々暑苦しい台詞で締めくくられた。チャイムが鳴り、菅野が姿を消した途端、開放感に満ちあふれた空気が教室中に広がる。

クラスメートたちのほしやぎ声やガタガタと椅子が鳴る音を聞きながら、ハルユキは自分の席に座ったまま、胸いっぱい空気を感じ込み、ゆっくりと吐いた。

二年生の一学期は、本当に色々なことがあった。四月、一学年下の新入生としてハルユキの前に現れたダスク・ティカーこと能美征二に、加速世界でも現実世界でも絶望的な逆境に落とされた時は、未来が闇に閉ざされたように思えたものだ。

しかしニコや楓子、チュリ、タクム、そして黒雪姫に助けられ、能美との苦しい戦いに辛く

も勝利できた。六月初旬にはヘルメス・コードが実装され、大荒れのレースイベントを経て、楓子がレギオンに復帰した。

六月中旬にはその場の勢い、あるいはものの弾みで飼育委員会に立候補し、委員長まで引き受けてしまったことになるかと思つたが、そのおかげでホウと謡に出会うことができた。謡を無限EK状態から助けるべく帝城に突入し、そこでトリリッド・テトラオキサイドとも遭遇して、再会を約束した。

その後、ISSキット事件の最中に六代目クロム・ディザスターになってしまったりもしたが、目下部輪が体を張って引き留めてくれたおかげでどうにか自分を取り戻し、謡の浄化能力によって災禍の鎧の呪いを解いて、「ザ・デイスティニー」と「スター・キャスター」を封印することができた。

六月下旬にはウルフラム・サーベラスやショコラ・パペッターたちとの出会いがあり、月末の文化祭当日にアクア・カレント救出作戦と大天使メタトロン攻略作戦、そして加速研究会のアジトに拉致されてしまったニコの奪還作戦が立て続けに行われた。文化祭の終わり間際には白の王ホワイ・コスモスが姿を現し、加速研究会の会長であることを認めるという一幕もあった。

七月に入ってから、生沢真優に生徒会役員選挙への立候補を誘われたり、緑のレギオンとの模擬領土戦が行われ、最後の《四元素》だったグラファイト・エッジが姿を現したり、プチ・

バケの三人がネガ・ネビュラスに加入したりと色々なことがあった。二日前には、ハルユキは楓子とともに再び帝城に突入し、トリリッドと再会し、帰ってきたらニコとパドさんにレギオン合併の話を開かれ……そして今日、ついに白のレギオン(オシラトリ・ユニヴァース)との決戦に挑む。

決戦と言っても、ブレイン・バーストのシステム的には通常の領土戦と何ら変わらないので、ここで万が一敗れても即全損させられたりレギオンが消滅してしまったりするわけではない。しかし、白のレギオンのマツチングリスト連断特権を奪い、加速研究会の隠れ裏であることを暴露するという手段は二度と使えなくなる。研究会は、ニコから奪った(インビンシブル)のパーツとそれを宿すサーベラスを(災禍の鎧マークII)として育て上げ、加速世界に新たな——恐らくはISSキットの時よりも遥かに大きな破壊をもたらすだろう。

領土戦は、かつてないほど厳しい戦いになることは間違いない。しかし、勝たねばならない。ニコのために、サーベラスのために……そしていままでハルユキを助け、導いてくれたたくさんさんのバーストリンカーたちのためにも——。

「……くん。有田くん」

ちよいちよい、と右肩をつつかれ、ハルユキはびくつと臉を持ち上げた。

立っていたのは、帰りの支度を済ませた生沢真優だった。ハルユキと眼が合うとくすつと笑い、上体を曲げて囁く。

「夏休み中、選挙のことでいろいろ連絡すると思うけど、よろしくね」

「あ、う、うん、こちらこそ」

「四人目の仲間も、できれば七月中に決めたいから……これって人がいたら、教えてね」

「あ、う、うん、もちろん」

「じゃ、またね！」

たたつと走り去って行く真優を、「うん、ま、また」などと言いつつ見送っていると。

「……いまの、ドユコト」

という声が後方から降ってきて、恐る恐る振り返る。

そこに立っていたのは、こちらも帰宅の準備を終えたチユリだった。胡乱げな顔で見下ろされ、思わず「ち、ちやうねん」と答える。

「何がちやうのよ」

「いや、その……いまのは単なる業務連絡というか……ハウレンソウというか……それより、えーと、タクは？」

「もう部活行ったわよ。ミーティング終わったならそのままハルんち行くって」

「あ、そ、そう」

小刻みに頷き、手早く帰りの支度をして立ち上がる。時刻は十一時四十分。有田家でのレギオンメンバー合流は十二時を予定しているので、すぐに下校しないと間に合わない。

「よ、よし、急ぐぞチュ」

「あーのねえ！ 委員長とホウレンソウだかアスバラガスだかしてたのはハルじゃないの！」

「わー、もうこんな時間だあー」

「こら、誤魔化すな！」

などと言いつつ合い合いしながら教室を出て、下駄箱でスニーカーに履き替え、昇降口に向かうとした途端に後ろからチユリが襟首をがっつと掴む。

「ほら、上履き忘れてるよ！」

「あ……そ、そうだった」

持参したビニール袋に上履きを入れ、バッグに突っ込んで、改めて外に飛び出す。

真っ青な空から降り注ぐ日差しは、真夏の光をたっぷり含んで、ハルユキの眼を灼いた。

## 11

黒雪姫——ブラック・ロートス。

倉崎楓子——スカイ・レイカー。

四壁宮謡——アーダー・メイデン。

氷見あきら——アクア・カレント。

倉嶋千百合——ライム・ベル。

奈胡志帆子——ショコラ・パベッター。

三登聖実——ミント・ミトン。

由留木結芽——ブラム・フリッツパー。

日下部輪——アッシュ・ローラー。

一時に合流するタクムを除けば、十二時からのリアル・ミーティング兼お食事会に参加するのはこの九人のはずだった。

しかし、次々に登場するレギオン女性陣の迎え入れでてんやわんやになっていったハルユキは、ようやく全員がリビングルームに落ち着いたところで、ふと異変に気付いた。

くつつけたソファセットとダイニングテーブルで談笑する、いと華やかなりける人々の数を

キッチンの出口から「一、二、三……」と指折り数える。もう一度。更にもう一度。

「……………!?」

叫び声を上げそうになる口を、ハルユキは両手で塞いだ。

——十人いる!!

間違いない。ハルユキから見えて手前側に五人。ベランダ側に五人。キッチンの中に引込み、誰か数に入れ忘れたかと脳内で名前を列挙するが、どれほど記憶を絞っても関係者は九人までしか思い浮かばない。

その時、リビングでショコラ・バベッター——奈胡志帆子の声が響いた。

「お茶のお代わり持ってきますねー」

足音に続いてキッチンに姿を現した志帆子と眼が合うや、素早く手招きする。不思議そうな顔で近づいてきた彼女に、ひそつと囁きかける。

「ショコ、大変だ……十人いる!」

「へ? それがどうかしたの?」

「ほんとは九人のはずなんだ! 増えた一人はきつと、どっかのレギオンのソーシャル・エンジニアリングだ!」

「そーしやる……って何、カラス君?」

「えーと、ハッカーとかクラッカーが、現実世界でターゲットに直接接触して情報を取ること、

かな……いやいや、んなことゆつてる場合とちやうくて……」

そこで、不意に志帆子は何かに気付いたような顔をした。両側で結わえたお下げ髪を揺らし、咳く。

「あれ……変だな、黒雪さんから聞いてない?」

「へ? 何を?」

「あたし、ゆうべ連絡したんだけど……」

「は? 何を?」

ハルユキは身を乗り出したが、志帆子は何かを答える前に、リビングから黒雪姫の呼び声が届いた。

「ハルユキ君、ちよつと来てくれたまえ!」

「あ……えーつ……と……は、ハイ……」

嫌とも言えず、恐る恐るキッチンから出る。

警戒しつつ微速前進するハルユキを見て、黒雪姫が悪戯っぽい微笑みとともに言った。

「黙っていてすまない、キミがいつ気付くかと思つてな。実は、シークレット・ゲストを一人同行していたんだ!」

「げ……ゲスト、ですか……?」

どうやら敵対勢力の工作員に侵入されたわけではなさそうだと安堵しつつ、ソファセットの

上座に座る黒雪姫の隣まで移動し、女性陣の顔を順に確認する。

すると、確かに見知らぬ人物が一人、チユリと三登聖実の間に座っていた。

雰囲気からして年上——楓子と同学年くらいだろう。薄いブルーの半袖セーラー服は初めて見るデザインだ。長めの前髪をアシンメトリーに切り揃えていて、なかなかミステリアスな雰囲気を感じさせている。

色の薄い唇に笑みはなく、少々気圧されるものを感じながらも、ハルユキはぺこりと頭を下げた。

「あ、あの……はじめまして、ネガ・ネビュラスの有田春雪です……あ、アバターネームは、シルバー・クロウです」

すると、セーラー服の女性は斜めの前髪を揃らして会釈を返し、雰囲気によく似合っているハスキーボイスで名乗った。

「こんにちは、シルバー・クロウ。ワタシは小田切累」

「小田切……さん……」

やはり名前にも聞き覚えはない。しかし、どこかで会ったような感覚が湧き上がってきて、ハルユキは眉を寄せた。しかしその既視感は、次の言葉を聞いた途端、粉々に大爆発して吹き飛んだ。

「アバターネームは、マゼンタ・シザー」



「……」

「と絶叫して真後ろにひっくり返りかけたハルユキの背中を、その反応を予想していたらしい黒雪姫が右手でひょいと支え、再び立たせた。そちらに向き直り、両手をわたわた振り動かしながら喚く。」

「せつ、せんつ、せんばつ！ まつ、まませませませ」

「うむ……お昼は混ぜご飯もいいな」と黒雪姫が頷き、

「いいわね、ミウガと枝豆、大葉で夏らしくして……」と楓子が提案し、

「あつ、それおいしそう！ お魚もほぐして入れようよ！」とチユリが手を挙げ、

「UIV なんだか、おながが空いてきたのです」と諷刺コメントしたところで、ハルユキはようやく脳の再起動に成功した。

「ま……マゼゴハ……じゃない、マゼンタさんが、どうしてここに!?」

もういちど叫ぶと、ようやく小田切果と名乗った女性の表情が動いた。唇の両側がきゅつと持ち上がるコケティッシュな笑みは、確かにあのハサミ使いアバターと共通するものだ。

「アッチ側とキヤラクターはまったく一緒ね、シルバー・クロウ」

「は……え、そ、そうですか……?」

「ワタシが今日お邪魔したのは、チヨコちゃんたちにスカウトされたからよ」

「あ……そ、そうだったんですか……って、す、スカウト!?」

ぎゅんつと振り向き、キッチンから姿を現した志帆子を凝視する。

かつてマゼンタと激闘を繰り広げたはずの志帆子は、ハルユキと眼が合うやテヘへと笑った。代わって、プチ・パケ組の頭脳担当であるらしい結芽が眼鏡を押し上げながら発言する。

「えーとお、ちよつと先走っちゃった感はないにしてもあらずなんですけどー、私たち、昨日、世田谷第五エリアまでマゼンタさんに会いに行つて、一緒に戦つてくれるよう頼んだんですー。」

まあ、色々あったんですけど、最終的にはこういうことに……」

「ちよいちよおーい!」

と叫んだ志帆子が、駆け寄ってきて結芽の頭にチョップを決める。

「あいてつ」

「こらユメ、肝心なところを飛ばさないでよね! わたし、超がんばったんだから!」

「……………」

ハルユキが首を傾げていると、マゼンタこと果がふつと微笑む。

「チヨコちゃんは、タッグを組んでるワタシとアポに一人で乱入してきて、判定勝ちしたの」

「へ、へえーっ!」

これには素直に驚くしかない。シヨコラ・パベッターはレベル5、片やマゼンタ・シザーは6でアポカド・アポイダは5だったはずだ。合計レベルが倍以上のタッグにソコで勝利すると

いうのは大金屋以外の何ものでもない。

しかし志帆子は、再び照れくさそうに笑いながらかぶりを振った。

「ううん、実際には、アボカドさんと一対一で戦っただけだから。——でも、ソロの対戦で、あんなに一生懸命になったのは初めてな気がする」

「そっか……」って、あれ、そのアボカドさんは来てないの……？」

ハルユキが視線を志帆子から移動させると、果は艶やかな黒髪を揺らして答えた。

「残念だケド、アボは世田谷から動けないの。もう長いコト、入院してるから」

「入院……」

呟いたハルユキをちらりと見てから、果は隣の聖夫に訊ねる。

「ミントちゃんなら知ってると思うケド……砧公園の隣に、大きい病院があるでしょ？」

「あ……はい、子供の医療に力を入れてるところですよ」

「そう。元々は《国立小児病院》で名前前で、いまは《国立成育医療研究センター》。ワタシとアボは、ソコで出会ったの」

マゼンタの言葉に、聖が素早く指を動かした。

「UIV 私も昔、失語症の検査で何度か行ったことがあるのです」

「じゃあ、メイデンとはニアミスしてたかもしれないわね」

果は、淡い微笑みを浮かべてそう応じてから、言葉を続けた。

「……アボの病気は、命にかかわるようなモノじゃないわ。ただ、病名は、ワタシの口からは言えない。本人はネガ・ネビュラスのメンバーにスゴク会いたがってたから、いつか、世田谷第五まで来てくれると嬉しい」

「ああ……もちろんだ。その時は、彼もレギオンに勧誘させてもらおう」

黒雪姫が答えると、果は謝意を示すように頭を下げる。

その様子を見詰めるながら、ハルユキはどうしても考えずにいらなかった。病院で出会ったということはすなわち、果にも通院、あるいは入院する理由があったということだ。

と、ハルユキの内心を読み取ったかのように、果が視線を向けてきた。斜めに切られた前髪は右眼をはば完全に隠して、左眼だけが強い光を湛えている。

再び微笑を浮かべると、果は唇を開いた。

「……何年前、成育医療研究センターに、小規模なレギオンが誕生した。アソコには、病気が理由で、生まれてすぐにニューロリンカーを着けさせられた子供が少なからず入院したり、通院したりしてたから。ワタシもそう……」

一瞬言葉を切り、果は自分の両手を見下ろす。

「……ワタシの病気は《ゲルストマン症候群》というモノで、ワタシの症状は《手指失認》と《左右失認》……自分の指が識別しづらいコトと、左右が解らなくなっちゃうコト。ニューロリンカーがあれば、指や手にマーカーを表示できるケド、それでも何度か思ったわ。手なんか



一つでいいのに、指なんか一本でいいのに、って」

累の華奢な両手を見ていたハルユキはふと、彼女の右手首を、薄いがギザギザとした傷痕がぐるりと取り巻いていることに気付いた。まるで、右手を、大きなハサミで切り落とそうとしたかのような――。

「……………マゼンタさんが、『一つで一つのものが嫌い』って言ってたのは……………そのせい、なんですか？」

無意識のうちに、ハルユキはそんな問いを口にしていった。不機嫌なことを聞いてしまったかと内心慌てるが、累は表情を変えることなく頷く。

「それもあるわね。箸や匙、ハサミ……………それに人間の腕は、ソコに存在するタケで《左右》を生み出すから。幼稚園で箸の使い方を教わった時なんか、右側の箸を右手の人差し指と親指、中指で挟んで、左側の箸は親指と中指、薬指で挟んで……………トカ言われて頭がどうにかなりそうだったわよ」

ふふつと微笑むと両手を膝に落とし、累は静かに語り続けた。

「……………だから、病院で知り合った子にブレイン・パーストを賣って、自分のデュエルアバターに腕や指が普通についてた時はちよつとガツカリしたわ。でも……………いちばんガツカリしたのは、ワタシの他のパーストリンカーたちが、最後に仲間になったアボを、外見を理由に虐めたこと。コレじゃ、外の世界と変わらないと思った。でもワタシには、レベルが上の彼らを止める力は

なかった。だからISSキットを手に入れて……………アボの《親》とワタシの《親》を含む、医療センターのバーストリンカーたちを全損させた」

累の独白に、一同は無言で耳を傾けた。小規模コミュニケーションの内紛と瓦解は、加速世界でも決して珍しい話ではない。しかし彼女は、ただ状況に流されたのではなく、自らの意志で力を求め、力行使したのだ。

「……………そのコトを、後悔はしてない。ケド……………ワタシが加速世界を変えられと思ったISSキットの力を、アナタたちは凌駕してみせた。だからワタシは、アナタたちの戦いを最後まで見届けたい。許されるのなら、もういちど、今度は隣で戦ってみたい。もちろん……………アレだけのことをしたワタシを、アナタたちが受け入れてくれるのなら……………だけれど……………」

累が口を閉じて、しばらく発言しようとする者はいなかった。

ハルユキは、そつと顔を動かし、累から最も遠いダイニングテーブルの端に座っている輪の様子を見やうとした。

輪の《兄》であるアッシュ・ローラーは、先月末の文化祭の前日、マゼンタ・シザーの手でISSキットを強制的に寄生させられた。キットからの精神干渉に苦しむ輪を助けるために、アッシュは一時、《断罪の一撃》による加速世界からの退場まで覚悟したのだ。

精神干渉が深刻なことになる前に、からくもキット本体を破壊できたのだが、輪とアッシュが辛い思いをしたことは間違いない。輪は、マゼンタの言葉を、どのように受け止めたのだろ

うか。

その時、ずっと俯き加減だった輪が顔を上げ、ハルユキを見た。

いつもの柔らかい笑みを浮かべ、ゆつくり頷くと、体を反らして思い切り息を吸い――。

「終わったことにフォーエバーとらわれてんじやナッシ――」

突然の叫び声に、全員がうわつと仰け反る。

そんな中、恥ずかしそうに頬を染めた輪は、首を縮めてか細い声で続けた。

「……って、兄なら言うと思ひます。確かに兄……アツシュ・ローラーは、マゼンタさんと

戦って、ISSキットを装着させられました。でも兄は、ISSキットの並列回路を通して、

何かを感じたんだと……思っています。自らISSキットの力を求めてしまったウータンさんや、

オリブさん……それに、マゼンタさんたちの想いを……」

小田切果は、アツシュ・ローラーと目下部輪の不可思議な関係を知らないはずだが、しかし

何も訊ねようとはせずに顔を伏せた。薄傷の残る右手を見下ろし、五本の指をそつと閉じる。

「……バーストリンカーが十人いれば、十通りの正しさがある」

突然、黒雪姫が毅然とした声を響かせた。

「我が師、グラファイト・エッジはかつてそう言った。当時の私は、またあいつのカッコツケ

が出たと思つて聞き流していたが……いまになって、そういうものなのかもしれないと思う。

言うまでもなく、レベル10を目指す私の《正しさ》は、他の王たちにとっては《間違ひ》に他

ならないのだし……我々が間違ひしていると信じる白の王や加速研究会の行いも、彼らにとつて

は揺るぎない正義なのかもしれん。そう……だから私は、マゼンタ・シザーのしたことを、悪

だと断罪するつもりはない。自分ひとりを利するためでなく、多くのバーストリンカーたちの

ためにしたことなら、なおさらな……」

その言葉を聞いた果が、きゅつと下唇を噛み締めた。

瞳を閉じ、眉間に小さな谷を刻んで、三秒ほどそのままだったが、すぐに体の力を抜いた。

いままでどおりのクールな表情――いや、これまではなかった強い意志の光を左眼に宿して、

黒雪姫に体ごと向き直る。

「黒の王――ブラック・ロータス。ワタシとアボカド・アボイダに、レギオンメンバーとして

共に戦うコトを、許してほしい」

頭を下げ、両手を持ち上げ、一瞬迷うような仕草を見せてから二本の手をそのまま前に差し

出す。

「――許すことはできない」

黒雪姫は、静かにそう告げてから、柔らかい微笑を浮かべて続けた。

「なぜなら私も、仲間たちも、君に許しを求められる理由は一切ないからな。――こちらこそ、

よろしく頼む、マゼンタ・シザー。大きな戦いを前にして、君のような心強い仲間がレギオン

に加わってくれたことを嬉しく思う」

最後にもういちど微笑み、黒雪姫も両手で黒の手を取り、しっかりと握った。頭を下げたままの黒の顔は、垂れ下がった長い前髪にほぼ隠れていたが、それでも薄い唇が何かに耐えるように引き結ばれている様子がハルユキにも見て取れた。彼女が耐えているものが、怒りでも悲しみでもないことだけは確かだと、ハルユキは思った。

有田家ホームネットを介した、黒雪姫と小田切果の通常対戦——残念なのかほとすべきか、英気を奮えておくために実際の戦いは行われなかった——によってレギオンへの加入手続きが終了すると、一同は昼食の準備に取りかかった。

何せ、女性陣十名プラス男性一名、それに一時から合流するタクムを加えて合計十二名という、これまでで最大規模の食卓だ。ハルユキは「冷凍ビザいっぱいありませう」と真摯な提案を行ったのだが、チユリにすぐさま拒否されてしまう。

「あのねえ、あたしたちはもうすっかり混ぜご飯モードなの！」

「さ、さいですか……でも、ご飯だけってわけにも……」

「まーそうだけど……混ぜご飯をおにぎりにすれば、おかずをもう一品と、あとは汁物くらいでいいよね、お昼だし。ういちゃん、何がいいかなあ？」

「UIV そうですね……汁物は夏らしく、そら豆の和風ポタージュとかいかがでしょうか」「おお、最近の小学生は小洒落たレシピを知ってますなあ」

チユリが話を後から捕獲し、はつべたを両手で高速ぶにぶにする。

「UIV やmできだXさい」とチャットで悲鳴を上げる様子を鑑賞しつつ、

「で、もう一品のおかずは？」と訊ねると、意外なところから声が上がった。

「からあげ」

「へっ……」

発言者のあきらを見ると、ミーティング中は沈黙を守っていた《用心棒》は、たいへん真剣な顔で繰り返した。

「おにぎりには、からあげなの」

全員、無言で頷くしかなかった。

献立が決定したので、ハルユキは買い出し部隊の隊長を引き受けてモールの食料品売り場へと急いだ。黒雪姫作のショッピング効率化アプリの威力で、多岐に亘る買い物リストをわずか五分でクリアし、ついでにバタフライ・ポイントを一点獲得して自宅に戻る。

そこからは、ハルユキにはほとんど出番はなかった。何せ、有田家のLDKは十人にも及ぶ女子たちでこった返しているのだ。何かあって母さんが帰ってきたらどうなってしまうのだろう、などとおのきつつそら豆の薄皮を剥く。

ともあれマンパワーというのは偉大なもので、午後一時にタクムが玄関チャイムを鳴らしたのとほぼ同時に、テーブルには（ほぐし鰯と枝豆、ミョウガ、大葉の混ぜご飯おにぎり）、（そ

ら豆と豆乳の冷製和風ポタージュ、《山盛りトリ唐揚げ》というメニューがビールと並んだ。ハルユキの後からリビングに足を踏み入れたタクムは、ひしめく女性陣とうずたかい唐揚げを見るや、呆然と立ち尽くした。

「……ハル、なんて言うか……現実とは思えない状況なんだけど……」

そんな呻き声を漏らす幼馴染に、「まだビビるのは早いぞタク」と囁き返し、小田切累を手招きする。

二人が向き合うと、咳払いをひとつしてから右手で紹介する。

「えー、小田切さん、こいつが、黛拓武……シアン・パイル」

「……はじめまして。リアルで会えて嬉しいわ」

例のマゼンタ・スマイルを浮かべる累に、タクムは怪訝な顔で会釈を返す。再び咳払いすると、今度は左手を持ち上げる。

「で、タク、こちらが新しくレギオンに入った小田切累さん……マゼンタ・シザー」

「どうも、はじめまして……」

と右手を差し出してから、タクムが珍しく「まじえんざつ!?」というような怪音を発しつつ仰け反った。

歴史と伝説あるネガ・ネビュラスごはんの会でも前代未聞の十二人ということで、料理長のチユリと副料理長の謡は充分以上の量を作ったつもりだったようだが、おにぎりとポタージュ、

唐揚げは二十分後には綺麗に消滅してしまった。

とはいえ足りなかったわけでもなく、皆が満ち足りた表情で「ごちそうさま」を唱和し、協力して後片付けを済ませると時刻は午後一時三十分となった。

全員をリビングに集め、レギオンマスターの黒雪姫とサブマスターの楓子がペランダを背に並んで立つ。

「最初に確認しておくが、梅郷中以外の学校に通っているメンバーも、全員今日が一学期の終業式だったと思っているいな？」

黒雪姫がまずそう問うたので、楓子と謡、累、繪、あきらが揃って頷き、三人組を代表して志帆子が「いいですー」と声を上げる。

「うむ。それでは、この場の全員が明日から夏休みなわけだ。皆、いろいろと楽しみな予定もあるだろう。もちろん私にもある……」

そこで一瞬だけハルユキに視線を向けてくるので、僕も山形旅行が楽しみです！と思念で答える。伝わったかどうかは定かでないがさすがに微笑み、黒雪姫はスピーチを続けた。

「その夏休みを、楽しく充実したものにするために、今日のオシラトリ・ユニヴァースとの領土戦には絶対に負けられない。残念ながら私は杉並エリアの防衛に残る予定だが、頼もしい仲間も増えたことだし、皆が必ず目的を果たしてくれるものと信じている。どうか——宜しく頼む」

黒雪姫が頭を下げると、隣の楓子が右拳を高々と掲げた。  
 「みんな、サッちゃんに勝利を報告できるように、頑張りましょう！」  
 おお——!! という十人の唱和が、広いリビングルームいっぱいに響き渡った。

午後一時四十分。

現時点で総勢十一名——大天使メタトロンを加えれば十二名となったネガ・ネビュラスは、システムのにはまだグレート・ウォールに所属している日下部輪を加えた一団となつて、有田家から出撃した。

と言つても、これまでのミッションのように、無制限中立フィールドへダイブしたわけではない。玄関で順番に靴を履き、二列でマンションの共用通路を歩き始める。

最初の目的地は、JR中野駅の近くにある総合商業施設、中野セントラルパーク。道なりで約千二百メートル離れているが、徒歩でも十五分あれば到着できる。

集団の最後尾をタクムと並んで歩いていると、幼馴染が小声で言つた。

「……ハル、これはそろそろ、我がレギオンの男女比の甚だしい不均衡について真剣に考えるべき時かもね……」

「全面的に同意……」

と答へつつも、六種類にも及ぶバリエーション豊かな制服姿の——あきらだけはいつものジ

ーンズ姿だったが——女子たちが連れ立って颯爽と歩くさまはまるで映画のようで、こっそり録画しておきたいような気がまったくないと言えば嘘になると言わざるを得ない。

「……あ、でも、もうすぐやや改善されるかも」

呟き、すぐ前を歩く日下部輪のシャツの裾をちょよいと引つ張る。振り向く輪をそのまま女子集団から離脱させ、小声で訊ねる。

「あの、日下部さん。ウータンさんと、オリーブさんは大丈夫そう……?」

「あ……はい。もう、中野第一エリアのどこかで待機しているはず……です」

「そっか。じゃあ、あとは加入手続きだけだね」

二人の会話を隣で聞いていたタクムが、不思議そうに首を傾げる。そちらには「あとで説明するから」とだけ囁き、しばし考えを巡らす。

アツシュ、ウータン、オリーブ三人組からのネガ・ネビュラス加入の申し出は、すでに黒雪姫にも伝えてある。正確には、彼らが希望しているのは加速研究会との戦いが決着するまでの時限移籍ということだったが、黒雪姫も迷わず了承した。戦力はいくらあっても多すぎるということはないし、アツシュたちならスパイの可能性を疑う必要もない。

「……考えてみれば、ここ一週間で、ずいぶん仲間が増えたよな……」

エレベーターを待ちながら、ハルユキは半ば独り言のように呟いた。

プチ・パケ三人組。マゼンタ・シザート、加入はまただがアボカド・アボイダ。アツシュた

ち三人組。メタトロロンも加えれば、総勢十六人にもなる計算だ。更に、ハルユキが連絡を待つている、この上なく頼もしいもう一人――。

そして、ネガ・ネビュラスは、十数分後にプロミネンスとの合併交渉に臨む。全て問題なく承認されれば、一気に五十人近い規模の新レギオンが誕生する。もはや他の王たちのレギオンと比べてもまったく遜色のない戦力だ。

もちろん、レギオンが大きくなることに不安はある。急造の大組織がちゃんとひとつにまとまるのか、意見の対立から再び分裂を招いてしまうのではないのか……。

――いや。

――僕が本当に恐れているのは、いまのこぢんまりとして居心地のいいネガ・ネビュラスがなくなってしまうことだ。レベルも実力も上のバーストリンカーたちの中で埋没し、シルバー・クロウが居場所を失ってしまうことだ。

この上なく利己的で、身勝手な不安。しかし、そんな気持ちが心の片隅に存在することを、決して否定はできない……。

「……………ハル」

不意に、耳の近くでタクムの囁き声が響いた。

「最初はハルとマスターのたった二人だけだったネガ・ネビュラスを、ここまで大きくしたのは君だよ。君が一生懸命頑張ってきたから、こんなにたくさんさんの人が黒の旗の下に集ったんだ

……………それは、ぼくも例外じゃない」

「……………オレは、ただ、無我夢中で……………」

ぼそりと答えると、背中をどんと力強く叩かれる。

「なら、これからもうすべいいじゃないか。まだまだ目指すものはたくさんあるんだろ？ ずっと遠くの目標に向かって、脳目もふらずに飛び続ければいい。そうすれば、ぼくは……………みんなは君を追いかけよう。いつまでも」

「……………そう言われるとなんか背中がこそばゆいけど……………でも、確かに、立ち止まってるヒマなんか少ないよ……………。まずは、今日のオシトリ戦で、全力を尽くさないと……………」

そう答えると、ハルユキは左手で、取得したばかりのレベルアップ・ボーナスが装着されるはずの場所にそっと触れた。

レギオンがどんなに大きくなっても、その中心に黒雪姫が存在することは永遠に変わらない。暗黒星雲の中心で、巨大な引力を放つはじまりの恒星のように。

エレベーターが到着し、十二人はすし詰めにしながらもどうにか一度に乗り込むと、地上へと降下した。

土曜昼過ぎのショッピングモールは大いに賑わっていたが、学年も制服もまちなな集団はひとときわ人目を引くようだった。しかし女性陣はまったく気にする様子もなく、最後尾に男子二名を引き連れながら堂々とガレリアを縦断すると、エントランスホールの隅でいったん立ち

止まった。

大屋根を出た先に広がる赤煉瓦敷きのフロントガーデンは、真夏の陽光を浴びて白く輝いている。あの光の先に、レギオンの未来を決める合併会議と——オシラトリ・ユニヴァースとの決戦の地が待つ。

黒雪姫が、黒髪をふわりと翻して振り向いた。強い日差しを背負って立つその姿は、輪郭が臘気に輝いて、まるで光のオーラに包まれているかのようにだった。

レギオンマスターは、一同を順に見ると、凜とした声を響かせた。

「では——行こう！」

あとがき

『アクセル・ワールド19 暗黒星雲の引力』をお読み下さってありがとうございます。  
 という恒例の一文を書いてから、「あれ……ほんとに19巻だった？ 17くらいじゃなかった  
 っけ？」と思って確認したんですがやっぱり19巻でした。いやー、いつの間にやらずいぶん巻  
 を重ねてしまいましたね……。

現在進行中の《お姉さん編》、もとい《白のレギオン編》が始まったのは17巻なので、それ  
 からもすでに三冊目ということになります。ようやくもろもろの準備が終わっていいよ決戦  
 ということになりましたが、なんとか次の巻で決着をつけられるといいなーと思っております。  
 （以下、本文の内容に触れておりますのでご注意ください！）

この19巻では、ネガ・ネビュラスを取り巻く状況が大きく変化しました。初期の構想では、  
 種子たち《四元素》のあともじわじわとレギオンメンバーが増えていくような流れを想定して  
 いたのですが、なぜかこの巻で一氣に加入、ということに……。本文中でタクムも言っていま  
 すが、レギオン内男女比の不均衡がいよいよデンジャラスな感じになってきてしまったので、  
 そのへんも今後バランスを取っていきたいです。そう簡単に取れる気はしませんが（笑）。

もっともお隣さんレギオンとの合併が成立すれば、名簿上はM型もかなり増えるはずなんで  
 すが……。とりあえず、表紙にもようやく《三獣士》の残り二人ことカッシーくんとボツキ

ーさんが登場しております。心強い味方となってくれると思いますので、応援よろしくお願  
 います！

さて、この19巻の発売に先駆けて、『電撃文庫 秋の祭典2015』にて発表されたと思  
 いますが、アクセル・ワールドの新作アニメーションがつくれることになりました！ 制作は  
 もちろんサンライズ第8スタジオさま、メインスタッフ諸氏もテレビアニメ版から引き続き  
 参加してくださいまして、企画実現にご尽力頂いた関係者の皆様と、そしてもちろんいままで  
 アクセルを応援してくださった読者の皆様に深く感謝いたします。

内容に関してはこれから各媒体にて発表されていくと思いますが、時系列的にはいまやって  
 いる《白のレギオン編》の少し未来のお話になります。パッケージの発売に先行して劇場公開  
 も行われる予定ですので、どうぞ大画面でお楽しみ頂ければ幸いです。

ピーンと増えた女性キャラ陣を口絵見開きでピーンと描いて下さったイラストのH I M A  
 さん、タイトロープなスケジュールを華麗に管理して下さいる担当の三木さん、今回もありが  
 うございました。それでは皆様、20巻でお会いしましょう！

二〇一五年九月某日

川原 礫



# 「これは、ゲームであっても

自身の仮想体(アバター)の死が現実の死となるデスゲーム《ソードアート・オンライン》に  
一万人のプレイヤーが閉じ込められてから、五十二日が経過した。

このゲームから生き残る道は唯一つ、

ゲームの舞台である巨大城《アインクラッド》最上第一〇〇層のボスを倒すこと。

現在の層は、二〇二二年十二月二十八日。

ログイン後二ヶ月弱を経て、

攻略の最前線メンバーであるキリトとアスナは

第五層へと到達していた。

ベータテスト時からその姿を大きく変え

《水路エリア》となっていた第四層とは異なり、

第五層はキリトも既知の《遺跡エリア》が広がっていた。

迷路のような街並みと

極端に森や川などの自然が少ないこのエリアで、

キリトとアスナはゲームの醍醐味でもある

《遺物拾い》をこなし、

アイテムやコル(お金)を稼いでいく。

一度第四層に戻り、

ダークエルフの城主ヨフィスから

《クエスト報酬》をもらったのち、

続いてキリトは街の地下墓地で発生する

小規模な《クエスト》のクリアを提案する。

アスナも賛同するが、それが彼女の不幸の始まりだった。

そのクエストには、強力なレイピア使いである

アスナがもっとも苦手とするモンスターが登場するからだ。

そう、墓地といえば――

果たして、アスナは恐怖心を克服し、第五層を攻略できるのか……？

# 遊びではない」

— オープンプログラマー・茅場晶彦

「……別にこれ、  
デートとかそういうんじゃないからね」



## 電撃文庫 ソードアート

## ・オンライン

イラスト/abec

個人ウェブサイトながらも、  
閲覧数650万PVオーバーを記録した伝説の小説！

最新『プログレッシブ』第4巻は、電撃文庫にて  
2015年12月10日発売——！！

発売中!!

電撃コミックス「ソードアート・オンライン アインクラッド」全2巻(作画/中村鈴子)

電撃コミックス「ソードアート・オンライン フェアリー・ダンス」全3巻(作画/葉月 翼)

電撃コミックス NEXT「ソードアート・オンライン マザーズ・ロザリオ」①②巻(作画/葉月 翼)

電撃コミックス NEXT「ソードアート・オンライン ガールズ・オブス」①②巻(作画/猫猫 猫)

電撃コミックス NEXT「ソードアート・オンライン フantom・バレット」①②巻(作画/山田孝太郎)

電撃コミックス NEXT「ソードアート・オンライン プログレッシブ」①～④巻(作画/比村奇石)

電撃コミックス NEXT「ソードアート・オンライン キャリバー」全1巻(作画/木谷 雄)

電撃コミックスEX「ソードアート・オンライン」①②巻(作画/南十字星)

原作/川原 礫  
キャラクター  
デザイン/  
abec

※「ソードアート・オンライン マザーズ・ロザリオ」「ソードアート・オンライン ガールズ・オブス」「ソードアート・オンライン フェantom・バレット」は、「電撃文庫 MAGAZINE」(偶数月10日)にて連載中! ※「ソードアート・オンライン プログレッシブ」は、「電撃G'sコミック」(毎月30日頃発売)にて連載中!